群馬県前橋市

吾妻遺跡

1998

県立しろがね学園遺跡調査会

群馬県前橋市

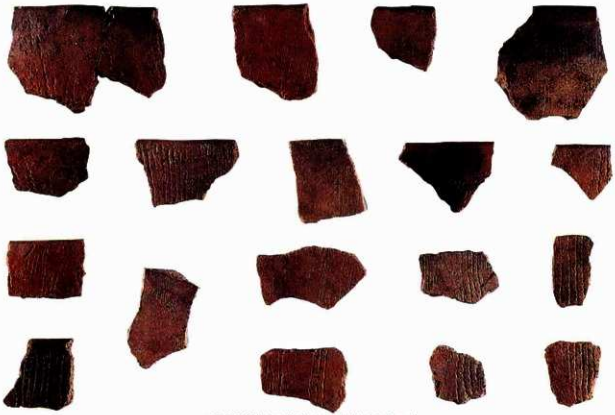
吾　妻　遺　跡

1998

県立しろがね学園遺跡調査会

巻頭写真

遺跡全景（北方に赤城山を望む）



2号住居跡出土撚糸文系土器（S≒1/2）

序

県立しろがね学園が前橋市・伊勢崎市・赤堀町の２市１町が接する地に移転されることになりましたが、当地はふれあいスポーツプラザの建設に伴って発見・調査された県内屈指の旧石器時代の遺跡として著名な下触牛伏遺跡や未完の大用水路である国指定史跡女堀跡に隣接しているため、工事に先立って群馬県の依頼を受けた当会が埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。その結果、７世紀代の古墳群や縄文時代早期の竪穴住居跡が発見されるなど、予想を上回る貴重な成果を得ることができました。２年にわたる調査・整理期間を経て、ここに発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

本書の刊行にあたりまして、御指導・御協力をいただきました関係各位に心より御礼申し上げますとともに、本書が広く生涯学習・地域研究の材料として活用されますことを願い、序といたします。

平成10年３月

県立しろがね学園遺跡調査会
会長　荒畑大治

例　言

1．本書は、群馬県前橋市東大室町178－1他に所在する菅妻遺跡の発掘調査報告書である。なお、菅妻遺跡の調査に並行して佐波郡赤堀町大字下触字牛伏に所在する下触牛伏遺跡の調査を実施しており、その調査報告を付章として併載した。

2．調査は、県立しろがね学園移転建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。

3．調査は、群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課に事務局を置く県立しろがね学園遺跡調査会が実施し、調査実務は同調査会から委託を受けて山武考古学研究所が行った。

4．発掘調査期間・面積・担当者は下記の通りである。

調査期間：平成8年10月21日～平成9年3月30日

面　　積：12,152㎡

担 当 者：矢島博文・川井　創・小村正之（山武考古学研究所以）

5．発掘調査における測量基準点・水準点の設置及び遺跡全体測量は開成測量に、航空写真撮影は青高館に、自然科学分析は古環境研究所に委託した。

6．遺構写真は主に矢島が撮影した。

7．本書の編集は山武考古学研究所が行い、同所員・長井正欣が担当した。執筆分担は下記の通りである。遺物写真は長井が撮影した。

第1章：高島英之（群馬県教育委員会文化財保護課主任）

第2章～第4章・第6章・付章：長井正欣・矢島博文

第5章：古環境研究所

8．調査に関わる資料は一括して前橋市教育委員会が保管している。

9．本報告書作成に際して、縄文時代早期の土器・石器については中隆之氏（群馬県教育委員会文化財保護課長補佐）にご教示いただいた。また、発掘調査から報告書刊行に至るまでに下記の諸機関・諸氏にご指導・ご協力をいただいた。（敬称略）

群馬県保険福祉部障害政策課　群馬県教育委員会　前橋市教育委員会　群馬県古墳時代研究会

加部二生　小菅将夫　志村　哲　津島秀章　前原　豊

10．調査参加者は下記の通りである。

【発掘調査】

田中米一　中野利一　吉田新一郎　関口治郎　山田隆　渡辺武江　田村きみ　土屋ケサミ　田村よし

吉田とみ子　高橋トク子　大河原初枝　斉藤吉江　黒沢とき　神宮政江　吉田芳江　斉藤寿美江

吉田範子　福島逸司　蛭川富太郎　蕃合忠雄　遠藤芳雄　吉岡聡　室橋美智子　鹿野ふく　織間芳江

小笹隆子　糸井英子　松倉菊江　糸井ふみ　大野京子　松倉あき　原島サイ　落合高男　木村はる

関口みよ子　鹿沼国蔵　川島勝治　清水とも子　諸田勢男　下山清保　五十嵐幸子　須藤かずえ

糸井政子

【整理調査】

磯洋子　今成勝子　半澤利江　吉木千賀子　石田満理　根津珠代

凡　例

1．本書で使用した地形図の発行者・縮尺は各図キャプション脇に示した。

2．遺構の記載について

(1) 縮尺・方位

遺構挿図の縮尺は、全体図を1/1,000とし、各遺構は旧石器時代試掘坑を1/60、縄文時代の2号住居跡を1/80・1/120、土坑を1/60、古墳平面図を1/100・1/200、古墳土層図・エレベーション図を1/60、平安時代の1号住居跡と古墳時代後期の ド触牛伏遺跡1号住居跡を1/60、カマドを1/30で掲載した。なお、各挿図にはスケールを付してある。また、図中の北方位は座標北を示す。国家座標値（第Ⅸ系）は全体図に示してある。

(2) 計測値

遺構の規模は基本的に中軸線上で計測し、竪穴住居跡は壁面下端で、土坑は上端での数値である。床面積は原図をもとにデジタルプラニメーターを用いた3回計測平均値である。遺構の深さ（残存深度）は確認面から床面・底面までの深さを示す。長(主)軸方位は座標北を基準とした振れを示している。土層図・エレベーション図の基準線数値は標高を示す。

(3) 記号・スクリーントーン

遺構挿図中に示したドット記号は土器等の出土地点を示す。縄文時代の2号住居跡遺物出土状態図に使用したドット記号については、その意味を挿図中に示してある。スクリーントーンは次のような意味を示す。

…硬 化 面　…焼土範囲　…粘　　土

3．遺物の記載について

(1) 縮尺・遺物番号、等

各遺物は、1/1～1/6縮尺の範囲で掲載し、挿図中にスケールを付してある。遺物写真は遺物挿図とはほぼ同縮尺である。遺物番号は本文・挿図・観察表・写真図版とも一致する。

(2) 遺物観察の記載

出土遺物の計測値や観察事項は巻末観察表にまとめた。

計測値で（　）で示したものは推定値、数値の前に「残」のあるものは残存値である。土器・土製品等の色調は『新版標準土色帖』(16版，1995，財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて観察した。

土器・土製品の胎土はルーペを用いて観察し、観察表凡例に示した基準で分類した。石器は観察表凡例に示した基準で分類し、重さは基本的にデジタルバネ秤で計測した。

(3) スクリーントーン

遺物挿図中に使用したスクリーントーンは次のような意味を示す。

…使用による平滑範囲　…施釉範囲　…黒色処理　…煤

目　　次

巻頭写真
序
例言
凡例

第１章　調査に至る経緯 ……1
第２章　遺跡の位置と環境 ……3
第３章　調査の方法と経過
　第１節　発掘調査 ……6
　第２節　整理調査 ……7
第４章　遺構と遺物
　第１節　概要 ……9
　第２節　基本層序 ……10
　第３節　旧石器時代 ……11
　第４節　縄文時代 ……25
　第５節　古墳時代 ……64
　第６節　平安時代 ……76
　第７節　遺構外出土遺物 ……79
第５章　自然科学分析
　第１節　土層とテフラ ……88
　第２節　植物珪酸体分析 ……91
第６章　まとめ ……96
付　章　下触牛伏遺跡の発掘調査
　第１節　調査の方法と経過 ……99
　第２節　遺構と遺物 ……99
遺物観察表 ……103
写真図版
抄録

挿図目次

第1図　遺跡の位置……2
第2図　調査区の位置……2
第3図　周辺の遺跡……4
第4図　善妻遺跡全体図……8
第5図　基本土層図……10
第6図　旧石器時代試掘坑設定図……12
第7図　旧石器時代遺物分布図①……15
第8図　旧石器時代遺物分布図②……17
第9図　旧石器時代遺物分布図③……18
第10図　旧石器時代の石器①……19
第11図　旧石器時代の石器②……20
第12図　旧石器時代の石器③……21
第13図　旧石器時代の石器④……22
第14図　旧石器時代の石器⑤……23
第15図　旧石器時代の石器⑥……24
第16図　2号住居跡①……26
第17図　2号住居跡②……27
第18図　2号住居跡撚糸文系土器A類分布図…28
第19図　2号住居跡撚糸文系土器B類分布図…29
第20図　2号住居跡その他の土器類分布図……30
第21図　2号住居跡石器類分布図①……31
第22図　2号住居跡石器類分布図②……32
第23図　2号住居跡石器類分布図③……33
第24図　2号住居跡石器類分布図④……34
第25図　2号住居跡出土遺物①……36
第26図　2号住居跡出土遺物②……37
第27図　2号住居跡出土遺物③……38
第28図　2号住居跡出土遺物④……39
第29図　2号住居跡出土遺物⑤……40
第30図　2号住居跡出土遺物⑥……41
第31図　2号住居跡出土遺物⑦……42
第32図　2号住居跡出土遺物⑧……43
第33図　2号住居跡出土遺物⑨……44
第34図　2号住居跡出土遺物⑩……45
第35図　2号住居跡出土遺物⑪……46
第36図　2号住居跡出土遺物⑫……47
第37図　2号住居跡出土遺物⑬……48
第38図　2号住居跡出土遺物⑭……49
第39図　2号住居跡出土遺物⑮……50
第40図　2号住居跡出土遺物⑯……51
第41図　2号住居跡出土遺物⑰……52
第42図　2号住居跡出土遺物⑱……53
第43図　2号住居跡出土遺物⑲……54
第44図　2号住居跡出土遺物⑳……55
第45図　2号住居跡出土遺物㉑……56
第46図　2号住居跡出土遺物㉒……57
第47図　E－16グリッド出土遺物①……58
第48図　E－16グリッド出土遺物②……59
第49図　土坑①……61
第50図　土坑②……62
第51図　土坑③……63
第52図　土坑出土遺物……63
第53図　2号古墳と出土遺物……67
第54図　1号古墳と出土遺物……69
第55図　3号古墳……70
第56図　3号古墳出土遺物……71
第57図　5号古墳と出土遺物……71
第58図　6号古墳と出土遺物……72
第59図　7号古墳と出土遺物……73
第60図　4号古墳……74
第61図　8号古墳と出土遺物①……74
第62図　8号古墳出土遺物②……75
第63図　8号土坑と出土遺物……76
第64図　1号住居跡……77
第65図　1号住居跡出土遺物……78
第66図　遺構外出土遺物①……82
第67図　遺構外出土遺物②……83
第68図　遺構外出土遺物③……84
第69図　遺構外出土遺物④……85
第70図　遺構外出土遺物⑤……86
第71図　遺構外出土遺物⑥……87
第72図　基本土層断面の土層柱状図……90

第73図　火山ガラス比ダイヤグラム ……90
第74図　吾妻遺跡、基本土層断面における植物珪酸体分析結果 ……93
第75図　吾妻遺跡と下触牛伏遺跡全体図 ……97
第76図　下触牛伏遺跡1号住居跡 ……100
第77図　下触牛伏遺跡1号住居跡出土遺物 ……101
第78図　下触牛伏遺跡遺構外出土遺物 ……101

表目次

表1　平成8年度県立しろがね学園遺跡調査会組織表 ……1
表2　平成9年度県立しろがね学園遺跡調査会組織表 ……1
表3　周辺の遺跡 ……5
表4　旧石器時代遺物一覧表① ……13
表5　旧石器時代遺物一覧表② ……14
表6　2号住居跡出土石器の器種・石材別点数…35
表7　遺構外出土遺物一覧① ……79
表8　遺構外出土遺物一覧② ……80
表9　遺構外出土遺物一覧③ ……81
表10　基本土層断面の火山ガラス比分析結果 …89
表11　基本土層断面の屈折率測定結果 ……89
表12　吾妻遺跡における植物珪酸体分析結果 …93

写真図版

PL1　周辺の地形
PL2　遺跡全景
　遺跡全景
PL3　旧石器試掘坑全景
　旧石器試掘坑全景
PL4　試掘坑No.7
　試掘坑No.7遺物出土状態近景
　試掘坑No.7遺物出土状態近景
　試掘坑No.10土層
　試掘坑No.19土層
PL5　試掘坑No.50土層
　試掘坑No.50遺物出土状態近景
　試掘坑No.57
　試掘坑No.57遺物出土状態近景
　試掘坑No.60遺物出土状態近景
　試掘坑No.60
　試掘坑No.67
　試掘坑No.67土層
PL6　2号住居跡
　2号住居跡
PL7　2号住居跡遺物出土状態①
　2号住居跡遺物出土状態②
　2号住居跡遺物出土状態③
　2号住居跡遺物出土状態④
　2号住居跡遺物出土状態⑤
　2号住居跡遺物出土状態⑥
　2号住居跡遺物出土状態⑦
　2号住居跡遺物出土状態⑧
PL8　E－16グリッド遺物出土状態
　1号土坑
　5号土坑
　10号土坑
　16号土坑
PL9　2号土坑
　3号土坑
　4号土坑
　12号土坑
　13号土坑
　14号土坑
PL10　1号古墳
　1号古墳主体部
　2号古墳

PL11　2号古墳
2号古墳主体部
2号古墳周溝南側土層
2号古墳周溝東側土層
4号古墳
5号古墳
5号古墳周溝西側土層
8号古墳
PL12　3号古墳
3号古墳主体部
3号古墳周溝東側土層
6号古墳
6号古墳
6号古墳主体部
PL13　7号古墳　7号古墳主体部
7号古墳主体部　7号古墳主体部掘り方
7号古墳周溝土層
7号古墳周溝土層
PL14　8号土坑
11号土坑
6号土坑土層
6号土坑
東地区基本土層
西地区基本土層
PL15　1号住居跡
1号住居跡遺物出土状態
1号住居跡遺物出土状態近景
1号住居跡カマド
1号住居跡・12号土坑
PL16　旧石器時代出土遺物①
PL17　旧石器時代出土遺物②
PL18　旧石器時代出土遺物③
PL19　旧石器時代出土遺物④
PL20　2号住居跡出土遺物①
PL21　2号住居跡出土遺物②
PL22　2号住居跡出土遺物③
PL23　2号住居跡出土遺物④
PL24　2号住居跡出土遺物⑤
PL25　2号住居跡出土遺物⑥
PL26　2号住居跡出土遺物⑦
PL27　2号住居跡出土遺物⑧
PL28　2号住居跡出土遺物⑨
PL29　2号住居跡出土遺物⑩
PL30　2号住居跡出土遺物⑪
PL31　2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真①
PL32　2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真②
PL33　2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真③
PL34　2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真④
PL35　E－16グリッド出土遺物①
PL36　E－16グリッド出土遺物②
土坑出土遺物
1号・2号古墳出土遺物
PL37　3号・5号・6号・7号古墳出土遺物
8号古墳出土遺物①
PL38　8号古墳出土遺物②
8号古墳出土遺物2細部写真
PL39　1号住居跡出土遺物
遺構外出土遺物①
PL40　遺構外出土遺物②
PL41　遺構外出土遺物③
PL42　遺構外出土遺物④
下触牛伏遺跡
PL43　1号住居跡
1号住居跡カマド遺物出土状態
1号住居跡遺物出土状態近景
1号住居跡カマド
1号住居跡貯蔵穴
PL44　1号住居跡出土遺物
遺構外出土遺物
参考写真　女堀跡

第１章　調査に至る経緯

平成７年６月、群馬県県民生活部障害福祉課（当時、現・保険福祉部障害政策課）から群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課に県立しろがね学園移転先の埋蔵文化財有無及び取扱いについて照会があった。県県民生活部障害福祉課の意向では、平成９年度末ころから一部着工したいということであった。県文化財保護課では早速、障害福祉課から提示された建設対象地の地図・建設計画書・設計書等の検討と現地踏査を行った。対象地の一部には周知の遺跡であるあずま道跡がかかっていることや、対象地に隣接する県立ふれあいスポーツプラザ用地で、工事に先立って本県を代表する旧石器時代の遺跡となった下触牛伏遺跡を発見し、昭和57年12月から昭和59年３月まで発掘調査を行ったこと、同じく対象地に隣接して国指定史跡女掘跡が存在すること等を勘案し、埋蔵文化財範囲確認調査を早急に実施し、その結果、対象地内に埋蔵文化財が発見されれば工事に先立って発掘調査・記録保存の措置が必要である旨を通知した。

県文化財保護課は用地取得を待って、平成８年１月末に第１次範囲確認調査に入り、用地の一部で古墳時代の土坑跡、平安時代の竪穴住居跡を確認した。また、更に用地の追加取得を待って同年６月末にも第２次範囲確認調査を行い、古墳時代後期の竪穴住居跡、古墳時代のものと思われる土坑跡等を確認した。このため、建設予定地約40,000㎡の内の12,152㎡について発掘調査が必要であることとなり、関係各機関との調整・協議に入り、平成８年10月から本調査に着手することにした。

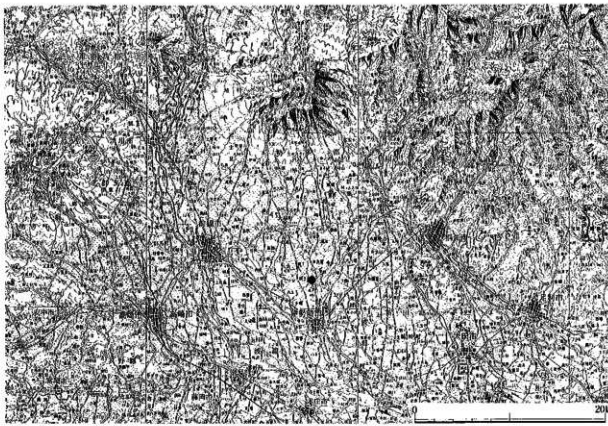
県埋蔵文化財調査事業団・地元前橋市教育委員会ともこの調査には対応できないということであったため、県県民生活部・県教育委員会事務局・前橋市教育委員会事務局の職員で構成し、県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課に事務局を置く県立しろがね学園遺跡調査会を設立し、群馬県知事と委託契約を締結して、発掘調査・整理事業・発掘調査報告書刊行等の業務を行うこととなった。なお、発掘調査・整理事業・発掘調査報告書の作成等の実務は由武考古学研究所に委託した。発掘調査は平成８年10月21日～平成９年３月31日まで、整理事業は平成９年度に実施した。

表１　平成８年度県立しろがね学園遺跡調査会組織表

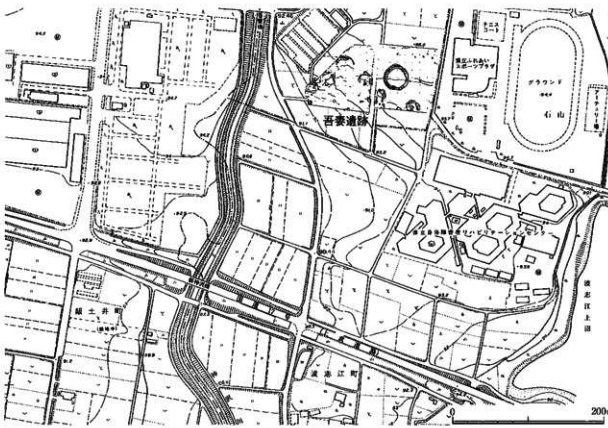
区　分	職　　名	氏　名
会　長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林　弘二
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課長	土田　明
理　事	群馬県県民生活部障害福祉課 課長補佐兼企画調整係長	斉藤和男
	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課次長	森　公之
	前橋市教育委員会事務局文化財保護課長	川合　功
監　事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課主幹兼専門員	井川達雄
	前橋市教育委員会事務局文化財保護課 埋蔵文化財係長	駒倉秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	中　隆之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課主幹兼専門員	斎藤和之
	同上　　主任	高島英之

表２　平成９年度県立しろがね学園遺跡調査会組織表

区　分	職　　名	氏　名
会　長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	荒畑大治
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課長	土田　明
理　事	群馬県保険福祉部 障害政策課課長補佐兼企画調整係長	加藤恵芳
	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課次長	森　公之
	前橋市教育委員会事務局文化財保護課長	川合　功
監　事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課埋蔵文化財第一係主任	飯塚　聡
	前橋市教育委員会事務局文化財保護課 埋蔵文化財係長	駒倉秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	中　隆之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課埋蔵文化財第一係主幹兼専門員	斎藤和之
	同上　　主任	高島英之



第１図　遺跡の位置（国土地理院20万分の１「長野」「宇都宮」を50%縮小）



第２図　調査区の位置（前橋市現形図67を50%縮小）

第２章　遺跡の位置と環境

本遺跡は、前橋市の南東端部、赤堀町・伊勢崎市の山町境付近に位置する。群馬県の中央部にそびえる複合成層火山の赤城山を北方に望む。赤城山は広大な裾野を有し、南麓裾には山頂付近から流下する小河川により開析された緩傾斜の樹枝状台地が多数形成されている。遺跡の西側には神沢川、東側には西桂川が南流し、本遺跡は神沢川左岸の洪積台地上に立地している。遺跡地の標高は94～97mほどで、南西方向に向かって緩やかに下っている。また、本遺跡周辺には、低地や石山丘陵などのような地形もみられる。

なお、本遺跡は昭和57・58年度に発掘調査の行われた下触牛伏遺跡(3)の西側に隣接する。同遺跡では、上部ローム層（第１文化層）と中部ローム層上位の暗色帯（第２文化層）から旧石器時代の石器群が出土し、特に第２文化層からはナイフ形石器・台形様石器・局部磨製石斧・掻器・削器・剥片等が直径約50mの環状に分布する状態で検出されている。そのほか、縄文時代草創期の爪形文土器、縄文時代の住居跡や陥穴とみられる土坑、古墳時代後期の住居跡13軒、７世紀代の古墳10基、平安時代の住居跡１軒などの遺構・遺物も検出されている。この内、１号古墳からは蕨手刀が出土している。

台地や丘陵部では集落や墳墓などの遺跡が数多く分布している。以下、時代別に周辺の遺跡を概観する。

旧石器時代では、先述の下触牛伏遺跡のほか、一般国道17号（上武国道）改築工事に伴う一連の発掘調査によって飯土井中央遺跡(78)・飯土井二本松遺跡(70)・波志江天神山遺跡(79)・波志江六反田遺跡(77)・堀下八幡遺跡(79)などで遺物が検出されている。堀下八幡遺跡では姶良火山灰層を中心に千点を超える石器が出土し、飯土井中央遺跡でもナイフ形石器等の石器が210点ほど出土している。

縄文時代では、下触牛伏遺跡・上縄引遺跡(12)・荒砥上諏訪遺跡(30)・荒砥二之堰遺跡(40)・波志江権現山遺跡(47)・石山遺跡(49)・鷹巣遺跡(54)・北通遺跡(57)・五目牛洞山遺跡(63)・五目牛東遺跡C地点(65)・蟹沼東古墳群(66)・間之山遺跡(67)・飯土井中央遺跡・飯土井二本松遺跡・波志江今宮遺跡(75)・波志江天神山遺跡・波志江六反田遺跡・堀下八幡遺跡・五目牛南組遺跡(80)・五目牛清水田遺跡(81)などがある。波志江今宮遺跡など陥穴の調査例も散見される。

弥生時代では、荒砥上ノ坊遺跡・間之山遺跡・五目牛南組遺跡などがあるが、遺跡数はあまり多くない。

古墳時代では、片田古墳群(58)・蟹沼東古墳群・地蔵山古墳群(83)などの大規模古墳群が近接するほか、本遺跡の南東に宮貝戸古墳群(93)があり、調査の行われた４基の内２基から埴輪が検出されている。また、大形前方後円墳である前二子古墳(16)・中二子古墳(15)・後二子古墳(14)は本遺跡の北北東2.4km前後に位置する。なお、写真図版（PL1）には発掘調査中の帆立貝形古墳である赤堀77号墳（庚塚古墳）が写っている。このほか、方形周溝墓や前期～後期の集落遺跡も多数調査されている。

奈良・平安時代では、台地上に集落遺跡が分布するほか、低地部では浅間Ｂ軽石に埋没した水田跡が調査されている。二宮宮下東遺跡(70)からは墨書された土師器・須恵器25点が検出されている。

中世では、初期の大規模川水遺構である女堀(83)が本遺跡北側近接地を通過し、石山丘陵の南麓を迂回した後、さらに東方へと掘られている。女堀は前橋市石関町～佐波郡東村国定までの約13kmにも及ぶ未完の堀で、上幅が約20～30mという巨大な遺構である（PL14に参考写真）。また、中世道路遺構である「あずま道」(84)が女堀に平行するように作道されていると推定されている。二宮宮下東遺跡の西北西1.3kmに位置する今井道上道下遺跡では「あずま道」とみられる道路遺構が検出されている。このほか、周辺では城館跡や水田・畑、墓等の遺構が調査されている。

第３図　周辺の遺跡（国土地理院２万５千分の１「大胡」）

表3　周辺の遺跡

No.	遺跡名	概要
1	晋妻遺跡	旧石器、縄文早期、古墳。本書所収。
2	下触牛伏遺跡	古墳後期住居跡。本書所収。
3	下触牛伏遺跡	旧石器、縄文、古墳、平安。鹿手刀。
4	荒砥上西原遺跡	奈良・平安。方形区画。国分寺瓦。
5	川籠番戸遺跡	奈良・平安集落。
6	堤東遺跡	古墳前期方形周溝墓。奈良・平安。
7	伊勢山古墳群	古墳群。伊勢山古墳は前方後円墳。
8	阿久山古墳群	古墳群。
9	北山遺跡	古墳、奈良・平安。古墳前期周溝墓。
10	大室元城跡	中世。
11	大室城跡	中世。
12	上縄引遺跡	縄文、古墳（周溝墓・古墳）。
13	下縄引遺跡	古墳集落。
14	後二子古墳	墳長85mの前方後円墳。
15	中二子古墳	墳長111mの前方後円墳。
16	前二子古墳	墳長94mの前方後円墳。
17	梅木遺跡	５Ｃ後～６Ｃ初の居館跡。
18	久保帯戸遺跡	古墳前期集落跡。
19	赤堀茶臼山古墳	帆立貝形古墳。本誌掲。内行花文鏡。
20	多田山古墳群	古墳群。
21	荒砥西屋敷Ⅰ遺跡	古墳前期住居跡。
22	舞台西遺跡	中世の井戸。
23	荒子の砦跡	中世。
24	荒砥西屋敷Ⅱ遺跡	古墳、平安集落。円墳１基。平安水田。
25	新屋遺跡	古墳前期住居跡。
26	丸山古墳群	古墳群。
27	天神山古墳群	古墳群。
28	牛島古墳群	古墳群。
29	荒砥東原遺跡	古墳前期～平安集落。
30	荒砥上諏訪遺跡	縄文、古墳後期～平安集落。
31	東大室小学校遺跡	古墳前期、奈良・平安集落。
32	荒砥五反田遺跡	古墳前期～平安集落。
33	荒砥上川久保遺跡	古墳前期～平安集落。周溝墓５基。
34	荒砥荒子遺跡	古墳、奈良・平安集落。平安水田。
35	荒砥上ノ坊遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良・平安。
36	つくば山古墳	約30mの方墳。
37	荒砥青柳遺跡	奈良・平安。
38	城山遺跡	中世。
39	赤石城跡	中世。
40	荒砥二之堰遺跡	縄文、古墳。新鏡形住居跡。周溝墓。
41	中屋敷跡	中世。
42	宮貝戸古墳群	4基を調査。2基に墳輪。1基に前脚。

No.	遺跡名	概要
43	宮貝戸下遺跡	奈良時代住居跡１軒。
44	大沼下遺跡	古墳前期、奈良・平安集落。
45	波志江伊勢山古墳	横穴式石室を有する円墳。
46	関屋敷跡	中世。
47	波志江権現山遺跡	縄文早期。
48	西福岡遺跡	古墳中期の溝。
49	石山遺跡	縄文草創期の尖頭器他。
50	片田古墳群	古墳群。
51	下触下寺遺跡	古墳後期～平安集落。
52	向井古墳群	古墳群。
53	下触向井遺跡	古墳～平安集落。縄文早期末土器。
54	下触向井Ⅱ遺跡	古墳集落。
55	中畑遺跡	古墳中・後期集落。
56	鷺巣遺跡	縄文前期、平安集落。
57	北通遺跡	縄文前期、古墳、平安集落。
58	牛伏古墳群	古墳群。
59	祝堂古墳	径30mの円墳。横穴式石室。
60	八幡林古墳群	古墳群。縄文前期集落。
61	洞山古墳群	古墳群。
62	五目牛洞山遺跡	縄文早期～後期。後期の敷石住居跡。
63	五目牛東遺跡Ｃ地点	縄文前期住居跡２軒。
64	五目牛東遺跡Ｂ地点	古墳後期～平安集落。中世以降の遺。
65	台所山古墳群	古墳群。１基に箱式石棺。
66	蟹沼東古墳群	約80基の古墳群。縄文陥穴。周溝墓。
67	問之川遺跡	縄文、弥生、古墳集落。方形周溝墓。
68	問之山東遺跡	古墳集落。
69	地蔵山古墳群	古墳群。５～８世紀。
70	二宮宮下東遺跡	古墳～中世の集落、館、水田。
71	二宮宮東遺跡	鎌倉時代の庭園。近世屋敷。
72	飯土井上組遺跡	古墳、平安集落。中・近世の畑、墓。
73	飯土井中央遺跡	旧石器、縄文。古墳時代住居。
74	飯土井二本松遺跡	旧石器、縄文。古墳～平安集落。
75	波志江今宮遺跡	縄文期穴。古墳。奈良住居。平安水田。
76	波志江天神山遺跡	旧石器、縄文、近世以降。
77	波志江六反田遺跡	旧石器、縄文。平安住居・水田。近世。
78	波志江中峰岸遺跡	古墳住居。平安水田。中世以降の溝。
79	駒下八幡遺跡	旧石器。縄文、平安集落。
80	五目牛南組遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、近世。
81	五目牛清水田遺跡	縄文、古墳～平安集落。古墳。水田。
82	大沼上遺跡	古墳住居跡１軒。
83	女堀	約13kmに及ぶ中世初期の用水遺構。
84	あずま道	中世以降の道路跡。

第３章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査

本遺跡は、昭和57・58年度に発掘調査の行われた下触牛伏遺跡[1]の西側に隣接していることから、同遺跡で調査された７世紀代の古墳や縄文時代・平安時代の遺構及び旧石器時代の環状ブロック等と同様の遺構が存在するものと想定された。

機械力で古墳等の遺構確認面までの土層を除去した後、各遺構の調査を行った。旧石器時代の調査は、遺構調査終了後あるいは一部並行して４ｍ×４ｍの試掘坑99か所を設定して実施し、遺物が検出された試掘坑は拡張して遺物の分布状況を観察・記録した。旧石器時代の試掘調査時に調査区西側から縄文時代早期撚糸文期の遺物が出土し、調査を進める中で住居跡と判断した。

遺構の測量は、公共座標（第Ⅸ系）を基準に10ｍ×10ｍのグリッドを設定して行った。グリッド名は北東角を基点に、東から西へ算用数字、北から南へ大文字アルファベットを付し、「Ａ－２グリッド」のように表記した。水準点は公共水準を用いた。

縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構は、埋没状態・構築状態及び遺物出土状態等の観察を行い、図面・写真に記録した。遺構実測図の原図は、平面図・土層図・エレベーション図等を1/20縮尺、古墳平面図を1/40縮尺、遺跡全体図を1/200縮尺で作成した。旧石器時代の調査は層序に留意して出土位置・状態の観察・記録を行い、遺物分布図を1/20縮尺で作成した。

発掘調査の経過概要は以下の通りである。

平成８年

10月　21日：発掘調査開始。東側調査区の表土除去を開始し、併せて調査区の安全対策を行う。

11月　５日：遺構確認作業を行う。古墳の周溝が確認されたが、墳丘は既に削平されている。また、土坑数基が確認された。19日：西側調査区の表土除去を開始する。下旬：旧石器時代の試掘坑（No.1～4）の調査を行うが、遺物は検出されなかった。

12月　上旬：２号古墳南側周溝の掘り下げを行う。周溝からは須恵器破片数点が出土している。１～４号土坑の調査を行う。３日：下触牛伏遺跡の試掘調査を行い、古墳時代後期の住居跡１軒を検出する。下触牛伏遺跡１号住居跡として本遺跡と並行して調査を進める（付章Ⅱに掲載）。中旬：２号古墳北側周溝及び１号古墳周溝の掘り下げを行う。下旬：３号・４号・５号・６号・７号古墳周溝の掘り下げを行う。また、並行して旧石器時代の試掘坑（６か所）の調査を行うが、旧石器時代の遺物は検出されなかった。

平成９年

１月　７日：１号住居跡（平安時代）の調査を開始する。８日：旧石器時代試掘坑No.7から剥片９点が出土した。９日：１号古墳及び６号古墳の主体部部分の調査を開始する。遺存状態は極めて悪い。16日：遺跡全景の空撮を行う。下旬：試掘坑No.7を拡張して遺物分布範囲の把握に努めた。23日：火山灰分析・植物珪酸体分析のサンプリングを行う。24日：３号古墳の墓部分下には重機の爪痕が残っていた。

２月　上旬：旧石器時代試掘坑No.17～21を調査。並行して土坑の調査を行う。旧石器時代試掘坑No.22～49を調査する。下旬：旧石器時代試掘坑No50～62を調査。No.50・57・60から剥片各１点が出土した。

３月　上旬：旧石器時代試掘坑の調査を行う。３日：旧石器時代試掘坑No.70調査の過程で、縄文時代早期撚糸文系土器が出土した。４日：撚糸文系土器が出土した範囲を精査した結果、

住居跡の可能性が高まったため２号住居跡として調査を進めることにした。６日：Ｅ－16グリッドから縄文時代早期の条痕文系土器が約30点出土したが、遺構は明確に確認できなかった。中旬：２号住居跡の調査を継続する。多量の土器・石器が出土している。14日：旧石器時代試掘坑の空撮を行う。下旬：２号住居跡の調査を継続する。24日：２号住居跡の西側部分を拡張して調査を行う。25日：２号住居跡の北側から８号古墳を検出。周溝から形象埴輪片（靱）が出土した。29日：２号住居跡の空撮及び測量を行う。30日：器材等の撤収を行い、現地における発掘調査を終了する。

第２節　整理調査

整理調査は、発掘調査で得られた資料をもとに、報告書によって遺跡の全体像、個々の遺構の状態、出土遺物の状況が客観的に把握できるようにとの方針で実施した。また、縄文時代早期撚糸文期の２号住居跡は多量の土器・石器が出土していることから、胎土別土器の分布図及び器種別石器分布図を作成し、遺物出土状態がより明確に判断できるように配慮した。

出土遺物は、すべて水洗いを行い、基本的に微細破片を除いて注記したが、鉄器や小形剥片石器等注記困難な遺物については、ケースもしくはパッケージに収納し、これらに遺跡名・出土地点等を明記してある。注記はコンピュータ制御によるジェットプリンターで行った。注記には下記の略号を用いた。

吾妻遺跡……8Ｅ－35　　住居跡……ＳＩ　　古墳……ＳＺ　　土坑……ＳＫ　　グリッド……Ｇ

カマド……カ

遺物の接合・復元は可能な限り行った。接合にはセメダインＣを、復元には必要に応じてエポキシ系樹脂（バイサム）を用いた。縄文土器には全容が把握できる資料はみられなかった。出土遺物は、各遺構・グリッドごとに個々の土器や石器の種別・石材、数量等を記録した上で、報告書掲載遺物を選別した。遺物写真は、報告書掲載遺物について撮影し、白黒６×７判フイルムに記録した。遺物実測も報告書掲載遺物について行い、1/1縮尺で作図した。また、必要に応じて拓本図を作成している。遺物トレースにはロットリング及び丸ペンを用いた。版組には基本的に２倍台紙を使用した。

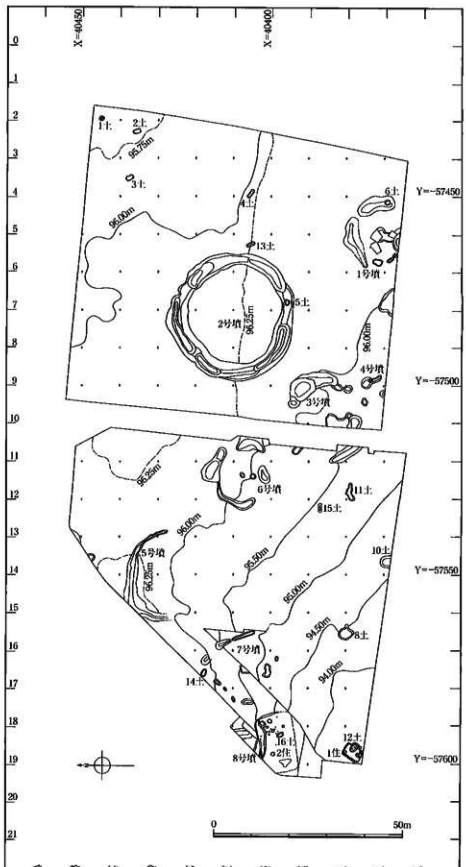
整理調査後の遺物は、報告書に使用したものと不使用のものとに分け、さらに各遺構ごとに分けて遺物収納箱もしくは専用段ボール箱に収納した。遺物収納の際には、各遺物をミナパックなどで梱包するなどの保護対策を講じてある。また、各遺物収納箱の小口には、遺跡名・遺構名・遺物番号・報告書使用の有無等を明記した。

遺構図面は、各遺構ごとに検討を加え、一部修正を加えた後に報告書使用のものについてトレース・版組を行った。また、必要に応じて遺物水平分布図・垂直分布図を作成した。トレースにはロットリングを用い、版組には基本的に２倍台紙を使用し、一部に３倍台紙を併用した。

遺構・遺物実測図は各遺構ごとに整理し、図面ケースに収納した。また、遺構図面・写真、遺物図面・写真の各台帳を作成してある。

〈文献〉

１）㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986　『下触牛伏遺跡』


X=40450
X=40400
Y=-57450
Y=-57500
Y=-57550
Y=-57600
1土
2土
3土
4土
6土
13土
1号墳
2号墳
5土
4号墳
3号墳
6号墳
11土
15土
5号墳
10土
7号墳
9土
14土
16土
8号墳
2住
1住
12土
96.25m
96.00m
96.35m
96.50m
95.00m
94.50m
94.00m
0
50m

第4図　吾妻遺跡全体図

第４章　遺構と遺物

第１節　概要

調査では、旧石器時代のユニット１地点、縄文時代早期撚糸文期の住居跡１軒、同じく早期の遺物集中地点１か所、古墳８基、平安時代の住居跡１軒、土坑14基（縄文時代９基、古墳時代１基、時期不明４基）の遺構が検出された。なお、調査当初７号・９号土坑としたものは検討の結果、遺構ではないと判断し欠番とした。

旧石器時代

４ｍ×４ｍの試掘坑99か所（1,584㎡・全調査面積の約13%）を設定して調査を行った。旧石器が検出された試掘坑は11か所のみで、出土量も一部を除きわずかであった。出土層位は基本層序（本章第２節及び第５章第１節参照）の７層・８層が中心で、赤城小沼ラピリ（Ag－KLP、約2.5万年前）より上位で浅間板鼻褐色軽石群（As－BP　Group、約1.8～2.1万年前）の最下部前後と考えられる。試掘坑No.7では、第７層を中心にナイフ形石器・スクレイパー・石核・剥片・チップ等26点が弧状に分布した状態で出土している。

縄文時代

早期撚糸文期の２号住居跡は、遺構南側の状態が不明瞭であり、また、遺物出土状態等から２軒が重複している可能性も否めないが、北側壁面の状態等から長軸約15.5ｍの竪穴住居跡と判断したものである。遺物は、撚糸文系の土器片1,640点、石器類はスタンプ形石器・三角錐形石器・石皿・磨石・凹石・礫器・削器・打製石斧・局部磨製石斧・砥石・石鏃等がみられ、剥片等を含めて2,449点が出土している。土器は概ね稲荷台式に比定できるものである。石器類の中でスタンプ形石器が51点と多い状態はやや特異な印象を受ける。

早期遺物集中地点はＥ－16グリッドに位置し、早期末葉と思われる条痕文系土器が径４ｍほどの範囲から散在するような状態で出土している。磨石・石鏃等の石器もみられるが、明瞭な掘り込みは確認できず、遺構としては把握できなかった。

当該期と判断できる土坑は９基で、形状からいずれも陥穴の可能性が高く、底面に小ピットを有するものもみられる。これらの土坑からは早期～後期の土器片が出土しているものもみられるが、明確な時期判断はできなかった。

古墳時代

８基の古墳とも既に墳丘は削平され、周溝部分を調査し得たにすぎない。いずれも上毛古墳綜覧に記載漏れの古墳である。１号古墳のように前庭部と想定される位置が深く掘られている状態が認められる。ほとんどの古墳が７世紀代とみられるが、調査区西端で検出された８号古墳からは円筒埴輪・形象埴輪（人物・馬）が出土しており６世紀後半代と考えられる。主体部は横穴式石室と想定され、散乱する礫からは輝石安山岩を主体に構築されたと思われるが、一部残骸をとどめる程度の遺存状態のため、詳細は不明である。

平安時代

当該期の遺構は、調査区南西端で住居跡１軒（１号住居跡）が検出されたのみである。東側にカマドを有し、遺物は土師器（甕・台付甕・坏）、須恵器（甕・椀・坏）、灰釉陶器（皿）等が出土している。

中世以降

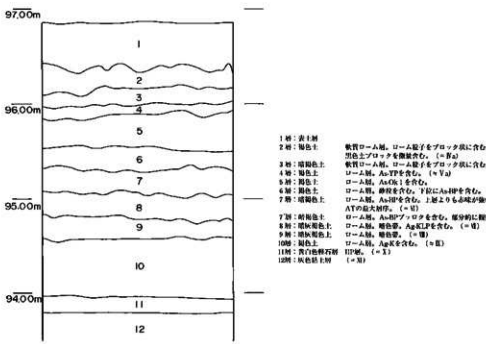
第２章でも触れたように本遺跡北側近接地に女堀が存在し、また、「あずま道」が本遺跡地周辺を通過するものと想定されるが、今回の調査では道路遺構やこれらに関連するような中世の遺構は確認できなかった。近世の遺物としては、遺構外から煙管が出土している。

第2節　基本層序

本遺跡では、ごく一部に黒褐色土が残存する部分がみられるものの、表土層（1層）下がローム層となり、総じて東地区の北側で観察した第5図のような層序にある。黒褐色土は古墳や平安時代の住居跡の埋没土として観察される。なお、今回の調査ではテフラ分析を実施しており、分析結果については第5章第1節に掲載してある。また、第5図の土層説明記載の各末尾に（≒）で示したローマ数字は、隣接する下触牛伏遺跡の層序に対応すると判断した番号である。

2層（褐色土）と3層（暗褐色土）は軟質ローム（いわゆるソフトローム）で、2層上部は土壌化が進んでいる。4層（褐色土）は浅間板鼻黄色軽石（As－YP、約1.3～1.4万年前）を含んでいる。土坑・古墳や平安時代の住居跡は2層上面で確認できたが、縄文時代早期撚糸文期の2号住居跡は、2層・3層レベルにおいて遺物の包含は認められるものの地山と埋没土との識別が非常に困難で、4層において壁面を確認できた段階で遺構範囲を判断することができた。5層（褐色土）中位には浅間大窪沢第1軽石（As－Ok1、約1.7万年前）を含む。6層（褐色土）・7層（暗褐色土）には浅間板鼻褐色軽石（As－BP、約1.8～2.1万年前）を含み、7層では姶良Tn火山灰（AT、約2.4～2.5万年前）に由来すると考えられる火山ガラスが検出されている。また、一部で7層と8層の間にAs－BPブロックを含む暗褐色土層があり、これは7′層とした。8層（暗灰褐色土）と9層（暗灰褐色土）はいわゆる暗色帯と呼称される部分で、8層の下位には赤城小沼ラピリ（Ag－KLP、約2.5万年前）が認められる。本遺跡では、7層から8層にかけての層序で旧石器が出土している。10層（褐色土）は粗粒火山灰層である赤城鹿沼テフラ（Ag－K、約3.1～3.2万年前）を含む。また、11層（黄白色軽石層）は榛名八崎軽石（Hr－HP、約4.1～4.4万年間）と考えられる。12層は青味がかった灰色の粘土層である。

なお、植物珪酸体分析の結果（第5章第2節）、10層～5層にかけての時期は、クマザサ属などのササ類を主体とするイネ科植生が継続し、4層より上位の時期にはササ類が大幅に減少し、ススキ属やチガヤ属などがみられるようになったものと推定されている。



第5図　基本土層図

第３節　旧石器時代

先述したように４ｍ×４ｍの試掘坑99か所を設定して調査を行った（第６図、PL3）が、旧石器時代の石器・剥片・チップ等が出土したのは、試掘坑No.7・18・20・28・34・50・57・60・67・83・85の11か所にすぎず、比較的まとまった量が出土しユニットと判断できるのは試掘坑No.7の１か所のみである。試掘坑No.1・2・3・4・5・9・17・19・22・25・33・39・47の13か所からは自然礫や破砕礫が出土しているが、その他の試掘坑からの出土遺物は皆無であった。出土層位（本章第２節参照）は７層・８層が中心で、５層・６層や９層からもわずかに出土が確認される。なお、試掘坑の番号は調査順に付している。

出土遺物の内、石器類の数量は、ナイフ形石器１点（黒色安山岩）、スクレイパー１点（珪質頁岩）、プレイド１点（黒色頁岩）、石核２点（黒色安山岩２）、調整のある剥片１点（黒色安山岩）、使用痕のある剥片３点（黒色安山岩１・黒色頁岩２）、不明であるが人工品と思われるもの４点（絹雲母片岩３・石墨片岩１）、不明であるが石器と思われるもの２点（ホルンフェルス２）、剥片16点（黒色頁岩８・黒色安山岩８）、チップ９点（黒色頁岩３・黒色安山岩３・輝石安山岩１・黒曜石２）で、総計40点である。

また、自然礫31点（チャート18・黒色安山岩１・輝石安山岩６・黒色頁岩２・砂質頁岩１・石英斑岩２・輝緑岩１）、破砕礫13点（輝石安山岩７・安山岩１・黒色頁岩１・頁岩１・輝緑岩２・ヒン岩１）、ラピリ４点（輝石安山岩３・黒色安山岩１）を検出している。

出土遺物については、表４・５にまとめた。旧石器の出土した各試掘坑の概要は下記の通りである。

試掘坑No.7：７層を中心に出土している。ナイフ形石器１点(20)、スクレイパー１点(5)、石核２点（14・44）、調整のある剥片１点(8)、使用痕のある剥片１点(22)、剥片９点（1・2・3・4・10・15・18・21・46）、チップ８点（7・9・11・13・16・17・30・45）、不明人工品３点（41・49・50）のほか、破砕礫９点（6・12－1・12－2・25・32・36・37・42・51）、自然礫13点（19・23・24・27・33・34・35・38・39・40・43・47・48）、ラピリ４点（26・28・29・31）が出土している。石器石材は、ナイフ形石器は黒色安山岩、スクレイパーは珪質頁岩製、石核は２点とも黒色安山岩、剥片・チップには黒色頁岩・黒色安山岩の他、黒曜石や輝石安山岩がある。また、絹雲母片岩製の人工品が３点みられる。石器と判断できる遺物は、量的には少ないながらも、試掘坑の北東側において弧状に分布している傾向が認められ、南西側には破砕礫・自然礫・ラピリ等が分布する。（第７図、PL4／遺物：第10～13図、PL16～18）

試掘坑No.18：５層から剥片１点（黒色頁岩）が出土している。（遺物：第13図、PL18）

試掘坑No.20：７層及び８層から使用痕のある剥片２点、剥片１点が出土している。石材は、いずれも黒色頁岩である。（遺物：第13・14図、PL18）

試掘坑No.28：７層から黒色頁岩チップ１点が出土している。

試掘坑No.34：９層から石墨片岩の不明人工品１点、８層から自然礫１点が出土している。（遺物：第14図、PL18）

試掘坑No.50：７′層から黒色安山岩の剥片１点が出土している。（第８図、PL5／遺物：第13図、PL18）

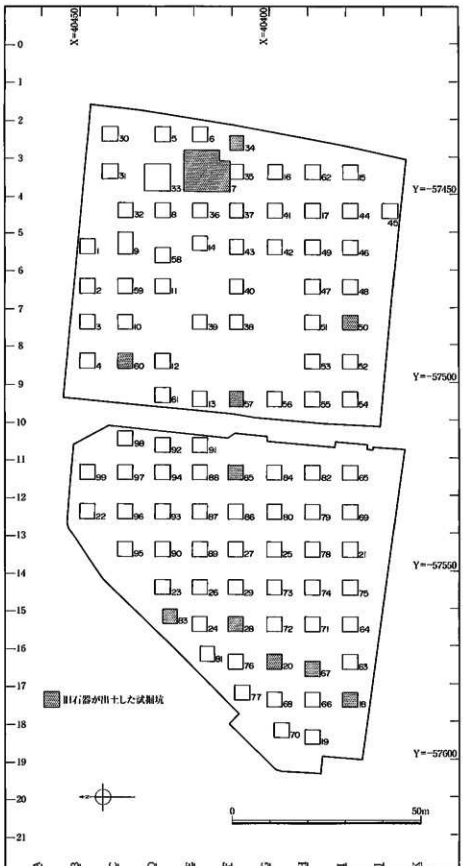
試掘坑No.57：８層から黒色頁岩の剥片１点が出土している。（第８図、PL5／遺物：第14図、PL19）

試掘坑No.60：８層から黒色頁岩のプレイド１点が出土している。（第９図、PL5／遺物：第14図、PL19）

試掘坑No.67：８層から黒色頁岩の剥片１点(1)、ホルンフェルス製の石器と思われるもの２点（2・3）が出土している。なお、２と３は接合する。（第９図、PL5／遺物：第15図、PL19）

試掘坑No.83：８層から黒色安山岩の剥片１点が出土している。（遺物：第15図、PL19）

試掘坑No.85：８層から黒色頁岩の剥片１点が出土している。（遺物：第15図、PL19）



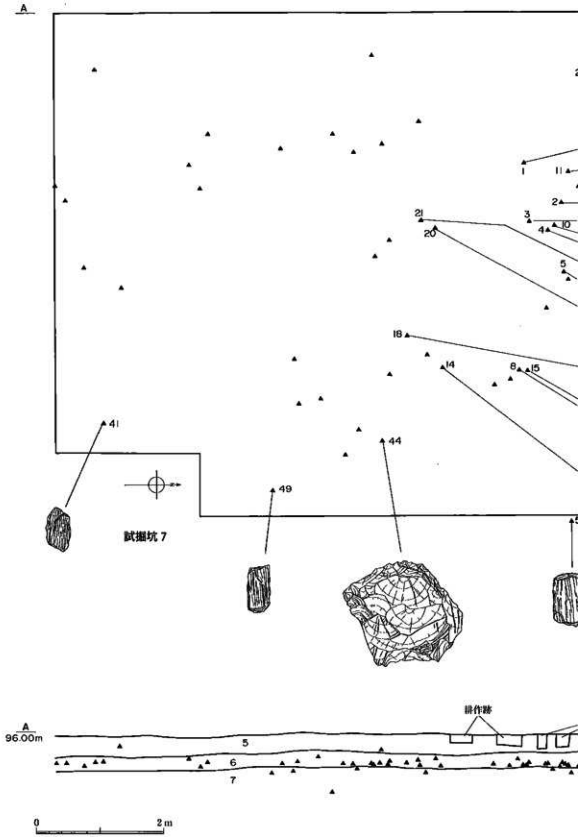
第６図　旧石器時代試掘坑設定図

表4　旧石器時代遺物一覧表①（第10～15図、PL16～19）

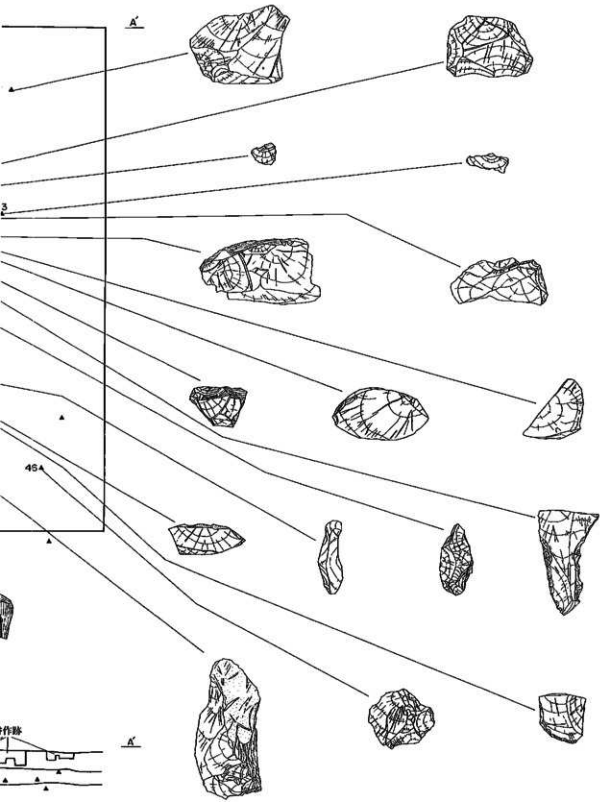
試掘	No.	出土層位	標　高	器　種	石　材	長　さ	幅	最大厚	重　さ	備　考	掲載
1	1	7下層	95.16m	自然礫	チャート				14.75g		
	2	8中層	95.03m	自然礫	チャート				2.83g		
2	1	9上層	94.97m	自然礫	チャート				1.24g		
3	1	8下層	95.00m	自然礫	チャート				12.89g		
4	1	10上層	94.72m	自然礫	チャート				6.05g		
5	4	8上層	94.84m	自然礫	チャート				20.34g		
7	1	7中層	95.22m	剥片	黒色頁岩	3.2cm	4.5cm	1.3cm	18.24g		○
	2	7中層	95.23m	剥片	黒色安山岩	2.4cm	5.1cm	1.9cm	16.07g		○
	3	7上層	95.26m	剥片	黒色安山岩	3.5cm	6.3cm	1.3cm	23.06g		○
	4	7上層	95.27m	剥片	黒色頁岩	2.8cm	5.0cm	1.3cm	18.68g	不明瞭な使用痕。	○
	5	7上層	95.26m	スクレイパー	珪質頁岩	5.6cm	3.2cm	1.1cm	12.74g	両側縁に刃部。	○
	6	7上層	95.23m	破砕礫	輝石安山岩				2.19g		
	7	7上層	95.26m	チップ	黒色頁岩	2.3cm	1.6cm	0.9cm	3.29g		
	8	6下層	95.34g	調整のある剥片	黒色安山岩	2.6cm	2.4cm	0.7cm	4.99g		○
	9	7中層	95.22m	チップ	黒色頁岩	3.1cm	1.7cm	0.4cm	2.09g		
	10	7下層	95.17m	剥片	黒色安山岩	3.3cm	3.1cm	1.0cm	6.78g		○
	11	7上層	95.23m	チップ	黒色安山岩	1.2cm	1.3cm	0.3cm	0.26g	13と接合。	○
	12-1	7中層	95.20m	破砕礫	輝緑岩				0.54g		
	12-2	7中層	95.20m	破砕礫	輝石安山岩				0.27g		
	13	7下層	95.18m	チップ	黒色安山岩	1.0cm	2.2cm	0.7cm	0.56g	11と接合。	○
	14	7下層	95.22m	石核	黒色安山岩	7.4cm	3.4cm	3.1cm	78.44g		○
	15	7下層	95.22m	剥片	黒色安山岩	1.7cm	4.1cm	0.8cm	6.74g		○
	16	7中層	95.26m	チップ	黒曜石	1.7cm	1.5cm	0.5cm	0.99g		
	17	7中層	95.27m	チップ	黒曜石	1.2cm	1.0cm	0.3cm	0.27g		
	18	7中層	95.27m	剥片	黒色頁岩	3.9cm	1.3cm	0.7cm	1.56g		○
	19	7中層	95.23m	自然礫	黒色安山岩				5.55g		
	20	7中層	95.32m	ナイフ形石器	黒色安山岩	3.7cm	1.8cm	0.9cm	4.55g		○
	21	7下層	95.25m	剥片	黒色安山岩	2.1cm	3.0cm	1.0cm	6.69g		○
	22	7下層	95.31m	使用痕のある剥片	黒色安山岩	4.2cm	5.3cm	1.3cm	25.45g		○
	23	7上層	95.39m	自然礫	輝石安山岩				1.88g		
	24	7上層	95.25m	自然礫	チャート				1.29g		
	25	7上層	95.39m	破砕礫	輝石安山岩				2.59g		
	26	7中層	95.36m	（ラピリ）	黒色安山岩				0.09g		
	27	7下層	95.29m	自然礫	チャート				4.92g		
	28	7下層	95.28m	ラピリ	輝石安山岩				0.05g		
	29	6下層	95.45m	ラピリ	輝石安山岩				0.16g		
	30	7下層	95.22m	チップ	輝石安山岩	1.1cm	0.9cm	0.8cm	0.60g		
	31	7下層	95.25m	ラピリ	輝石安山岩				0.03g		
	32	7下層	95.25m	（破砕礫）	黒色頁岩				0.48g		
	33	7下層	95.29m	自然礫	輝石安山岩				0.50g		
	34	7上層	95.36m	自然礫	輝石安山岩				9.40g		
	35	7下層	95.23m	自然礫	輝石安山岩				5.46g		
	36	7下層	95.30m	破砕礫	輝石安山岩				2.40g		
	37	7下層	95.28m	破砕礫	輝石安山岩				0.55g		
	38	7中層	95.30m	自然礫	輝石安山岩				2.87g		

表5　旧石器時代遺物一覧表②

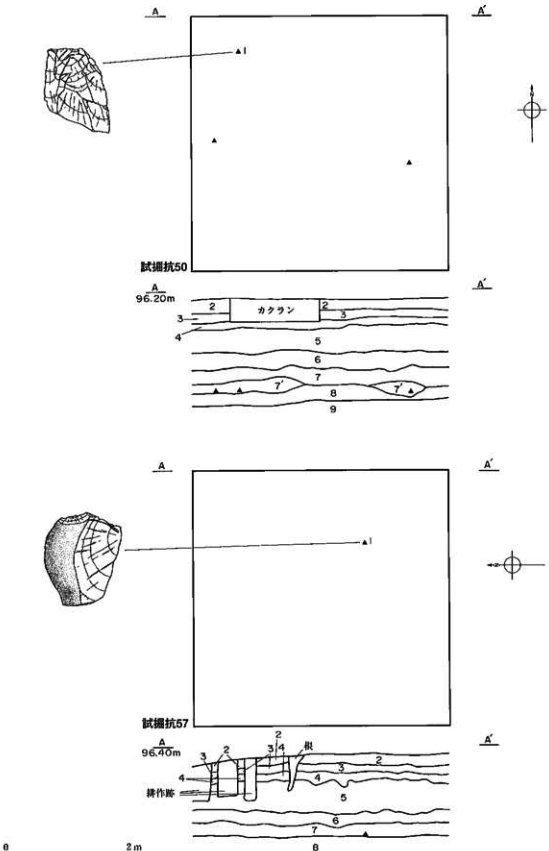
試掘	No.	出土層位	標　高	器　種	石　材	長　さ	幅	最大厚	重　さ	備　考	掲載
7	39	7下層	95.24m	自然礫	輝石安山岩				0.96g		
	40	6中層	95.54m	自然礫	石英斑岩				2.37g		
	41	7下層	95.33m	(人工品)	細粒凝灰岩	2.3cm	1.3cm	0.5cm	2.00g	(剥片)	○
	42	7下層	95.25m	破砕礫	輝石安山岩				0.93g	被熱痕あり。	
	43	7下層	95.17m	自然礫	チャート				2.96g		
	44	7下層	95.25m	石核	黒色安山岩	5.5cm	6.4cm	2.3cm	70.30g		○
	45	7下層	95.12m	チップ	黒色安山岩	1.6cm	0.9cm	0.3cm	0.31g		
	46	7下層	95.25m	剥片	黒色安山岩	3.2cm	3.5cm	1.0cm	6.14g		○
	47	9中層	94.78m	自然礫	黒色頁岩				2.31g		
	48	8上層	95.13m	(自然礫)	チャート				0.84g	あるいはチップか。	
	49	7下層	95.11m	(人工品)	細粒凝灰岩	2.5cm	1.2cm	0.9cm	3.39g		○
	50	7下層	95.12m	(人工品)	細粒凝灰岩	2.8cm	2.6cm	1.6cm	16.77g		○
	51	7下層	95.12m	破砕礫	輝石安山岩				5.68g		
9	1	8中層	94.92m	自然礫	黒色頁岩				0.38g		
17	1	8上層	94.78m	自然礫	チャート				16.10g		
	2	7中層	94.96m	自然礫	石英斑岩				13.04g		
18	1	5上層	93.65m	剥片	黒色頁岩	2.4cm	3.2cm	0.8cm	6.28g		○
19	1	7上層	93.62m	自然礫	輝緑岩				1.00g		
	2	7上層	93.62m	破砕礫	輝緑岩				1.17g		
	4	9下層	92.90m	破砕礫	ひん岩				0.52g		
	5	9下層	92.90m	破砕礫	頁岩				1.54g		
	6	9下層	92.91m	自然礫	チャート				0.69g		
20	1	7上層	94.52m	剥片	黒色頁岩	2.1cm	3.3cm	0.4cm	2.17g		○
	2	8上層	94.64m	使用痕のある剥片	黒色頁岩	2.8cm	2.6cm	0.8cm	4.48g		○
	3	不　明	不　明	使用痕のある剥片	黒色頁岩	5.9cm	4.1cm	1.4cm	24.48g		○
22	1	8中層	95.29m	自然礫	チャート				27.49g		
	2	7上層	95.47m	自然礫	チャート				4.63g		
25	1	8中層	93.60m	自然礫	チャート				2.05g		
28	3	7下層	95.02m	チップ	黒色頁岩	2.0cm	1.2cm	0.3cm	0.57g		
33	5	7下層	95.08m	自然礫	チャート				17.73g		
	7	8上層	94.97m	自然礫	チャート				7.61g		
34	1	8下層	95.23m	自然礫	砂質頁岩				6.40g		
	2	9下層	94.64m	(人工品)	石器片岩	6.2cm	1.8cm	1.1cm	16.65g	石器破損品か。	○
39	1	7上層	95.23m	破砕礫	安山岩				1.08g		
47	1	9上層	94.90m	自然礫	チャート				5.34g		
50	1	7′下層	94.63m	剥片	黒色安山岩	4.4cm	3.4cm	0.5cm	8.44g		○
57	1	8上層	95.00m	剥片	黒色頁岩	4.9cm	4.1cm	1.2cm	21.46g		○
60	1	8上層	95.08m	ブレイド	黒色頁岩	11.2cm	3.7cm	1.1cm	49.47g		○
67	1	8中層	93.88m	剥片	黒色頁岩	3.2cm	2.2cm	0.8cm	5.14g		○
	1	8上層	94.13m	(石器)	ホルンフェルス	3.6cm	2.1cm	1.4cm	9.69g	3と接合。	○
	3	9上層	94.03m	(石器)	ホルンフェルス	5.1cm	2.4cm	1.9cm	23.03g	2と接合。	○
83	1	8中層	95.24m	剥片	黒色安山岩	5.1cm	3.3cm	1.5cm	20.09g		○
85	1	8中層	94.85m	剥片	黒色頁岩	2.2cm	3.2cm	0.7cm	2.84g		○



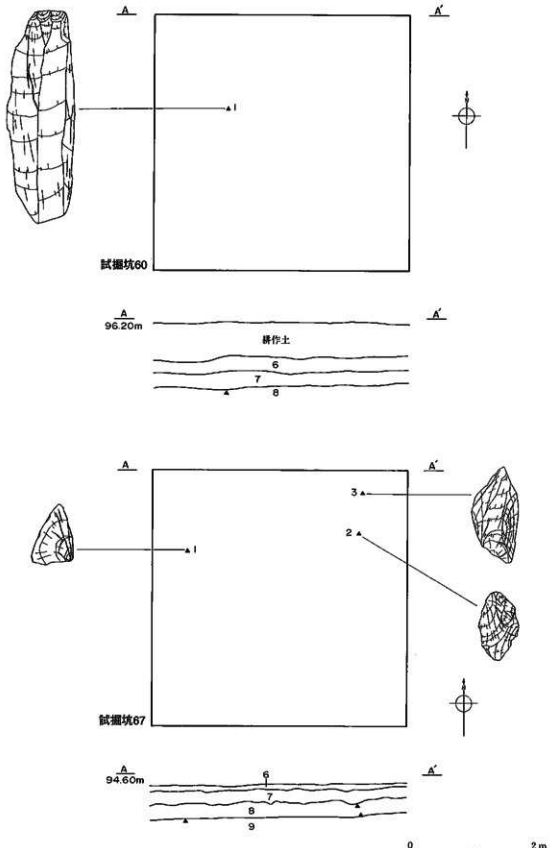
第7図　旧石



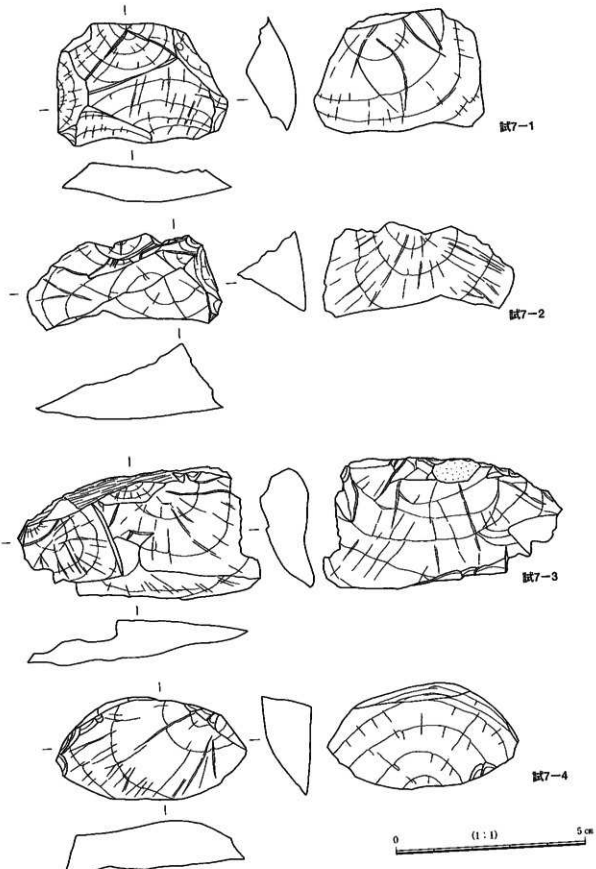
時代遺物分布図①



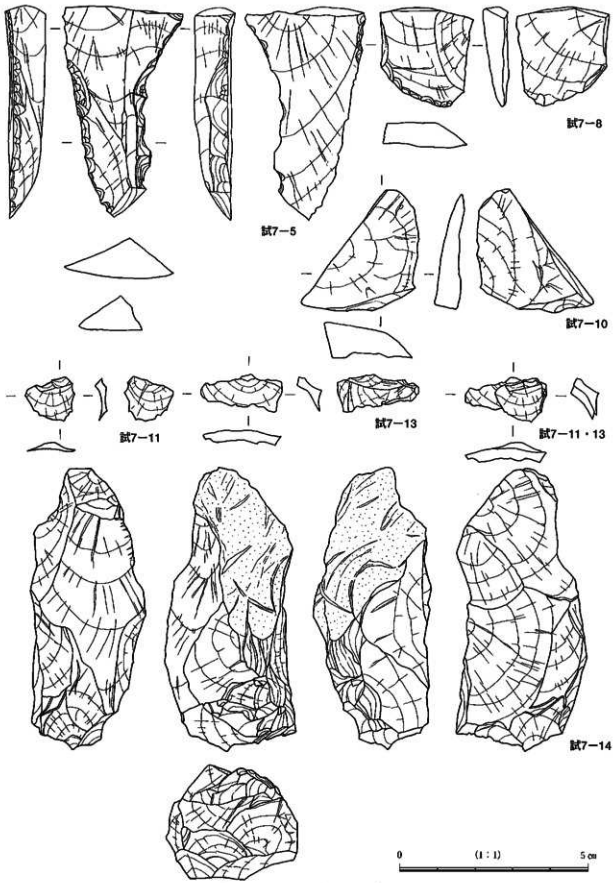
第８図　旧石器時代遺物分布図②



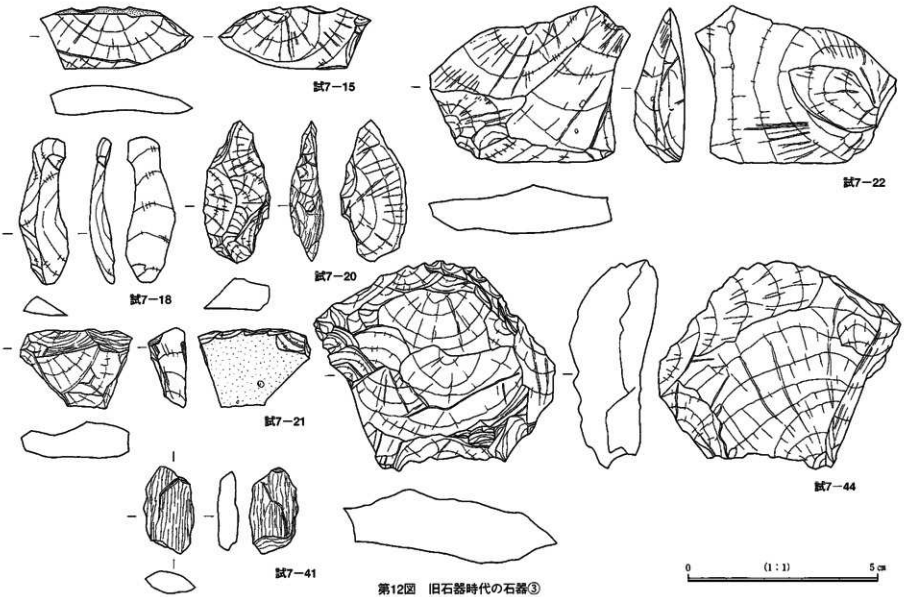
第９図　旧石器時代遺物分布図③



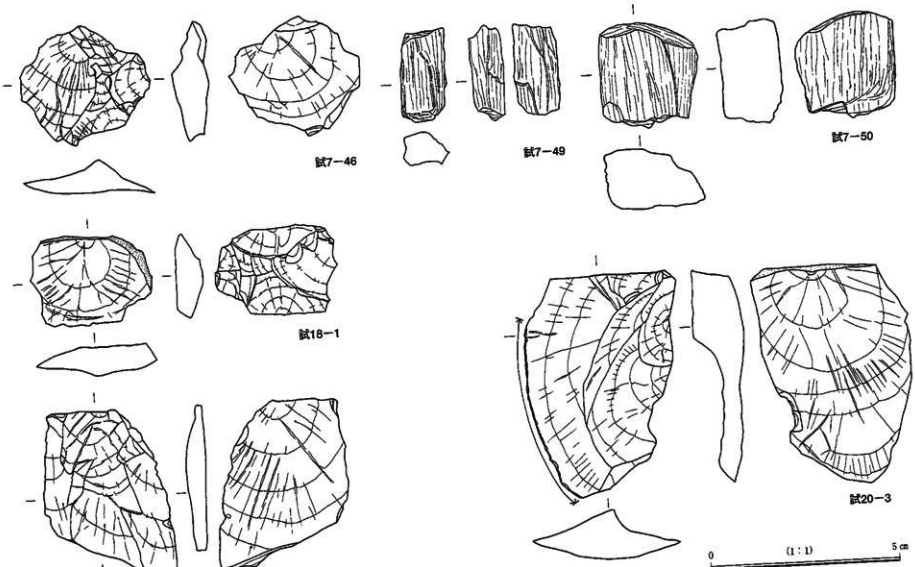
第10図　旧石器時代の石器①



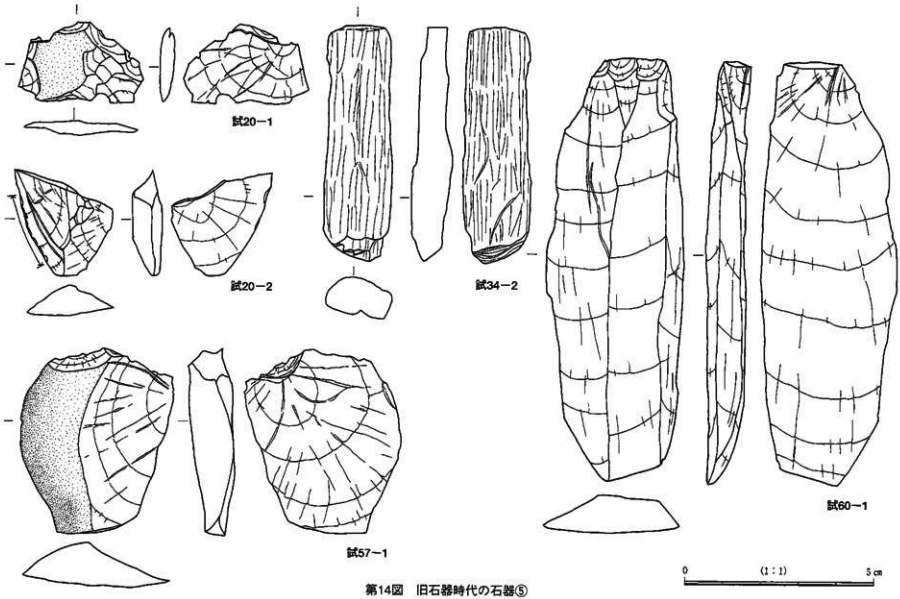
第11図　旧石器時代の石器②



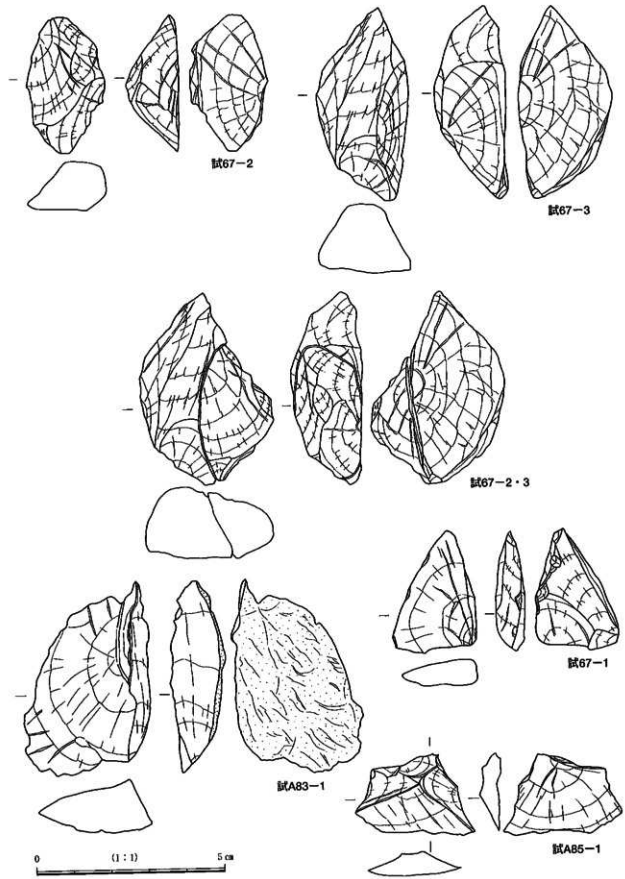
第12図　旧石器時代の石器③



第13図　旧石器時代の石器④



第14図　旧石器時代の石器⑤

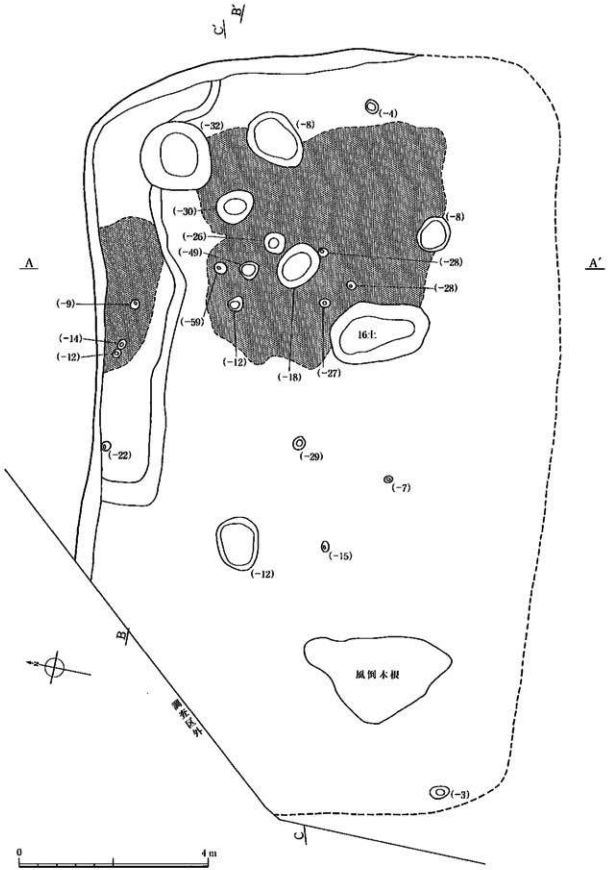


第15図　旧石器時代の石器⑥

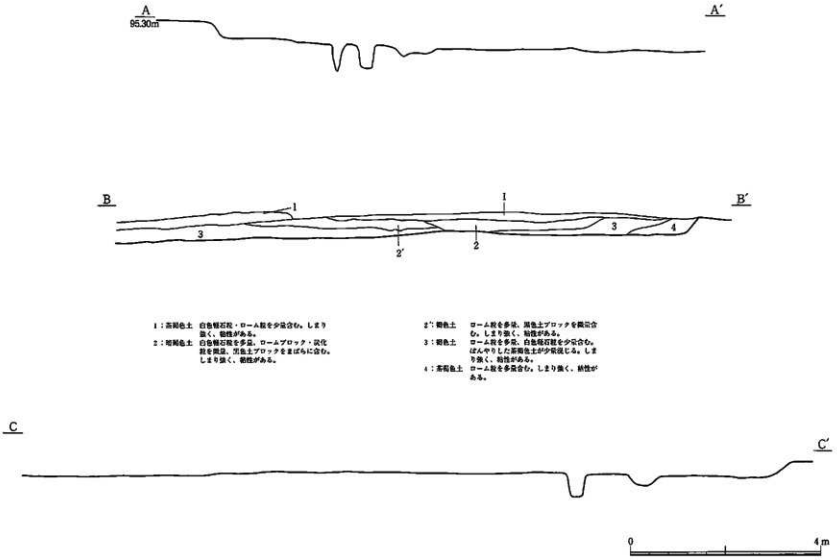
第4節　縄文時代

2号住居跡（遺構：第16～24図、PL6・7／遺物：第25～46図、PL20～34）

位置：G－18グリッド。北西側は調査区外。検出状態：旧石器時代の試掘坑No.70調査時に燃糸文系土器が多量に出土し、その後の調査で住居跡と判断したものである。地山と埋没土の色調等が近似しているため、平面形態の把握は非常に困難な状態であった。また、南緩傾斜の削平を受けやすい地形にあり、キャタピラ跡も残ることから、南側は近年の整地等によって壊されたものと考えられる。北側の上層部は8号古墳に、遺構内中央部東寄りは16号土坑に切られる状態にある。さらに、南西側に不整形な落ち込みがあり、これについては本住居跡より新しい風倒木痕と判断した。平面形態：壁面が遺存するのは東側と北側のみであるが、床面想定範囲は長方形に近い形態と推定され、北東隅の状態から隅丸長方形の可能性が高い。長軸方位：N－78°－E。規模：15.5m×9.5mほどと推定される大形の住居跡である。残存深度：37cm。床面積：不明であるが、145㎡前後と想定される。床面の状態：概ね平坦であるが、やや南西方向にドる状態にある。また、北東隅付近から北側壁面沿い中央付近にかけて、幅1m～1.4mのテラス状に床面より10cmほど高い部分がある。東半部分5m×5mほどの範囲と、テラス状部分中央に顕著な硬化面を確認している。壁面の状態：東側と北側において比較的良好な状態で検出することができた。勾配角は、北側壁面は50°前後、東側壁面は30～50°前後である。壁周溝：検出されなかった。柱穴・ピット：16号土坑・風倒木痕を除き、大小22基のピットや掘り込みが検出されている。中央北東側に床面からの深さ59cmと49cmの比較的深いピット2基が近接して位置している。その他は浅いものが多く、しかも不規則な配置状況にあり、柱穴構成は明確ではない。炉跡：浅い掘り込みが数基存在するが、焼土や被熱痕は認められず、明確に炉跡と判断できるものは検出されなかった。床面の他の範囲においても焼土・被熱痕等、火を用いた痕跡は確認できなかった。遺構埋没状態：埋没土は地山のロームと近似した色調であったが、2層に微量の黒色土ブロックを含むことや、3層に茶褐色土が少量混じること、若干のしまり具合の差異により、埋没土と地山とを判別することができた。埋没土層の様相から自然埋没と考えられるが、後述するように多時期の遺物が混在する状態にあり、遺構の重複等、埋没土は何らかの影響で撹拌されたものと思われる。遺物出土状態：遺構内及び周辺から燃糸文系土器片や石器類が大量に出土しているが、ごく客体的に条痕文系土器、前期土器、後期土器、埴輪片、須恵器、土師器等も出土している。燃糸文系土器には胎土に結晶片岩を含むもの（A類）と含まないもの（B類）があり、A類の分布（第18図）は硬化面範囲を中心とし、さらに西側でも遺構外と想定した範囲にまで流れ込むような状態での分布が認められる。B類の分布（第19図）も概ねA類と類似した状態にある。他の土器類の分布（第20図）は量的には少ないながらも、A・B類の燃糸文系土器の分布と同様で、大量の燃糸文系土器中にこれらの土器類が混在する状態にある。石器類の分布（第21～24図）にも顕著な偏在は認められず、概ね土器類と同様な様相にある。所見：埴輪・須恵器・土師器は北側に重複する8号古墳の遺物の可能性が高く、条痕文系土器・前期土器・後期土器については16号土坑のように遺構が重複していたものと推定される。遺構西側の遺物分布状態からは2軒が重複するようでもあるが、これは風倒木の影響や整地時に引きずられたことなどに起因すると思われる。先述したような多時期の遺物が混在する状態は遺構廃絶時の様相とは言い難いが、本住居跡の時期は出土遺物の圧倒的多数を占める早期燃糸文期（稲荷台式）と判断しておきたい。また、土器と同様に石器類にも燃糸文期より新しい時期の遺物が含まれているものと思われるが、土器の比率からみて量的には少ないものと想定される。

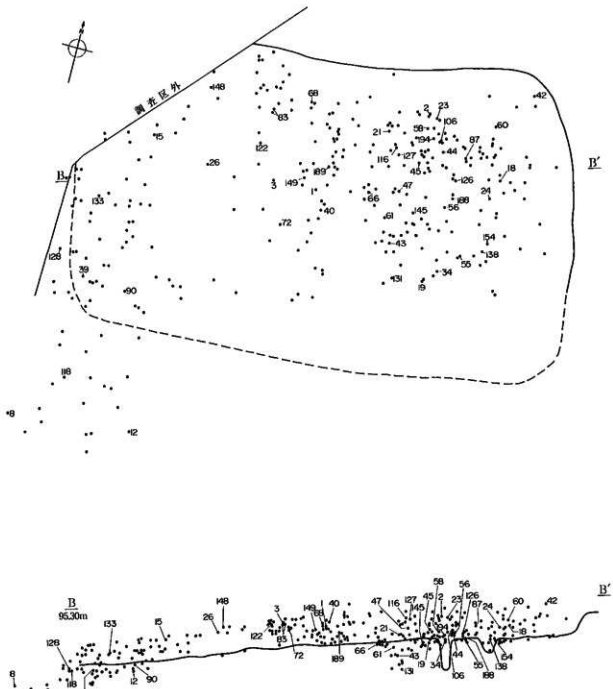

B
B'
A
A'
C
C'
(-32)
(-8)
(-4)
(-30)
(-8)
(-26)
(-49)
(-28)
(-28)
(-9)
(-59)
(-14)
(-12)
(-12)
(-18)
(-27)
16:1:
(-22)
(-29)
(-7)
(-15)
(-12)
風倒木根
(-3)
0
4m

第16図　2号住居跡①



1：黒褐色土　白色軽石粒・ローム粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。
2：暗褐色土　白色軽石粒を多量、ロームブロック・炭化粒を微量、黒色土ブロックをまばらに含む。しまり強く、粘性がある。
2'：褐色土　ローム粒を多量、黒色土ブロックを微量含む。しまり強く、粘性がある。
3：褐色土　ローム粒を多量、白色軽石粒を少量含む。ぼんやりした茶褐色土が全体に広がる。しまり強く、粘性がある。
4：茶褐色土　ローム粒を多量含む。しまり強く、粘性がある。

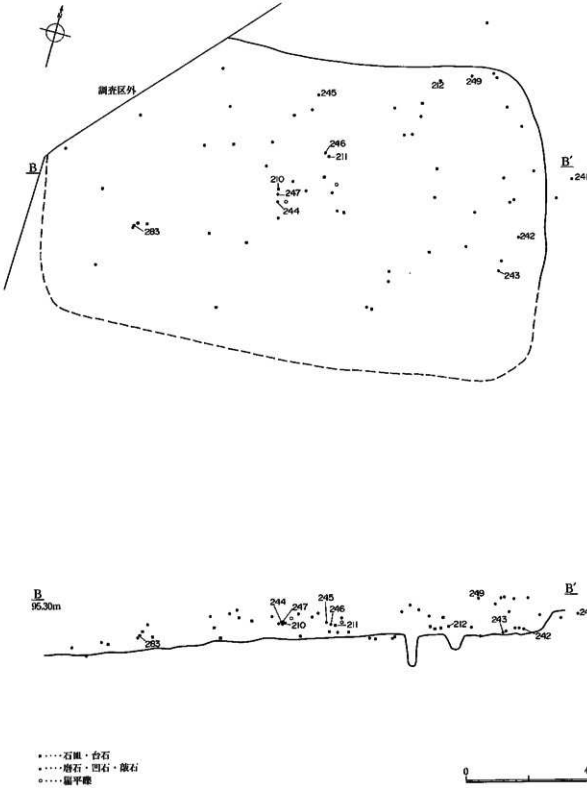
第17図　2号住居跡②



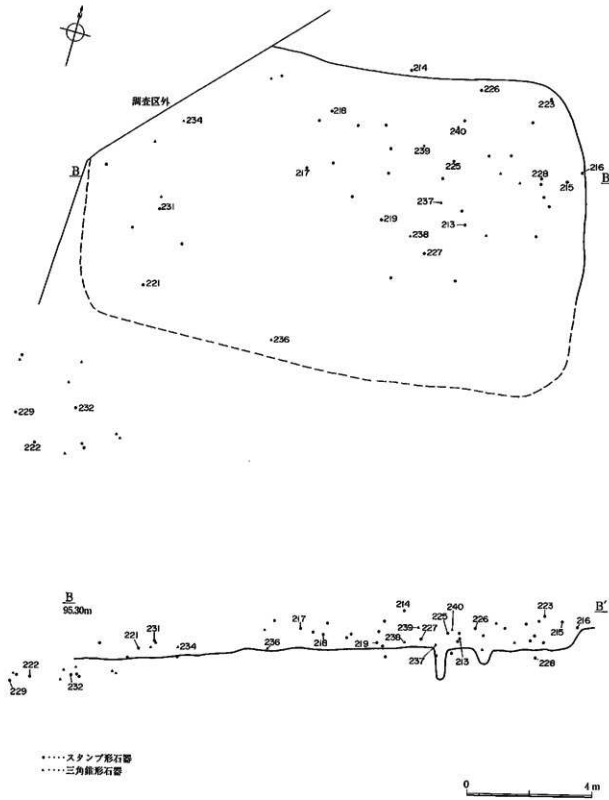
第18図　2号住居跡撚糸文系土器A類分布図

第19図　2号住居跡撚糸文系土器B類分布図

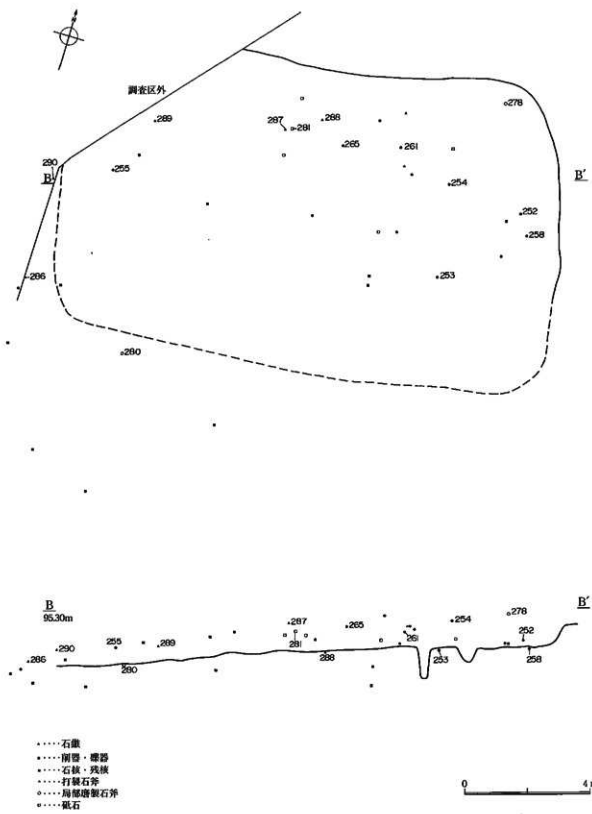
第20図　2号住居跡その他の土器類分布図



第21図　2号住居跡石器類分布図①



第22図　2号住居跡石器類分布図②



第23図　2号住居跡石器類分布図③

第24図　2号住居跡石器類分布図④

遺物：本住居跡からは、土器類1,855点、石器類2,449点が検出されている。以下に出土遺物を概観する。

〈土器〉

撚糸文系土器は1,640点を確認している。いずれも破片の状態で、数点は接合したが、器形を把握できるまでには至らなかった。部位別には、口縁部237点、胴部1,360点、底部43点である。施文は、撚糸文Rが471点であるのに対し撚糸文Lは17点にすぎない。他に、施文原体の単軸絡条体を回転せずに引きずったもの（引きずり）が64点、破片内が無文のもの670点、不明418点がある。撚糸文Rには際だって太めの原体を用いたもの（9·108·150·164·175·187·201）もみられる。また、胎土に結晶片岩を含むもの（A類）と含まないもの（B類）があり、その比率はA類が約27%、B類が約73%である。口唇部は断面円頭状のものが多く、7·13·20·37などのように肥厚するもの、43·65·71などのように尖頭状のもの、6·29·61·77などのように平坦な面をなすものなどもみられる。底部は尖底であるが、器形が把握できるものは少なかった。本住居跡出土の撚糸文系土器は、概ね稲荷台式に比定できる資料である。掲載遺物209点（1～209）。

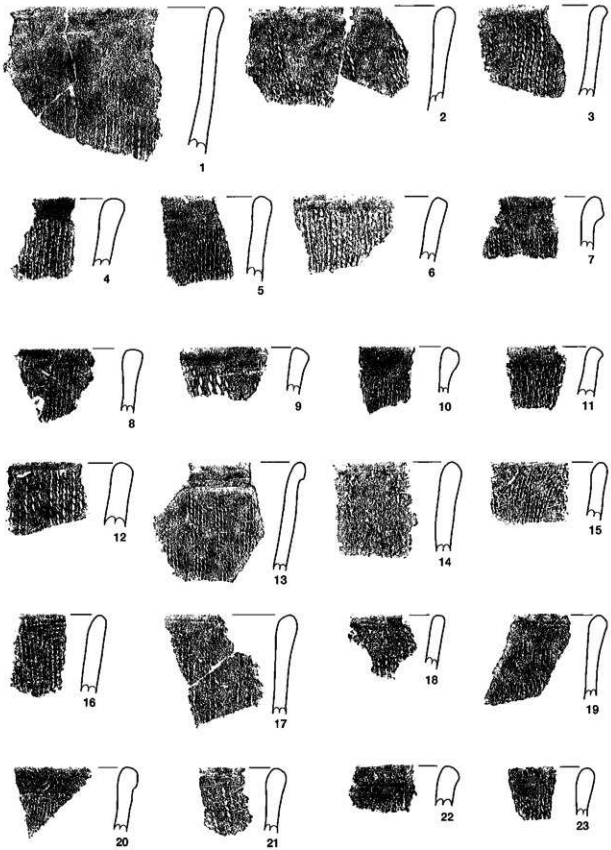
撚糸文系土器の他、早期末葉とみられる条痕文系土器106点、諸磯b式を中心とする前期土器34点、後期土器1点、埴輪片29点、須恵器3点、土師器39点、不明土器3点を確認している。これらは総計215点で、土器類全体の11.6%である。これらは、先述したように撚糸文系土器に混在するような出土状態であったが、量的には客体的であり紛れ込みと考えておきたい。掲載遺物14点（291～304）。

〈石器〉

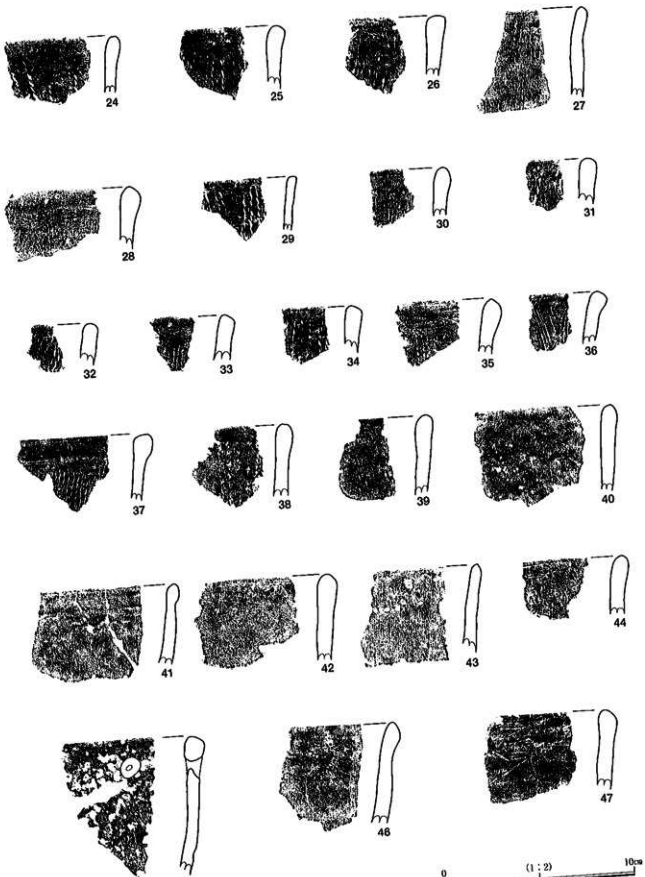
石器類は器種別・石材別点数を表6に示した。スタンプ形石器・三角錐形石器は撚糸文系土器に伴う特徴的な遺物であるが、本住居跡からはスタンプ形石器51点、三角錐形石器22点と他の調査例と比較しても卓越して多い。スタンプ形石器は棒状に近い自然礫を1～2度程度の打撃で分割し、わずかな調整を加えて平坦面を作出している。側縁部に加工を施していないもの（1類）、片側縁部に加工を施すもの（2類）、両側縁部に加工を施すもの（3類）、広面に加工を施すもの（4類）がみられるが、本住居跡出土のスタンプ形石器には平坦面に摩耗痕は認められず、また側縁部にも摩耗痕は確認できなかった。掲載遺物81点（210～290）。

表6　2号住居跡出土石器の器種・石材別点数

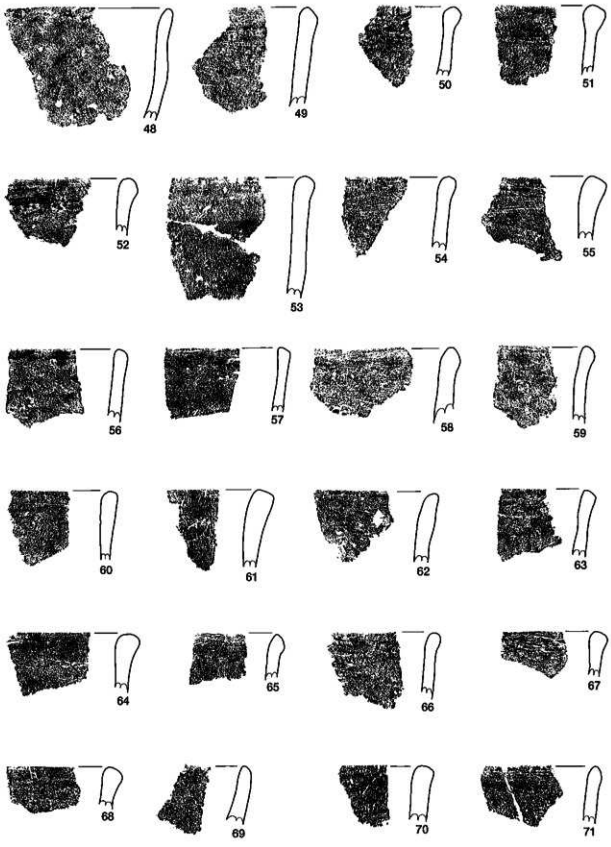
	黒色頁岩	頁岩	ヒン岩	輝石安山岩	角閃石安山岩	石英安山岩	黒色安山岩	安山岩	閃緑岩	石英閃緑岩	花崗岩	輝緑岩	輝緑凝灰岩	凝灰岩	チャート	黒曜石	硬砂岩	砂岩	粘板岩	泥灰岩	蛇紋岩	緑泥片岩	絹雲母片岩	石墨片岩	黒雲母片麻岩	紅簾片岩	結晶片岩	玄武岩	ホルンフェルス	その他/不明	合計
石皿				7					1																						8
台石				8																											11
スタンプ形石器	9		23	4	3			2	9	1	1	2																			51
三角錐形石器	22																														22
磨石			3	34				2	4		1														1						52
凹石				2	6	1																									2
敲石				1																											1
削器	14																														14
礫器	2	1																													3
打製石斧	4			1																											5
局部磨製石斧		1											1																		2
石核（残核）	16			1																											17
調整ある剥片	72	2		2			1								12		1														90
使用痕ある剥片	8														2																10
石鏃									1						5																6
砥石				1														7													8
丸石	1		2																												3
扁平礫				3										1																	4
礫	3	3	3	381	37	1		1						1	1		4					1								3	439
小礫	1	1	3	2					1						3		1													3	15
剥片	1237	49	29	132	6	5	29	9	2	1		7		5	89	2	13	1	2	8	2	9	1	16		3	5	1	2	3	1668
不明	9			2		1																								6	18
合計	1398	57	63	581	52	8	30	14	18	2	2	9	1	7	112	2	19	8	2	8	2	10	1	16	1	3	5	1	2	15	2449



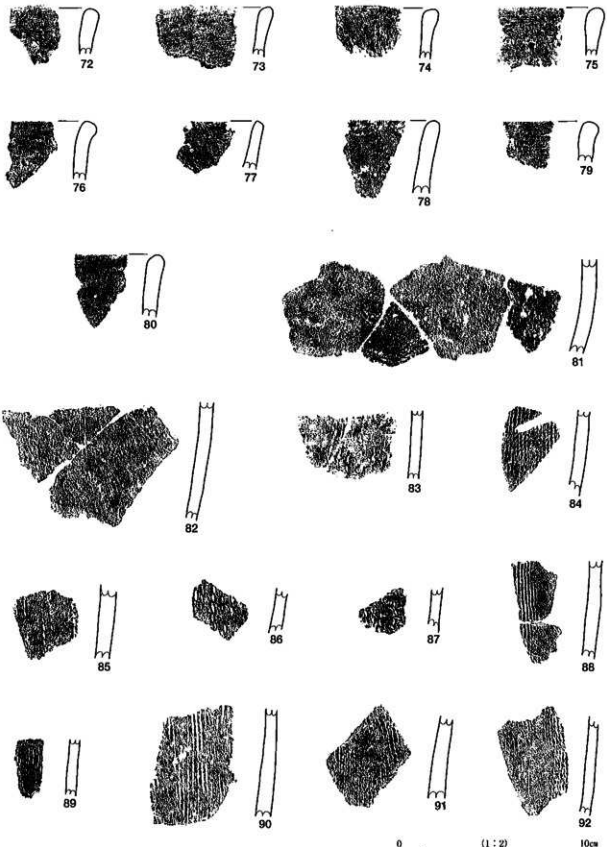
第25図　2号住居跡出土遺物①



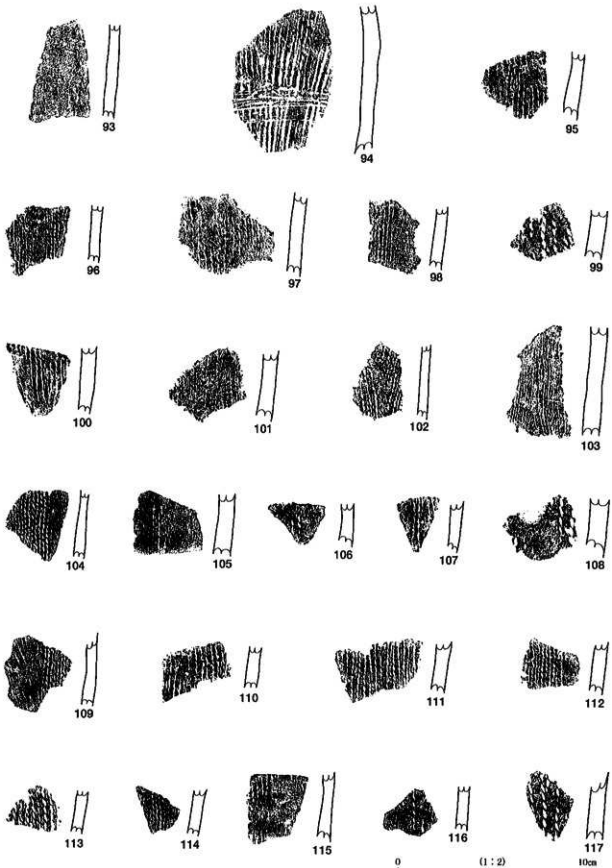
第26図　2号住居跡出土遺物②



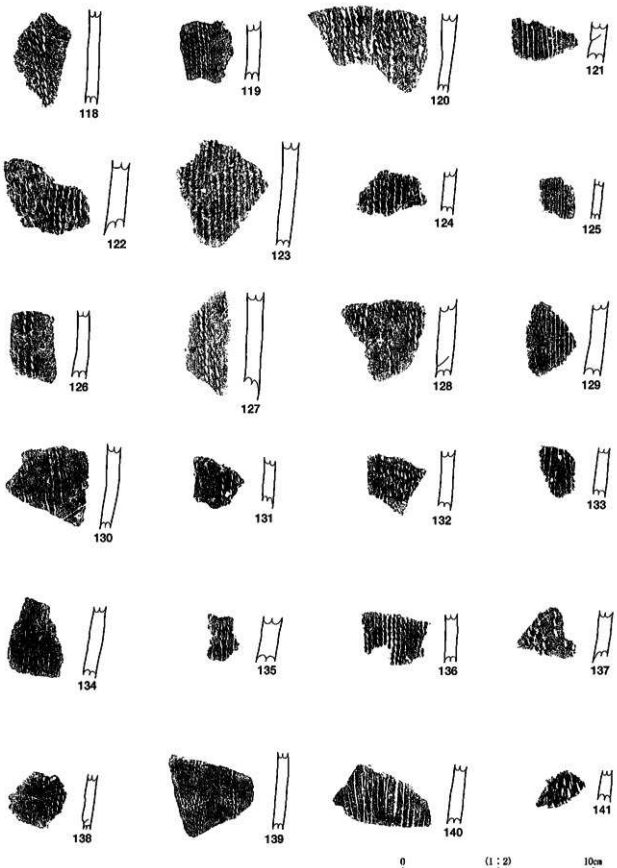
第27図　2号住居跡出土遺物③



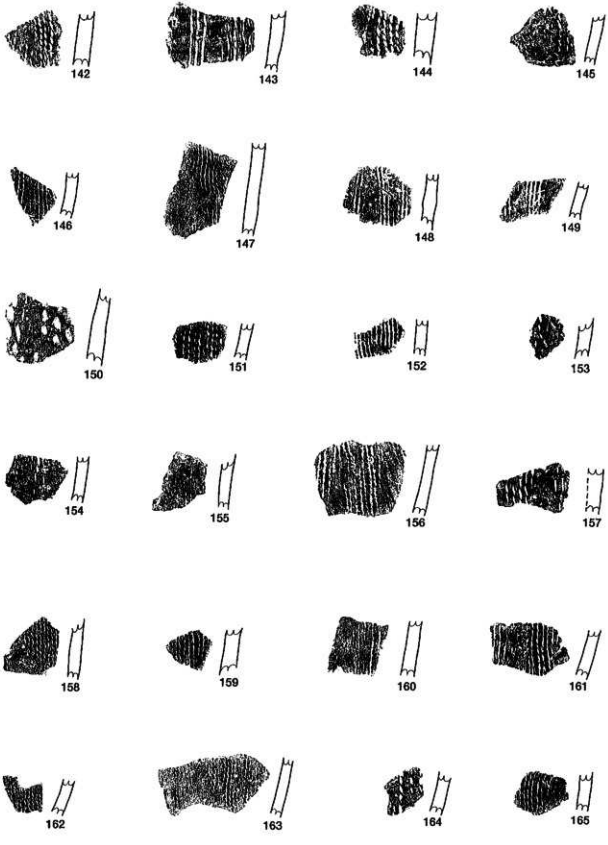
第28図　2号住居跡出土遺物④



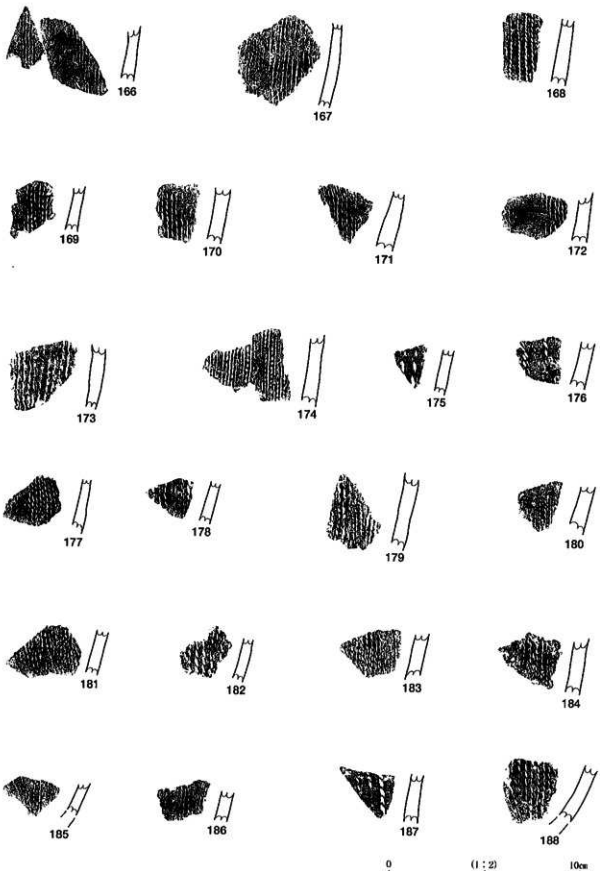
第29図　2号住居跡出土遺物⑤



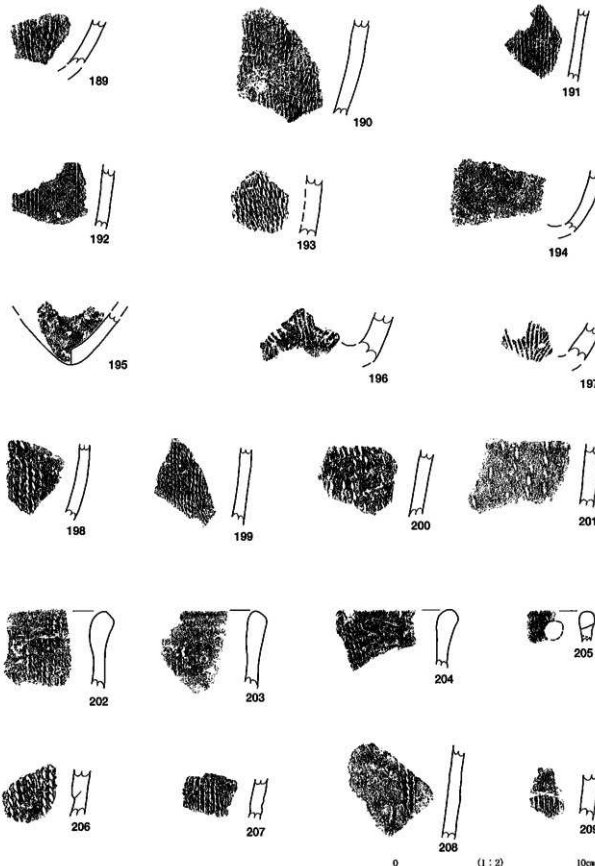
第30図　2号住居跡出土遺物⑥



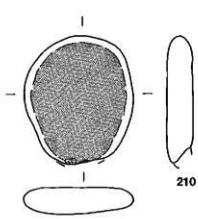
第31図　2号住居跡出土遺物⑦

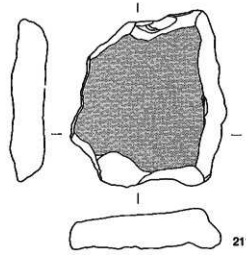


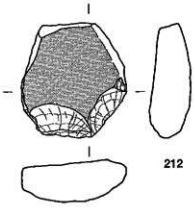
第32図　2号住居跡出土遺物⑧

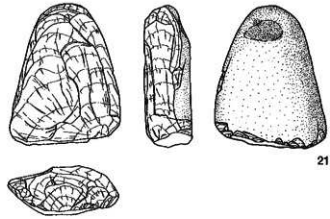


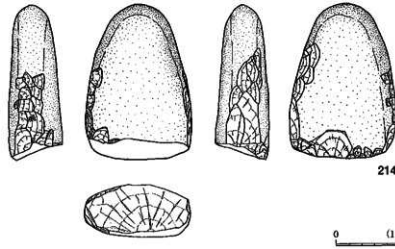
第33図　2号住居跡出土遺物⑨



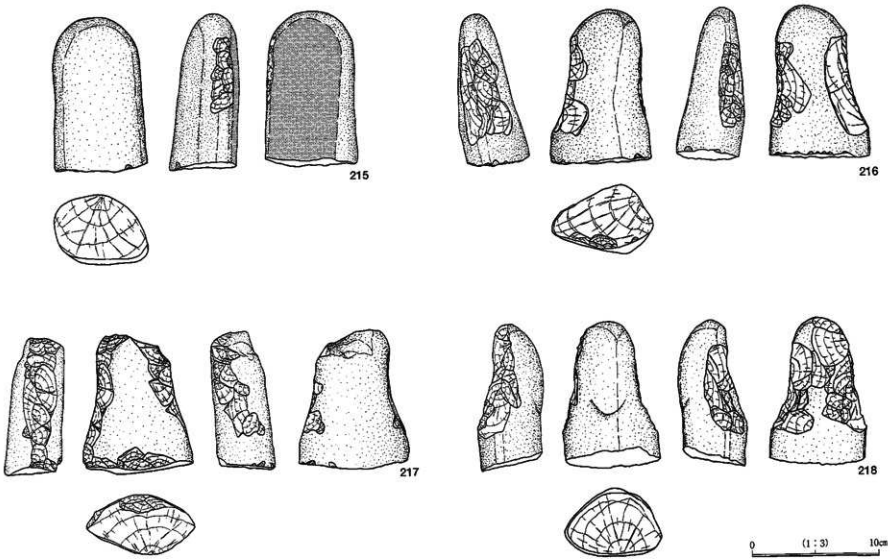




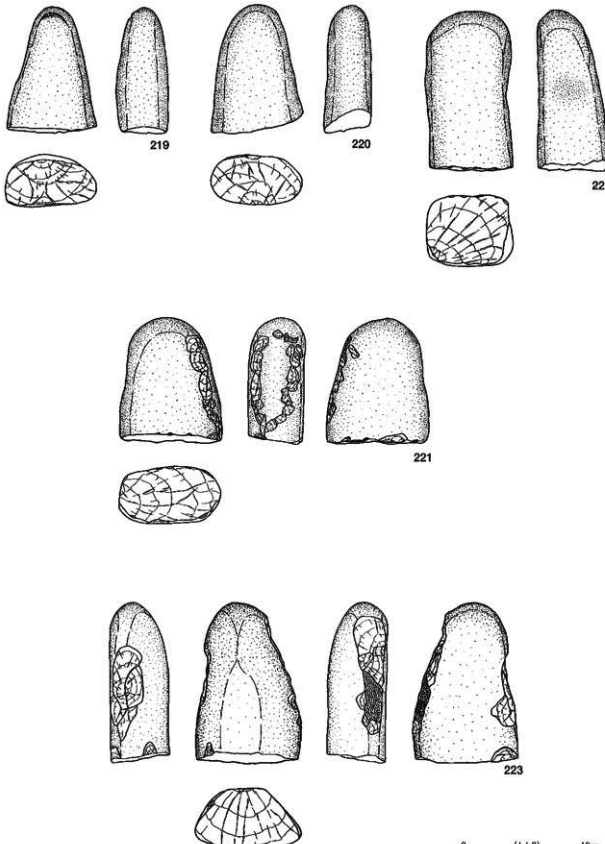




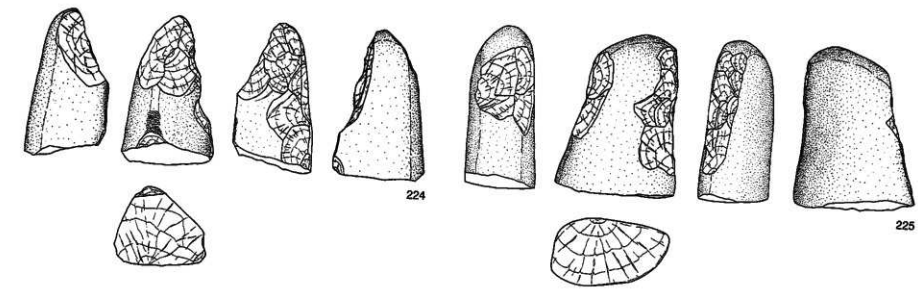
第34図　2号住居跡出土遺物⑩



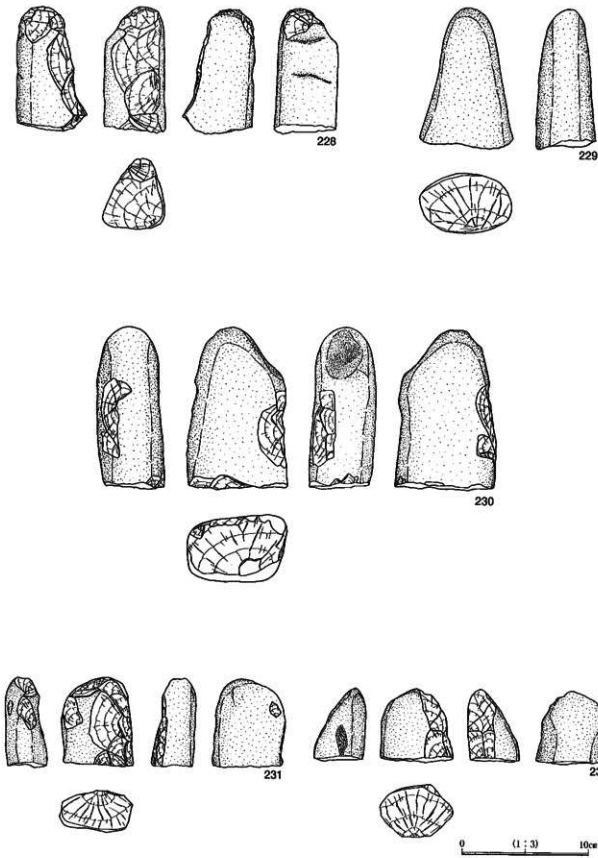
第35図　2号住居跡出土遺物①



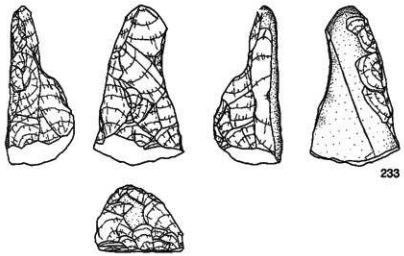
第36図　2号住居跡出土遺物⑫

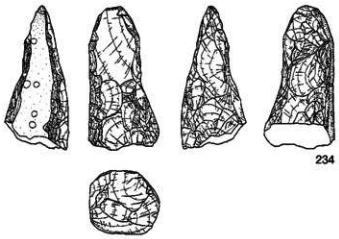


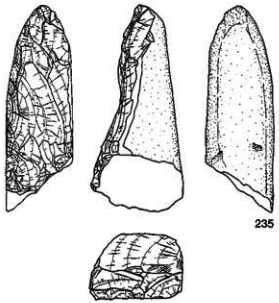
第37図　2号住居跡出土遺物⑬

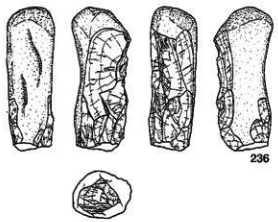


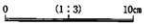
第38図　2号住居跡出土遺物④



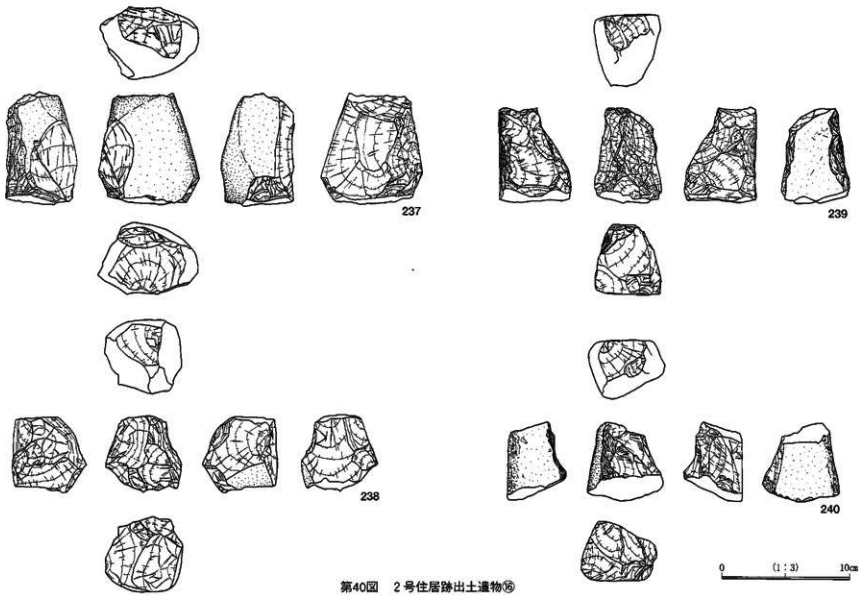




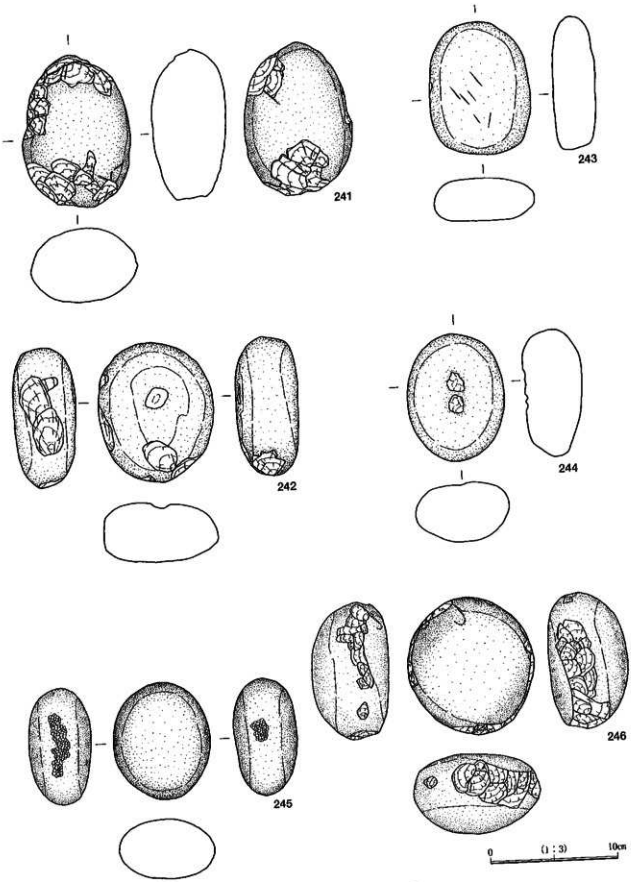




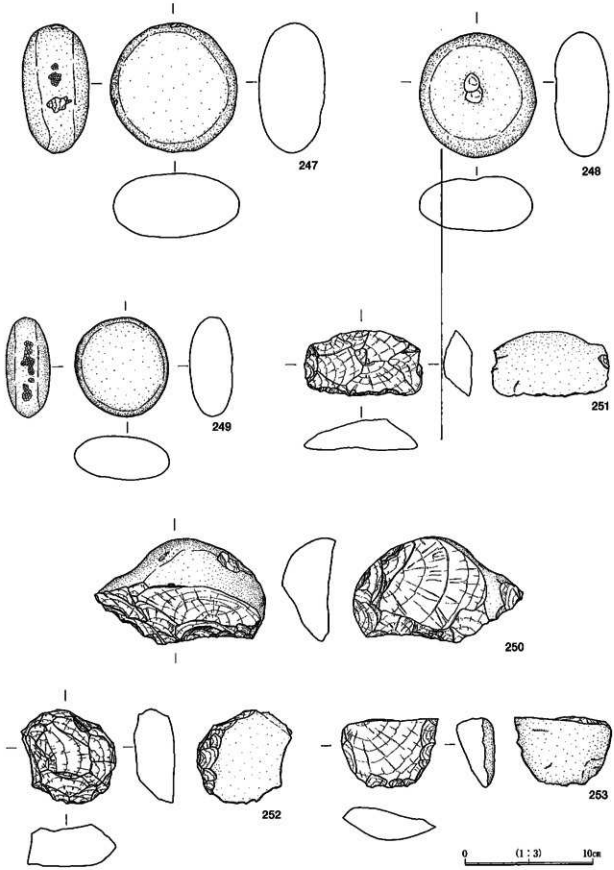
第39図　2号住居跡出土遺物⑮



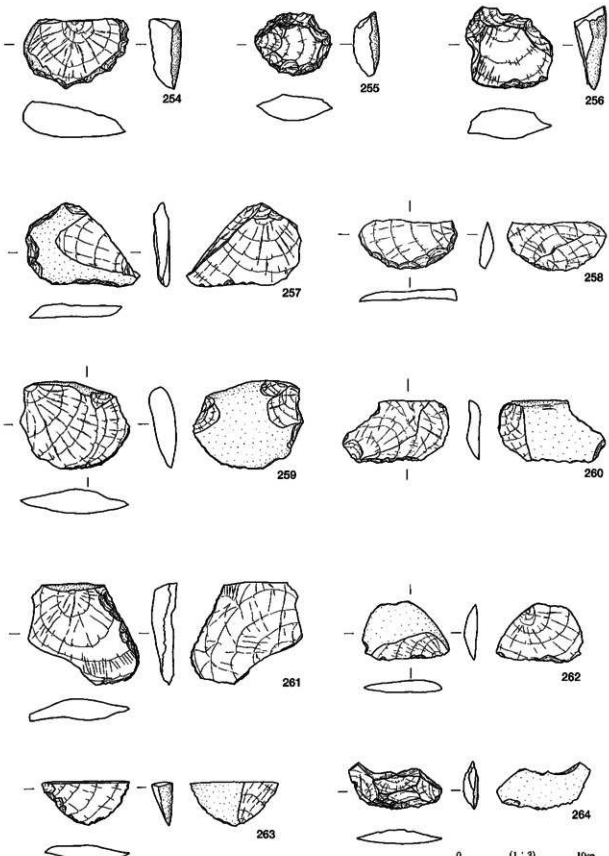
第40図　2号住居跡出土遺物⑮



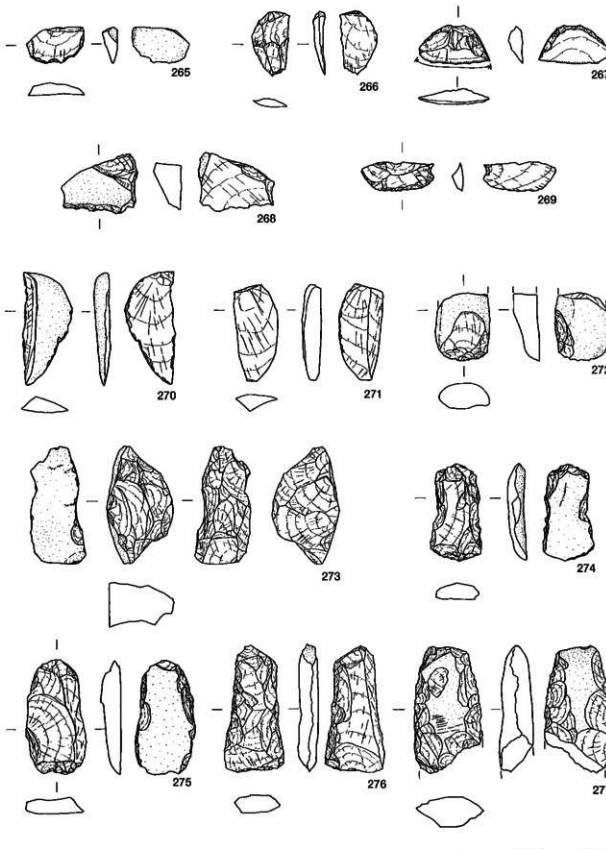
第41図　2号住居跡出土遺物⑰



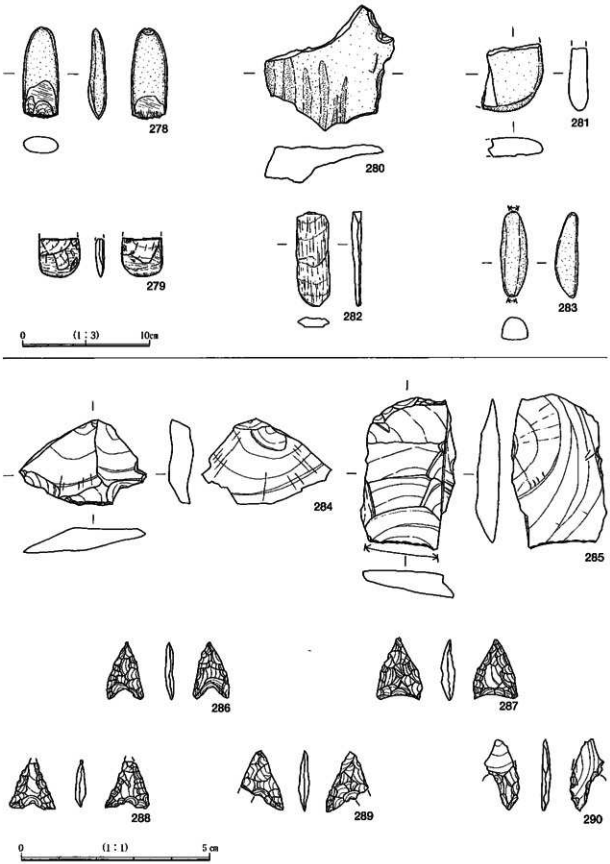
第42図　2号住居跡出土遺物⑱



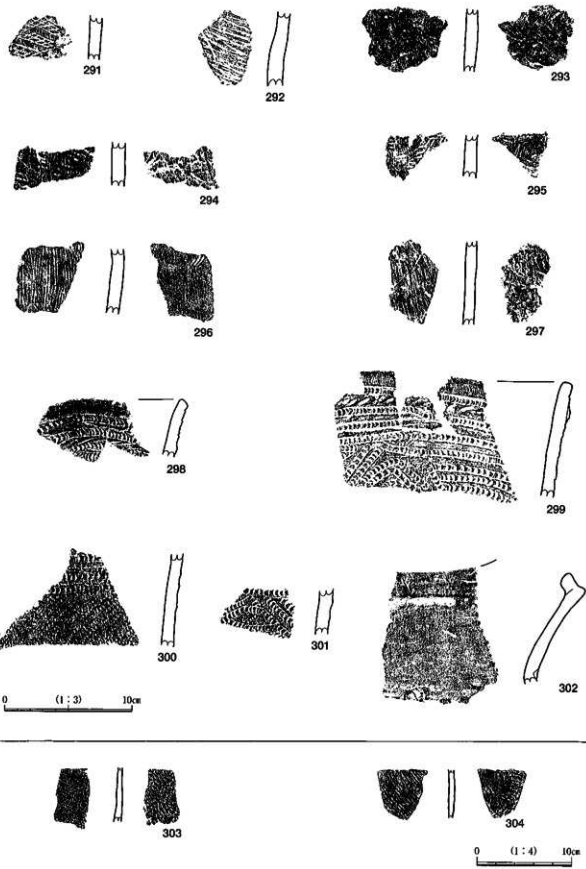
第43図　2号住居跡出土遺物⑨



第44図　2号住居跡出土遺物⑳



第45図　2号住居跡出土遺物②

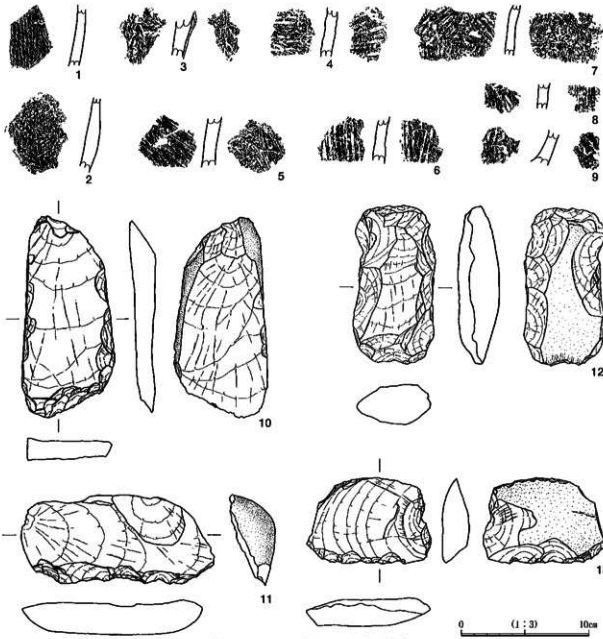


第46図　2号住居跡出土遺物②

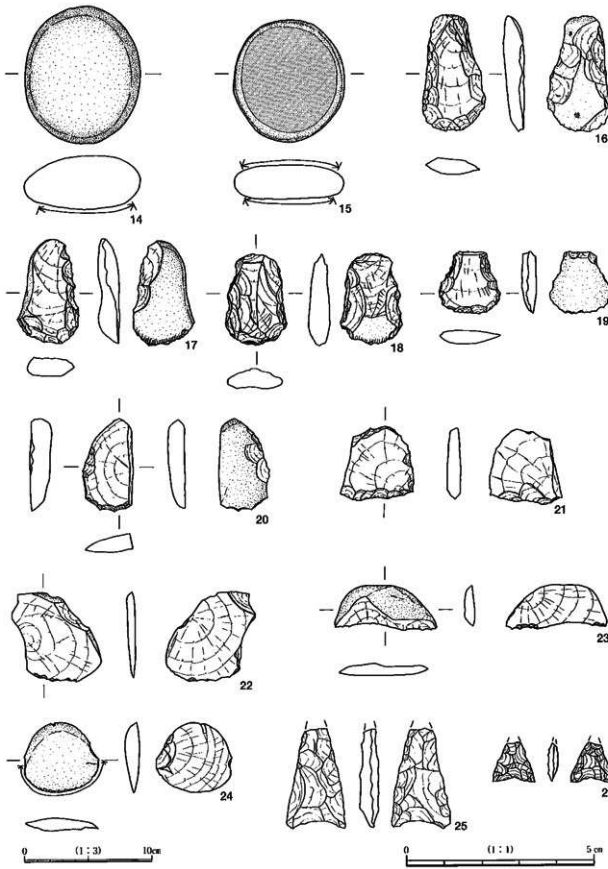
Ｅ－16グリッド遺物集中地点（遺構：PL8／遺物：第47･48図、PL35･36）

検出状態：Ｇ－18グリッドにおいて２号住居跡が検出されたため、当初の遺構確認面の下層にも同様の遺構が存在する可能性が考えられた。そこで、周辺の各グリッドにトレンチを設定して調査を行ったところ、本グリッドを中心に一部Ｄ－16グリッドにかけての径４ｍほどの範囲からややまとまった量の遺物が出土した。出土地点は当初の確認面より10～20cmほど下であったが、明確な遺構は確認することができなかった。

遺物：土器は、早期末葉の条痕文系土器38点･撚糸文系土器14点の他、須恵器１点、土師器３点を確認している。石器類は、磨石３点（輝石安山岩２、角閃石安山岩１）、敲器７点（黒色頁岩５、硬砂岩１、泥灰岩１）、打製石斧４点（黒色頁岩４）、石鏃２点（黒色頁岩１、チャート１）、調整のある剥片12点（黒色頁岩12）、礫２点（輝石安山岩１、ヒン岩１）、剥片･細片89点（黒色頁岩64、チャート７、石英片岩２、結晶片岩１、泥灰岩３、輝緑凝灰岩１、凝灰岩６、ヒン岩１、輝石安山岩２、ホルンフェルス２）を確認している。掲載遺物、土器９点、石器17点。



第47図　Ｅ－16グリッド出土遺物①



第48図　E－16グリッド出土遺物②

土坑

縄文時代の土坑と判断したのは、1号・2号・3号・4号・12号・13号・14号・15号・16号土坑の9基で、陥穴と想定されるものが多い。5号・6号・10号・11号土坑は時期不明で、中には古墳周溝を切るものも含まれているが、便宜上、本項で扱うことにする。

1号土坑（遺構：第49図、PL8）
位置：B－2グリッド。検出状態：耕作により上面は削平されていた。平面形態：楕円形。長軸方位：N－10°－E。規模：1.38m×1.38m。残存深度：38cm。ピット：中央付近に深さ53cmの小ピット1基。備考：出土遺物なし。

2号土坑（遺構：第49図、PL9）
位置：C－2グリッド。検出状態：上面は耕作により削平されていた。平面形態：楕円形に近い長方形。長軸方位：N－23°－W。規模：1.93m×1.25m。残存深度：90cm。ピット：南側に深さ10cm前後の小ピット7基。備考：出土遺物なし。

3号土坑（遺構：第49図、PL9）
位置：C－3グリッド。検出状態：上面は耕作により削平されていた。平面形態：楕円形に近い長方形。長軸方位：N－30°－W。規模：2.00m×1.17m。残存深度：73cm。ピット：南側に深さ6cmの小ピット1基。備考：出土遺物なし。

4号土坑（第49図、PL9）
位置：F－4グリッド。検出状態：上面は耕作により削平されていた。平面形態：長方形。長軸方位：N－50°－W。規模：2.40m×0.87m。残存深度：60cm。ピット：長軸方向一直線上に深さ30cm前後の小ピット3基。備考：出土遺物なし。

5号土坑（遺構：第49図、PL8）
位置：G－6グリッド。検出状態：2号古墳周溝内で検出。同古墳より新しいと思われる。平面形態：楕円形。長軸方位：N－83°－E。規模：1.35m×0.85m。残存深度：18cm。備考：底面に焼土が検出されている。出土遺物なし。

6号土坑（遺構：第50図、PL14）
位置：J－4グリッド。検出状態：1号古墳周溝埋没土2層から掘り込む。平面形態：楕円形。長軸方位：N－5°－W。規模：1.25m×1.05m。残存深度：推定88cm。備考：底面に焼土。出土遺物なし。

10号土坑（遺構：第50図、PL8）
位置：J－13グリッド。南側は調査区外。検出状態：耕作により上面は削平されていた。平面形態：不明。規模：不明。最大幅3.78m。残存深度：40cm。備考：径5～10cm程度の礫が疎らに出土している。

11号土坑（遺構：第50図、PL14）
位置：I－11グリッド。平面形態：三日月状。規模：4.60m×1.50m。残存深度：22cm。備考：古墳周溝の可能性がある。礫2点の他は遺物なし。

12号土坑（遺構：第50図、PL9／遺物：第52図、PL36）
位置：I－18グリッド。検出状態：平安時代の1号住居跡に切られる。平面形態：楕円形。長軸方位：N－50°－W。規模：2.78m×1.98m。残存深度：114cm。ピット：長軸方向一直線上に深さ30cm前後の小ピット2基。遺物：埋没土上層から縄文時代後期土器30点、撚糸文系土器8点、調整ある剥片1点（黒色頁岩）、剥片3点（黒色頁岩2、黒色安山岩1）が出土している。掲載遺物、土器8点、石器1点。

13号土坑（遺構：第50図、PL9）
位置：F－5グリッド。検出状態：北側は削平。平面形態：推定楕円形。長軸方位：N－19°－W。規模：推定2.30m×0.82m。残存深度：84cm。ピット：長軸方向一直線上にピット3基。中央のピットは深さ4cmと浅いが両端の2基は40cm前後である。備考：礫1点（安山岩）の他は遺物なし。

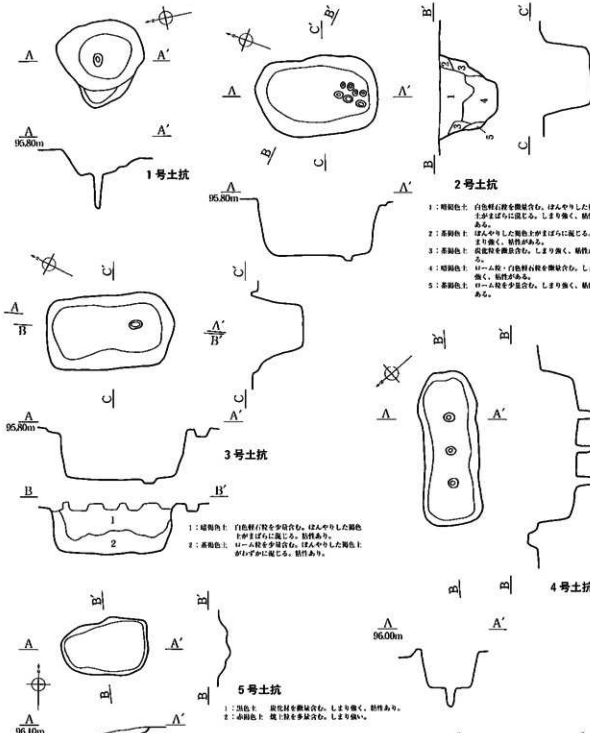
14号土坑（遺構：第51図、PL9／遺物：第52図、PL36）
位置：E－16グリッド。平面形態：楕円形。長軸方位：N－62°－W。規模：2.15m×1.18m。残存深度：53cm。遺物：撚糸文系土器5点、条痕文系土器4点、剥片27点（輝石安山岩2、黒色頁岩22、硬砂岩1、チャート2）が出土している。掲載遺物、土器3点。

15号土坑（遺構：第51図）
位置：H－12グリッド。平面形態：推定楕円形。長

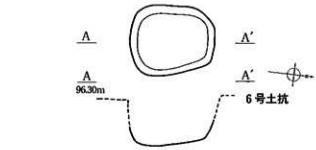
軸方位：N－88°－W。規模：不明×1.00m。残存深度：172cm。備考：断面V字状。埋没土最下層はしまり弱い。出土遺物なし。

16号土坑（遺構：第51図、PL8）

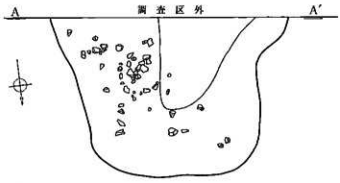
位置：G－18グリッド。検出状態：2号住居跡内で検出。同住居跡より新しいと思われる。平面形態：楕円形。長軸方位：N－24°－W。規模：2.13m×1.25m。残存深度：74cm。備考：撚糸文系土器1点と剥片1点（黒色頁岩）が出土しているが、これは2号住居跡の遺物と考えられる。



第49図　土坑①

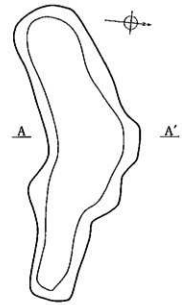


6号土坑



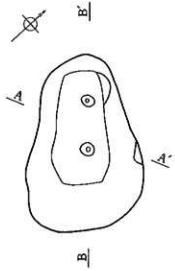
10号土坑

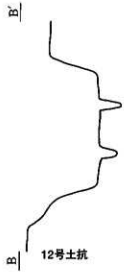
1：暗褐色土　ロームブロックを少量、白色軽石粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
2：暗褐色土　ローム粒・ブロックを少量含む。しまり強く、粘性がある。



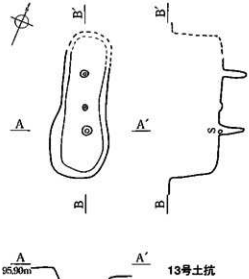
11号土坑

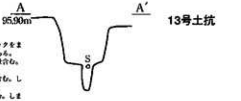
1：黒色土　白色軽石粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
2：暗褐色土　ローム粒を多量含む。しまり強く、粘性がある。



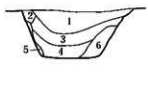


12号土坑



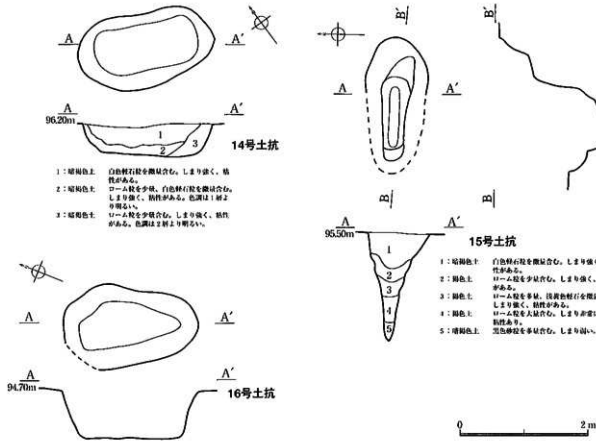


13号土坑

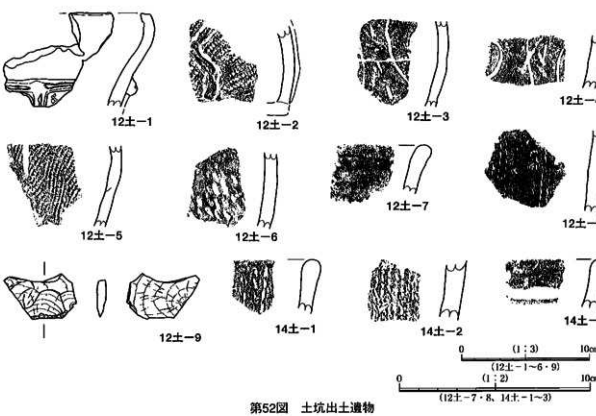


1：暗褐色土　白色軽石粒を多量、基盤色土ブロックをまばらに含む。しまり強く、粘性がある。
2：褐色土　白色軽石粒を少量、ローム粒を多量含む。しまり強く、粘性がある。
3：暗褐色土　白色軽石粒を微量、焼化粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
4：暗褐色土　ローム粒を微量、炭化材を微量含む。しまり強く、粘性がある。
5：黒色土　ローム粒を多量含む。しまり強く、粘性がある。
6：暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。

第50図　土坑②



第51図　土坑③



第52図　土坑出土遺物

第５節　古墳時代

１号古墳（遺構：第54図、PL10／遺物：第54図、PL36）

位置：Ｉ－４～Ｊ－５グリッド。南側は調査区外。**検出状態**：墳丘は既に削平され、周溝は途切れ途切れの状態で検出されている。主体部はわずかに残骸をとどめる程度の遺存状態である。本古墳の西側範囲は主体部の位置から判断して土坑状に残存している部分（内側）までと思われるが、さらにその西側にも溝（外側）が存在する。外側の溝は別古墳の周溝と思われるが、明確に判断できなかった。東側周溝部に６号土坑が重複し、同土坑は周溝埋没土２層から掘り込まれていた。また、主体部北西側には撹乱坑がある。**形態**：円墳と推定される。**規模**：内側は周溝内側の立ち上がりで13.1ｍ前後、周溝外側の立ち上がりで17.8ｍ前後。外側は周溝内側の立ち上がりで20.8ｍ前後、周溝外側の立ち上がりで30.9ｍ前後。**周溝**：不整円形の状態で残存し、先述したように途切れ途切れの状態にある。残存最大幅は4.50ｍ、残存深度は35～65㎝で一定していない。ブリッジが存在していた可能性もあるが、遺存状態の影響もあり、断定はできない。周溝内には暗褐色・黒褐色基調の土が自然埋没する。４層の茶褐色土は人為的に埋め戻された可能性が考えられる。**主体部**：Ｓ－13°－Ｗに開口する横穴式石室と思われるが、遺存状態が悪く、不明な点が多い。側壁・奥壁等に使用された礫は抜き取られ、主体部底面付近には礫が存在するものの、かなり撹拌されているものと思われる。散乱する礫には輝石安山岩の割石と河原石がみられる。また、前庭を有していた可能性があり、前庭部には深さ80㎝程度の深い掘り込みがある。南側は調査区外のため不明であるが、東西方向は約６ｍの規模である。**遺物出土状態**：石室前庭部付近から須恵器片、土師器坏片が出土している。周溝内からは凹石等の縄文時代と思われる遺物が少量みられる。埴輪は検出されなかった。

遺物：須恵器片、土師器坏１点、凹石１点、調整のある剥片１点を確認している。須恵器(1)は平瓶と想定される。掲載遺物２点。

２号古墳（遺構：第53図、PL10・11／遺物：第53図、PL36）

位置：Ｄ－５～Ｇ－８グリッド。**検出状態**：墳丘は既に削平されていた。周溝は全周する。南側周溝内に本古墳よりも新しいと思われる５号土坑が重複する。北側は耕作の影響を受けている。**形態**：円墳。**規模**：周溝内側の立ち上がり径25.5ｍ、周溝外側の立ち上がり径33～34ｍ。**周溝**：やや不整な円形状に全周する。幅は3.2～6.0ｍと不定で、残存する深さも32～154㎝までの幅があり、所々段状に深く掘り込まれている。エレベーション図を作成したＡ－Ａ′地点周辺は極端に浅く、逆にＨ－Ｈ′地点周辺は深い状態にある。また、Ｈ－Ｈ′地点の対の位置には土坑状の掘り方がある。周溝内には暗褐色・黒褐色基調の土が自然埋没する。６～８層の褐色基調の土（あるいは５層の茶褐色土も）は人為的に埋め戻された可能性が考えられる。**主体部**：墳丘部中央南西寄りに、東西方向約7.5ｍの範囲に礫が検出されている。礫は輝石安山岩の割石や河原石であり、本古墳の主体部はこれらの石材を用いた横穴式石室と思われるが、礫は攪拌され動かされた状態にあり、詳細は不明である。**遺物出土状態**：周溝内埋没土中位付近を中心に須恵器片、土師器坏が、また、先述した礫に混じるように刀子が出土している。他に縄文時代の遺物が少量みられる。埴輪は検出されなかった。

遺物：須恵器甕片・長頸壺片、土師器坏１点、刀子１点、撚糸文系土器片、石鏃２点、剥片等を確認している。土師器坏(5)はほぼ完形で、外面に煤が付着していた。掲載遺物６点。

３号古墳（遺構：第55図、PL12／遺物：第56図、PL37）

位置：Ｇ－８～Ｉ－10グリッド。南北方向の農道下は未調査。**検出状態**：墳丘は既に削平され、周溝は北西

部や南東部では明瞭に確認できなかった。主体部はわずかに残骸をとどめる程度の遺存状態である。形態：円墳と思われる。規模：周溝内側の立ち上がり径16.0m、周溝外側の立ち上がり径25.5m。周溝：不整円形状に巡るようであるが、先述したように北西部と南東部では確認できなかった。最大幅は6.70mで、残存深度は20～40cmである。周溝内には黒色・暗褐色基調の土が自然埋没する。7層の黄褐色土は人為的に埋め戻された可能性が考えられる。主体部：南側に開口する横穴式石室と思われるが、主体部には既に耕作が及んでおり、不明な点が多い。また、前庭を有していた可能性があり、前庭部は深さ約70cmの掘り込みがある。主体部想定位置には輝石安山岩の割石や河原石が散在しており、これらを石材に用いたものと考えられる。遺物出土状態：主体部・前庭部の位置から須恵器片、土師器片が、周溝東側から須恵器片が出土している。埴輪は検出されなかった。

遺物：須恵器甕・蓋・長頸壺の破片、土師器坏片、剥片を確認している。掲載遺物6点。

4号古墳（遺構：第60図、PL11）

位置：I－8～J－9グリッド。南側は調査区外。検出状態：墳丘は既に削平されている。周溝も途切れ途切れで「溝」とは言い難い状態である。主体部は調査区の関係で奥側のごく一部を検出し得たにすぎないが、他の古墳と同様、遺存状態は不良と推定される。形態：全容は不明であるが、円墳と想定される。規模：小規模古墳と思われるが、不明。周溝：土坑状の掘り込み2か所が残存するのみである。最大幅2.70m、残存深度16～32cm。周溝内には黒色・暗褐色基調の土が自然埋没する。4層の褐色土は人為的に埋め戻された可能性がある。主体部：南側に開口する横穴式石室と思われるが、詳細は不明である。奥側端部からは輝石安山岩の割石や河原石が出土しており、これらを石室石材に用いたものと考えられる。遺物出土状態：遺物は出土しなかった。

5号古墳（遺構：第57図、PL11／遺物：第57図、PL37）

位置：C－12～D－15グリッド。北西側一部は調査区外。検出状態：墳丘は既に削平されている。周溝は北側半分が半円弧状に残存するが、南側については確認できなかった。主体部は痕跡すらも残存しない状態であった。形態：円墳と想定される。規模：円弧の両南端部における周溝内側の立ち上がり長さ21.3m、同じく周溝外側の立ち上がり長さ23.8m。周溝：北西部が最も幅広で3.40m以上あるが、東側は狭くなり、南側では確認できなくなる。残存深度は最も深い部分で60cmである。周溝内には黒色土・暗褐色土が自然埋没する。主体部：不明。他の古墳でみられた前庭部の深い掘り込みも認められなかった。遺物出土状態：周溝内から須恵器片4点が出土している他、縄文時代の遺物もみられる。

遺物：須恵器片4点、撚糸文系土器、条痕文系土器、スタンプ形石器、三角錐形石器、打製石斧、剥片等を確認している。掲載遺物2点。

6号古墳（遺構：第58図、PL12／遺物：第58図、PL37）

位置：E－10～F－12グリッド。東側一部は調査区外。検出状態：墳丘は既に削平されている。周溝は北東部で途切れ、南側は確認できない状態にある。主体部はわずかに残骸をとどめる程度の遺存状態である。形態：円墳と想定される。規模：周溝内側の立ち上がり径14.5m、周溝外側の立ち上がり径20m以上。周溝：不整円形状に巡るが、北東部で途切れ、南側は確認できない。北東部の周溝が途切れる部分はブリッジの可能性もある。周溝幅は不定で北側は4.80mと極端に広い。残存深度は最も深い部分で50cmである。周溝内に

は暗褐色土・黒色土が自然埋没する。4・5層の茶褐色土・褐色土は人為的に埋め戻された可能性も考えられる。**主体部**：南側に開口する横穴式石室と思われるが、遺存状態が悪く、不明な点が多い。主体部想定位置には輝石安山岩・河原石などの礫が散在しており、これらを石材に用いたと思われる。北側は床面が一部遺存していた可能性もある。また、前庭を有していたと考えられ、前庭部には規模4.7m×2.8m、深さ約65㎝の掘り込みがある。**遺物出土状態**：前庭部から土師器片、主体部位置から須恵器片が出土している他、縄文時代の遺物が少量みられる。埴輪は検出されなかった。

遺物：須恵器甕片、土師器坏片・高坏片、条痕文系土器、剥片を確認している。掲載遺物4点。

7号古墳（遺構：第59図、PL13／遺物：第59図、PL37）

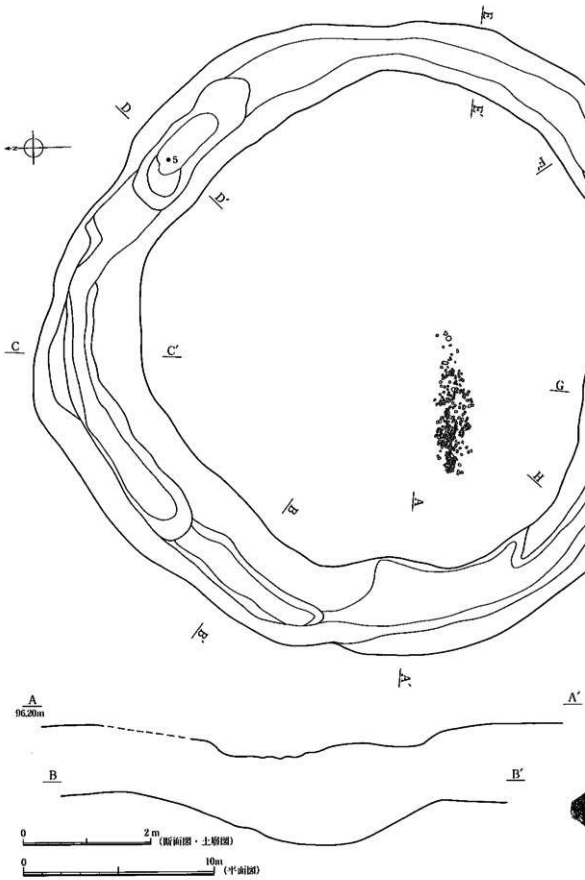
位置：E－15～F－17グリッド。**検出状態**：墳丘は既に削平されている。北東から南西にかけてはブルドーザーのキャタピラ痕もあり、耕作等も含めて著しく撹乱を受け、遺存状態はきわめて悪い。**形態**：円墳と想定されるが、東側周溝の状態からは方墳の可能性も考えられる。**規模**：東西方向周溝内側の立ち上がり長さ16.3m、同じく周溝外側の立ち上がり長さ18.4m。**周溝**：削平・撹乱の影響で途切れ途切れの状態にある。最大幅は2.05m、深さは最も深い部分で31㎝である。周溝内には黒色土・暗褐色土が自然埋没する。3層の褐色土は人為的に埋め戻された可能性も考えられる。**主体部**：南側に開口する横穴式石室と思われるが、南東側過半は削平され、残存部分も撹拌された状態にある。石室掘り方は長方形状で、下端幅は1.9m前後である。石室西側には根石が遺存するようである。石室内の礫は輝石安山岩の割石が主体である。また、前庭を有していたと考えられ、前庭部には規模3.8×1.5m、深さ42㎝の不整楕円形の掘り込みがある。**遺物出土状態**：石室内から埴輪片・須恵器片が出土しているが、これらは紛れ込みの可能性もある。その他、周溝内から須恵器片や縄文時代の遺物が出土している。

遺物：埴輪片4点、須恵器片4点、撚糸文系土器、条痕文系土器、剥片等を確認している。掲載遺物5点。

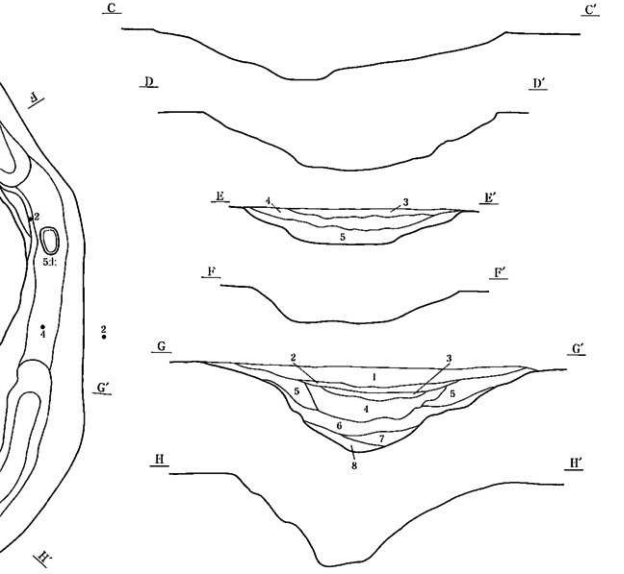
8号古墳（遺構：第61図、PL11／遺物：第61・62図、PL37・38）

位置：F－17～F－18グリッド。西側は調査区外。**検出状態**：当初は遺構の存在を確認できず、縄文時代早期の2号住居跡調査時に埴輪片が出土したため古墳と判断したものである。西側はパチンコ店の駐車場になっており、墳丘は既に削平されている。**形態**：不明。**規模**：不明。**周溝**：調査範囲における最大幅は2.50mで、残存深度は35～45㎝。南東隅の状態は遺構確認の誤認から明瞭に把握できなかった。周溝内には黒色土・暗褐色土が自然埋没する。顕著な埋め戻しは確認できない。**主体部**：不明。**遺物出土状態**：周溝内から円筒埴輪片、形象埴輪片、小形の土師器坏が出土している他、撚糸文系土器、条痕文系土器、剥片等がみられる。2号住居跡から出土した埴輪は、本古墳の遺物が何らかの原因で紛れ込んだものと考えられる。

遺物：形象埴輪には靫と思われるもの3点（1～3）、人物埴輪と思われるもの3点（4～6）がある。靫は円筒部の左右に背板を取り付け、矢は矢印状に線刻表現されている。背板線刻間には赤色塗彩が施される。5は人物埴輪の腕部と判断したが、馬形埴輪の尻尾部の可能性もある。円筒埴輪（8～19）には、全容が把握できる資料はないが、各破片から類推して凸帯2条3段構成のものと想定される。凸帯は三角形状で、透し孔は不整円形もしくは逆半円形状である。形象埴輪・円筒埴輪とも、色調は明赤褐色のものが多く、胎土はほぼ一様に石英・角閃石・チャート・白色鉱物粒を含んでいる。掲載遺物20点。



第53図



1：暗褐色土　白色粘石粒をごく微量含む。しまり強く、粘性がある。

2：暗褐色土　白色粘石粒を微量、灰色土ブロック（径30～40mm）を多量含む。しまり強く、粘性がある。

3：黒色土　白色粘石粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。

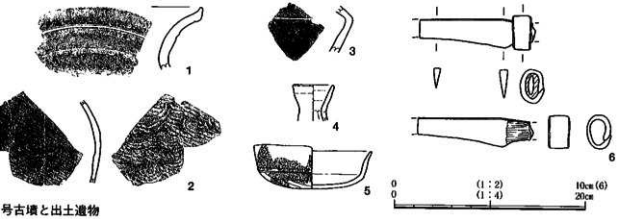
4：暗褐色土　白色粘石粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。

5：茶褐色土　白色粘石粒を微量、ローム粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。

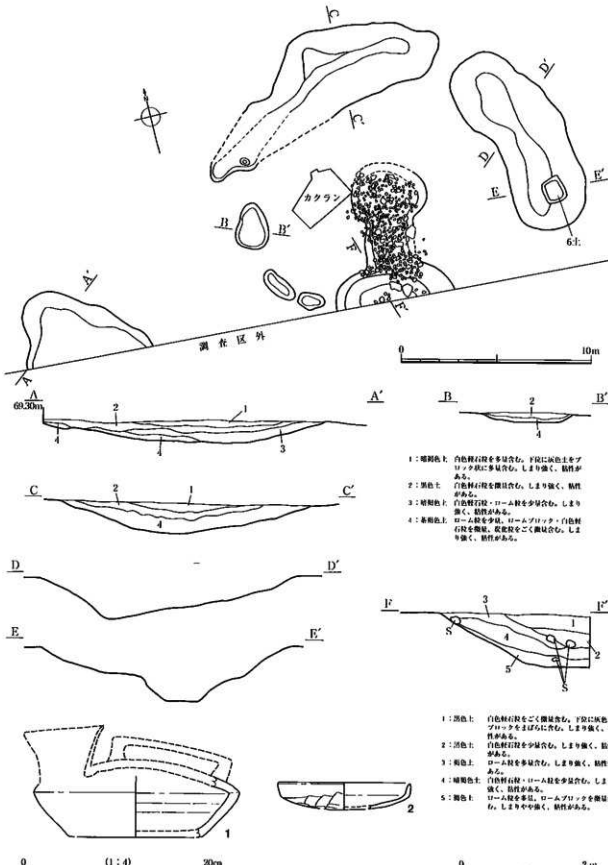
6：褐色土　ローム粒を多量、黄褐色粘石（マサか）を微量含む。しまり強く、粘性がある。

7：褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを微量含む。しまり強く、粘性がある。

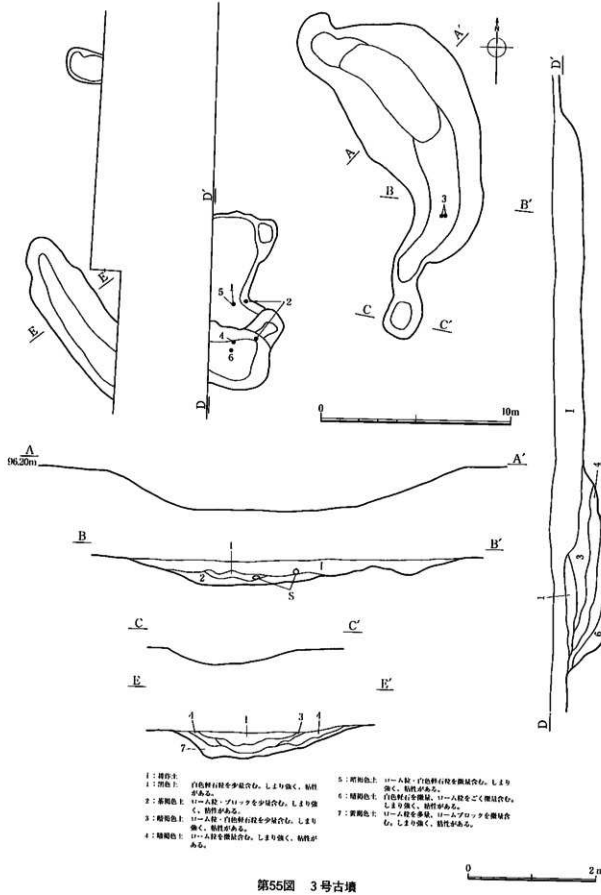
8：暗褐色土　ローム粒をごく微量、ロームブロックを少量含む。黒色土がパッチに混じる。しまり強く、粘性がある。



号古墳と出土遺物

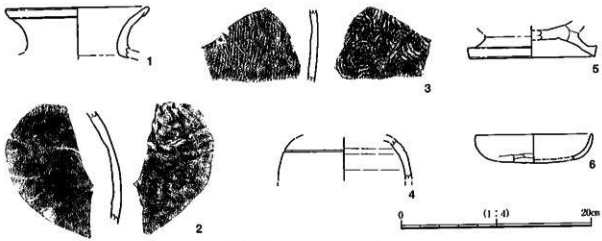


第54図　1号古墳と出土遺物

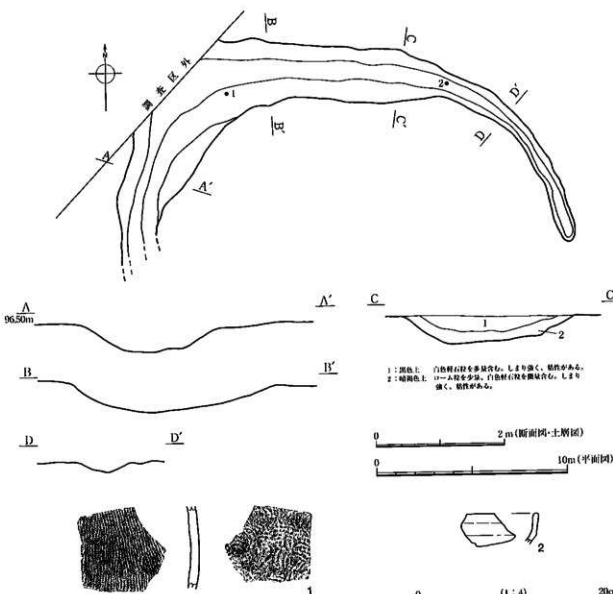


1：耕作土
1'：黒色土　白色粒石粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。
2：基盤色土　ローム粒・ブロックを少量含む。しまり強く、粘性がある。
3：暗褐色土　ローム粒・白色粒石粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。
4：暗褐色土　ローム粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
5：暗褐色土　ローム粒・白色粒石粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
6：暗褐色土　白色粒石を微量、ローム粒をごく微量含む。しまり強く、粘性がある。
7：黄褐色土　ローム粒を多量、ロームブロックを微量含む。しまり強く、粘性がある。

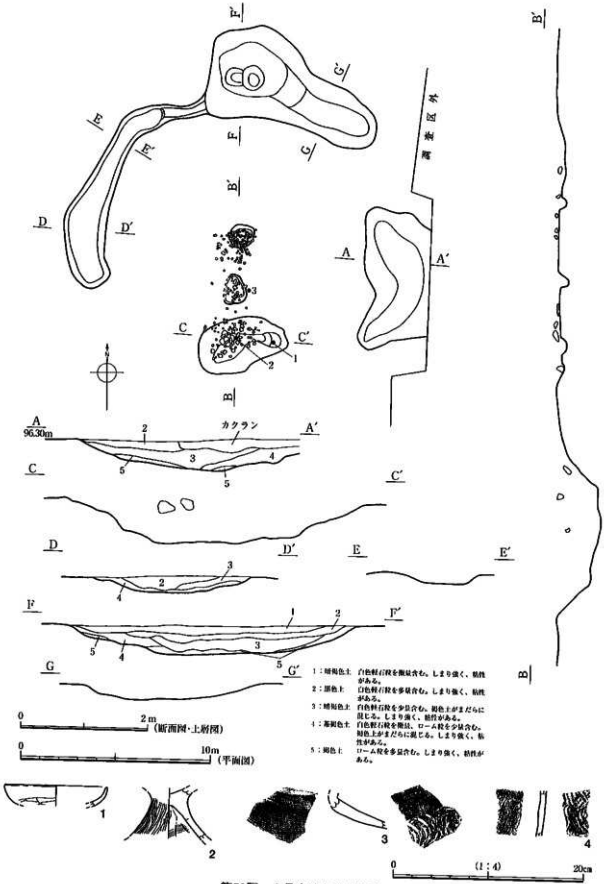
第55図　3号古墳



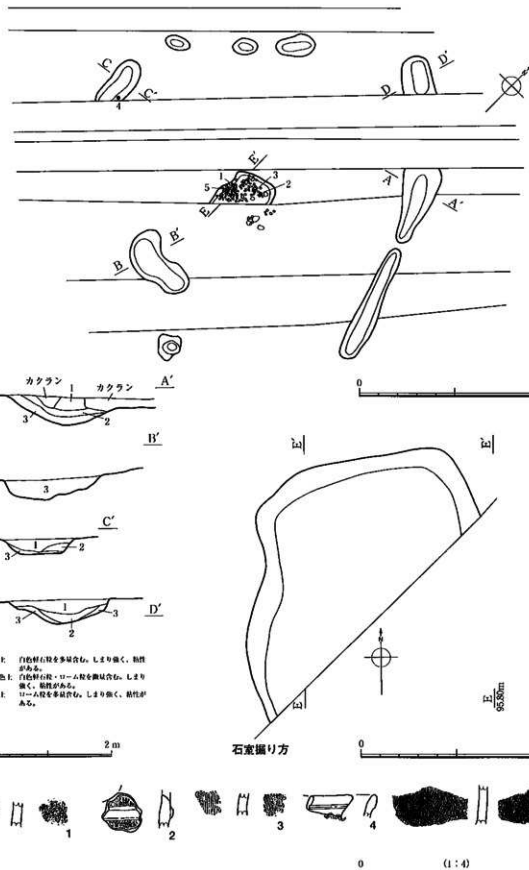
第56図　3号古墳出土遺物



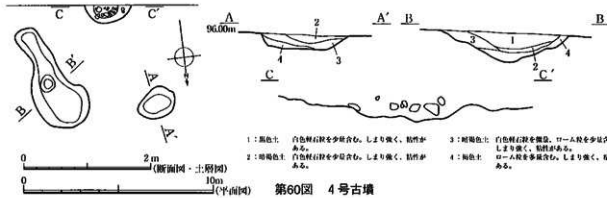
第57図　5号古墳と出土遺物



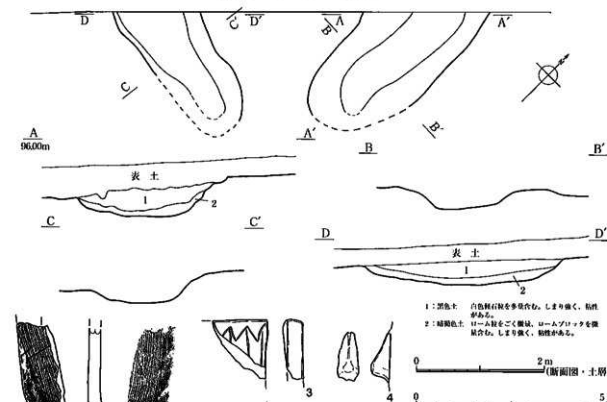
第58図　6号古墳と出土遺物

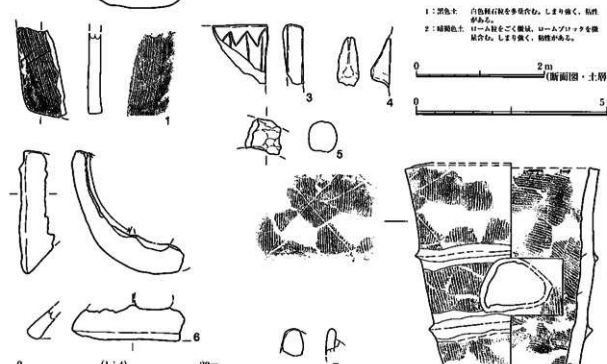


第59図　7号古墳と出土遺物

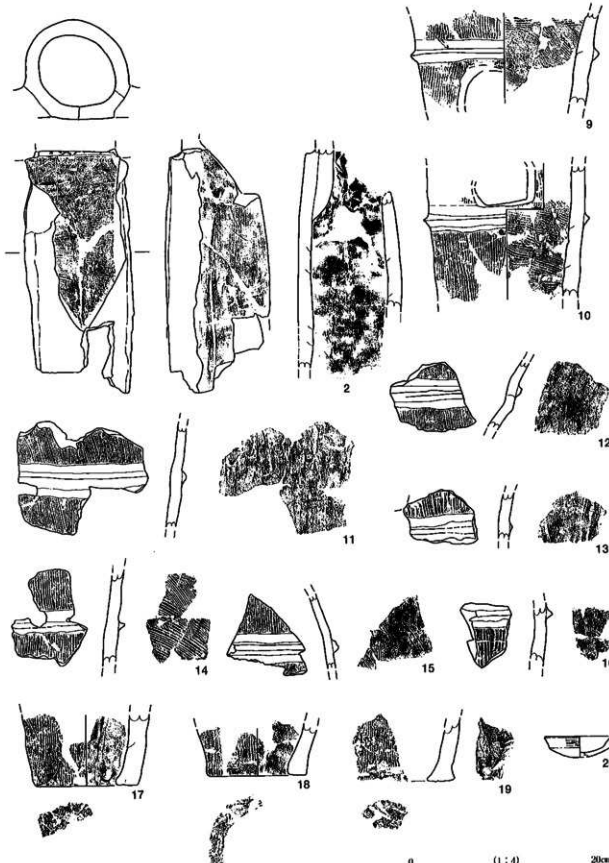


第60図　4号古墳





第61図　8号古墳と出土遺物①

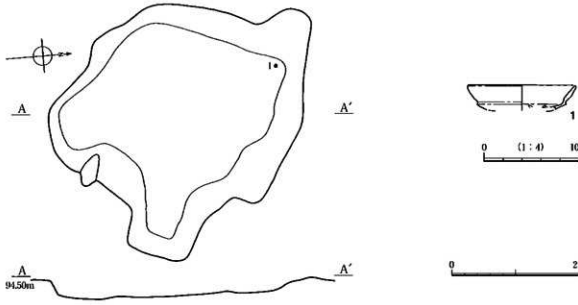


第62図　8号古墳出土遺物②

8号土坑（遺構：第63図、PL14／遺物：第63図、PL36）

位置：Ⅰ－15グリッド。**平面形態**：不整形で北西及び南東部が突出する状態であるが、本来は長方形に近い形態と思われる。**底面の状態**：多少の起伏があるものの、全体的に平坦な状態にある。**規模**：3.50m×3.50mで、突出部での長さは4.50m。**残存深度**：28cm。**遺物出土状態**：底面よりやや浮いた状態で、土師器片や剥片が少量出土している。**備考**：出土遺物から古墳時代の遺構と判断したが、不明瞭な部分もあり断定はできない。小規模な竪穴住居跡の可能性も考えられる。

遺物：土師器坏片・甕片、剥片等を確認している。掲載遺物1点。

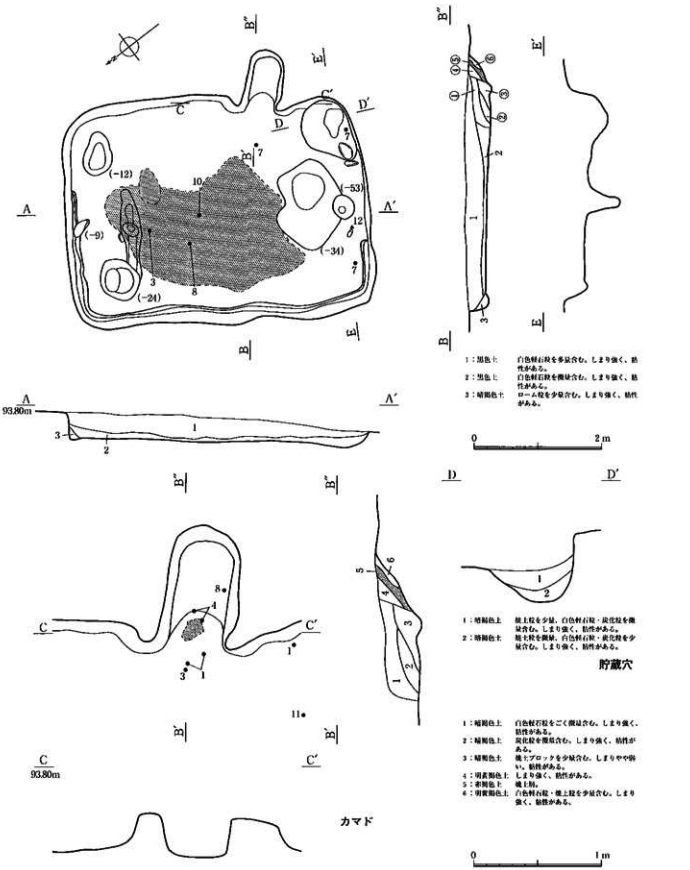


第63図　8号土坑と出土遺物

第6節　平安時代

1号住居跡（遺構：第64図、PL15／遺物：第65図、PL39）

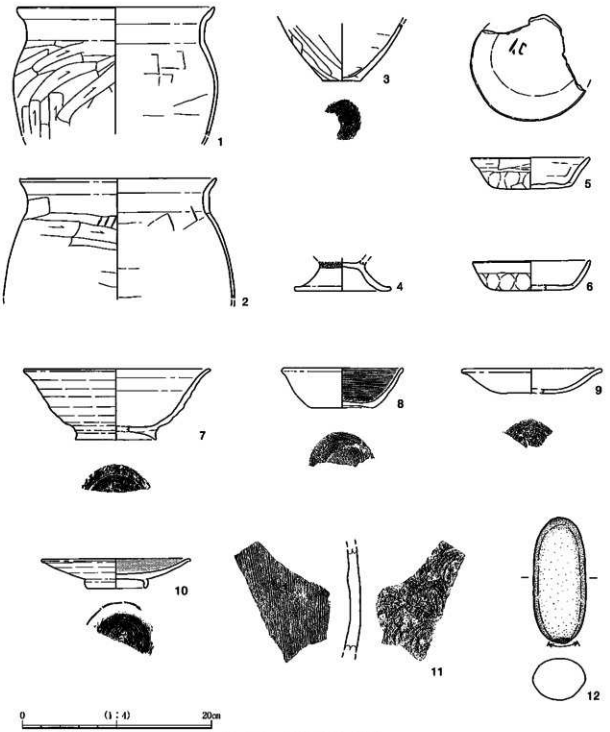
位置：Ⅰ－18グリッド。**検出状態**：比較的良好な遺存状態であった。縄文時代の12号土坑が重複する。本遺跡で平安時代と判断できる遺構は本住居跡のみである。**平面形態**：横長の長方形。**主軸方位**：N－123°－E。**規模**：4.55m×3.30m。**残存深度**：40cm。**床面積**：14.3㎡。**床面の状態**：中央付近から南東部にかけての範囲で硬化面を確認している。**壁面の状態**：遺存状態良好な部分では垂直に近い状態で立ち上がっている。**壁周溝**：西側隅付近から北側壁中央付近にかけて、遺構全体の1／2ほどで検出されている。**柱穴・ピット**：ピット4基を検出している。南西部壁面付近のピットは床面からの深さ53cmと深い掘り込みを有するが、他のピットはいずれも浅い。また、南西部には先述の深いピットに接して土坑状の窪みがあり、これは掘り方の可能性がある。**カマド**：南東壁面の中央部よりやや向かって右側に偏在する。煙道部を含めた残存長98cm、焚口部の残存幅は43cmである。ロームを主体とした粘質土で構築したものと思われる。燃焼部に被熱痕を確認しているが、支脚は検出されなかった。**貯蔵穴**：カマド向かって右側の隅に平面楕円形、深さ35cmの坑がある。底面にはやや凹凸がみられる。埋没土には焼土粒を含んでいる。機能的に貯蔵を目的としたものとは考えにくいが、ここでは慣例から貯蔵穴としておく。**遺構埋没状態**：黒色基調の土が自然堆積している。**遺物**


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
(−12)
(−9)
(−24)
(−53)
(−34)
93.80m
1：黒色土　白色軽石粒を多量含む。しまり強く、粘性がある。
2：黒色土　白色軽石粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
3：暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。
0
2 m
1：暗褐色土　焼土粒を少量、白色軽石粒・炭化粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
2：暗褐色土　焼土粒を微量、白色軽石粒・炭化粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。
貯蔵穴
1：暗褐色土　白色軽石粒をごく微量含む。しまり強く、粘性がある。
2：暗褐色土　炭化粒を微量含む。しまり強く、粘性がある。
3：暗褐色土　焼土ブロックを少量含む。しまりやや弱い。粘性がある。
4：明黄褐色土　しまり強く、粘性がある。
5：赤褐色土　焼土粒。
6：明黄褐色土　白色軽石粒・焼土粒を少量含む。しまり強く、粘性がある。
0
1 m
カマド

第64図　1号住居跡

出土状態：遺構内に散乱するような状態で出土している。床面からやや浮いたものが多く、顕著に遺物が集中する状態は認められなかった。カマド内及びその周辺からは、土師器甕（1･3）・台付甕(4)・坏(6)、ロクロ使用坏(8)が、貯蔵穴からは須恵器椀(7)が出土している。また、少量の縄文時代の遺物が混在している。

遺物：土師器甕４以上・台付甕脚台部４・坏４以上、須恵器坏８以上・椀１・甕破片、灰釉陶器皿１、鹿編石１、敲石１、縄文土器片、剥片等を確認している。土師器甕はコの字状口縁である。土師器坏(5)には墨書があるが判読できない。坏(8)は内面を黒色処理している。掲載遺物12点。



第65図　１号住居跡出土遺物

第７節　遺構外出土遺物（第66～71図、ＰＬ39～42）

遺構外から出土した遺物については、各グリッドごとに表７～９にまとめた。この内、条痕文系土器が比較的まとまって出土したＥ－16グリッドの遺物については第４節に先述してある。また、各遺構への紛れ込み遺物については表に示していないが、実測図及び写真を掲載したものがある。

縄文時代の土器（１～41）は、撚糸文系土器218点・条痕文系土器140点・前期土器１点・中期土器９点・不明３点を確認している。撚糸文系土器や条痕文系土器の出土量が多く、第４節で扱った遺構の他にも該期の遺構が存在していた可能性がある。

石器類（42～73）は、石皿１点（輝石安山岩１）・スタンプ形石器15点（黒色頁岩２、ヒン岩４、輝石安山岩５、安山岩２、花崗岩１、泥灰岩１）・三角錐形石器５点（黒色頁岩４、頁岩１）・磨石20点（輝石安山岩10、角閃石安山岩３、石英安山岩２、安山岩４、花崗岩１）・凹石２点（輝石安山岩１、閃緑岩１）・削器９点（黒色頁岩６、頁岩１、硬砂岩１、泥灰岩１）・礫器２点（黒色頁岩２）・打製石斧16点（黒色頁岩12、頁岩３、輝石安山岩１）・石核11点（黒色頁岩６、頁岩２、ヒン岩１、輝石安山岩１、不明１）・調整ある剥片42点（黒色頁岩32、頁岩４、チャート５、石英１）・石錐16点（黒色頁岩５、頁岩２、チャート８、黒曜石１）・礫66点（黒色頁岩１、頁岩１、ヒン岩１、輝石安山岩31、角閃石安山岩27、安山岩１、凝灰岩２、チャート１、石英１）・剥片701点（黒色頁岩517、頁岩42、ヒン岩12、輝石安山岩14、角閃石安山岩６、石英安山岩３、黒色安山岩３、安山岩４、閃緑岩１、花崗岩１、輝緑岩４、輝緑凝灰岩１、凝灰岩８、チャート52、硬砂岩６、砂岩３、粘板岩１、泥灰岩８、蛇紋岩１、緑泥片岩２、石墨片岩２、石英片岩２、結晶片岩２、ホルンフェルス６）・不明９点（輝石安山岩３、閃緑岩１、輝緑岩１、硬砂岩２、緑泥片岩１、軽石１）を確認している。

古墳時代～平安時代の遺物（74～79）は、埴輪片55点・土師器片81点・須恵器片44点・灰釉陶器３点を確認している。中・近世の遺物（80～82）は、陶器片５点・煙管３点等がある。なお、83・84の砥石（２点とも流紋岩）は縄文時代早期撚糸文期の２号住居跡から出土したもので、紛れ込み遺物と判断したものである。埴輪の分布は８号古墳以外の古墳周辺にもみられるが、これらの古墳に伴う遺物ではないと判断した。

表７　遺構外出土遺物一覧①

凡例　一覧表に使用した略語は下記の通りである。

撚－撚糸文系土器　条－条痕文系土器　前期－前期縄文土器　中期－中期縄文土器　不縄－時期不明縄文土器
ス－スタンプ形石器　剥－剥片　三角－三角錐形石器　磨－磨石　ＲＦ－調整のある剥片　打斧－打製石斧
土師－土師器　須恵－須恵器　灰陶－灰釉陶器
ヒ－ヒン岩　黒頁－黒色頁岩　泥灰－泥灰岩　黒安－黒色安山岩　石安－石英安山岩　輝安－輝石安山岩
蛇紋-蛇紋岩　角安－角閃石安山岩　安－安山岩　粘－粘板岩　緑片－緑泥片岩　石片－石英片岩　結片－結晶片岩　頁－頁岩　チ－チャート　閃緑－閃緑岩　輝緑－輝緑岩　花崗－花崗岩　ホ－ホルンフェルス　砂－砂岩　硬砂－硬砂岩　凝灰－凝灰岩

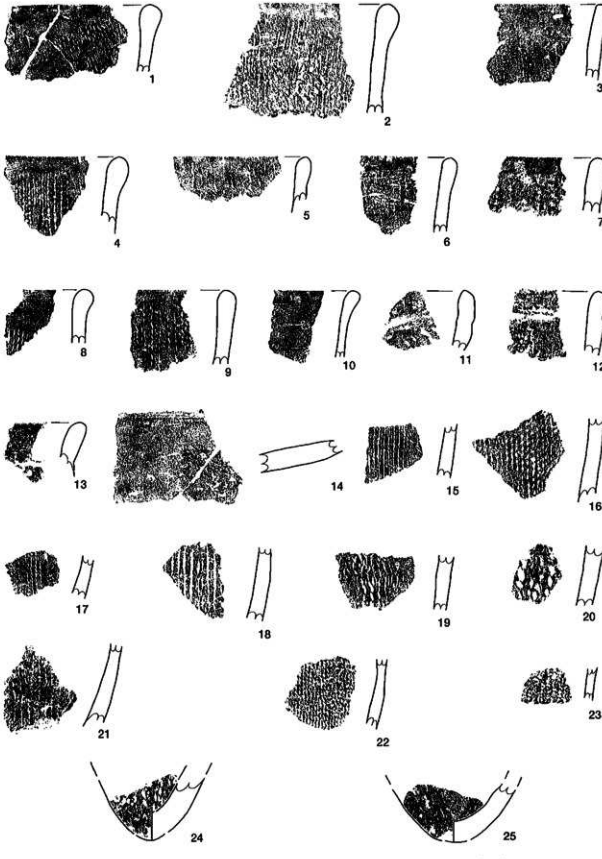
グリッド	縄文時代		古墳～平安時代	中・近世、他
	土　器	石　器		
Ａ－９				煙管－１
Ｂ－10	撚－１、条－１			
Ｂ－11	撚－３	ス－１（ヒ１）、剥－３（黒頁３）	土師－３、埴輪－１	陶器－１、不明鉄－１
Ｂ－12	撚－７	ス－１（泥灰１）、剥－13（黒頁９・黒安１・石安１・粘１・緑片１）	土師－２、須恵－２、埴輪－１	
Ｂ－13	撚－２、条－１	剥－３（黒頁１・チ１・角安１）、不明礫－４（輝安３・閃緑１）	土師－１、須恵－１、埴輪－１	
Ｂ－14	撚－６、条－17	磨－２（輝安１・花崗１）、剥－18（黒頁13・チ２・頁１・黒安１・泥灰１）、不明礫－７（角安６・緑片１）	埴輪－２、灰陶－１	

表8　遺構外出土遺物一覧②

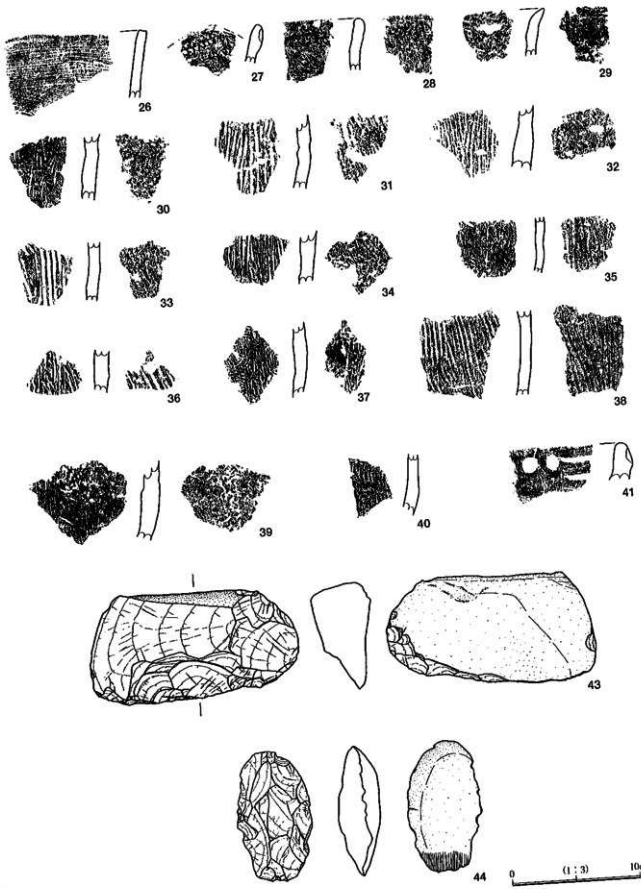
グリッド	縄文時代		古墳～平安時代	中・近世、他
	土　器	石　器		
C－7			土師－1、埴輪－1	
C－10	撚－1、前期－1			
C－11	撚－4、条－2、不縄－1	石鏃－1（頁岩1）、剥－4（黒頁1・角安1・ホ1・泥灰1）	土師－1、灰陶－1、埴輪－2	
C－12	撚－4、条－1	RF－4（黒頁1・頁3）、剥－4（頁2・角安2）、石核－1（黒頁1）	須恵－1、埴輪－1	
C－13	撚－4	打斧－1（頁1）、石核－1（黒頁1）、剥－2（黒頁1・頁1）	土師－1	
C－14	撚－17	ス－1（安1）、三角－1（頁1）、磨－2（安2）、RF－1（黒頁1）、剥－22（黒頁16・頁3・黒安1・チ1・砂1）	土師－6、須恵－1、埴輪－1	陶器－1
D－6			土師－2	
D－7		石鏃－1（黒頁1）		
D－8	撚－1			
D－10	撚－3、条－2	石核－1（黒頁1）、剥－2（角安1・頁1）	土師－2、須恵－2、埴輪－1	
D－11	撚－3、条－6	RF－1（黒頁1）、剥－5（黒頁4・ヒ1）	土師－1、埴輪－1	
D－12	撚－1、条－1	礫－1（安1）、剥－4（黒頁4）	土師－1、埴輪－1	
D－13	撚－2、条－1	剥－3（黒頁4）	土師－1、埴輪－1	
D－14	撚－1	石鏃－1（チ1）、剥－16（黒頁14・ヒ2）	土師－2、須恵－1、埴輪－1	
D－15	撚－2、条－4	磨－1（石安1）、RF－3（チ2・頁1）剥－22（チ2・黒頁20）	土師－4、須恵－2、埴輪－3	
E－5	中期－1			
E－7			須恵－1	
E－8	撚－1		土師－1	
E－10	条－5	剥－1（頁1）		
E－11	撚－2、条－5	磨－1（安1）、RF－2（黒頁2）打斧－1（黒頁1）、剥－1（黒頁1）	須恵－1	
E－12	撚－7、条－2、中期－1	ス－2（輝安1・花崗1）、磨－2（輝安2）RF－2（黒頁2）、礫－1（黒頁1）剥－2（黒頁2）	土師－4、埴輪－13	
E－13	中期－1		埴輪－3	
E－14	撚－2	石鏃－1（チ1）、RF－1（チ1）		
E－15	撚－6、条－8	石鏃－1（チ1）、ス－1（黒頁1）剥－23（チ1・硬砂3・黒頁15・泥灰1・石安1・ヒ2）	土師－3、須恵－5、埴輪－1	陶器－2
E－16	撚－14、条－38	石鏃－2（黒頁1・チ－1）、磨－3（輝安2・角安1）、RF－12（黒頁12）、打斧－4（黒頁4）、礫－2（輝安1・ヒ1）、削－7（黒頁5・硬砂1・泥灰1）、剥－89（黒頁64・石英片2・泥灰3・輝安1・チ7・凝灰6・結片1・安1・ヒ1・ホ1・輝凝1）	土師－3、須恵－1	
E－17	撚－1、条－2	打斧－1（黒頁1）		
E－18	撚－3、中期－1	剥－1（黒頁－1）		
F－6		剥－1（黒頁1）		
F－7		礫－1（角安1）、剥－2（黒頁2）		
F－8	撚－10、条－1	礫－2（角安2）、剥－11（硬砂1・黒頁7・安2・蛇紋1）	埴輪－1	
F－11	撚－1、条－1、中期－1	磨－1（角安1）、剥－2（黒頁1、ヒ1）	土師－1	
F－13			須恵－1	
F－14	撚－1、中期－1	剥－1（黒頁1）	土師－1、埴輪－3	
F－15	撚－2、条－2	ス－1（輝安1）、RF－1（黒頁1）剥－7（黒頁3・チ1・輝安1・泥灰2）	土師－4、須恵－1、埴輪－1	

表9　遺構外出土遺物一覧③

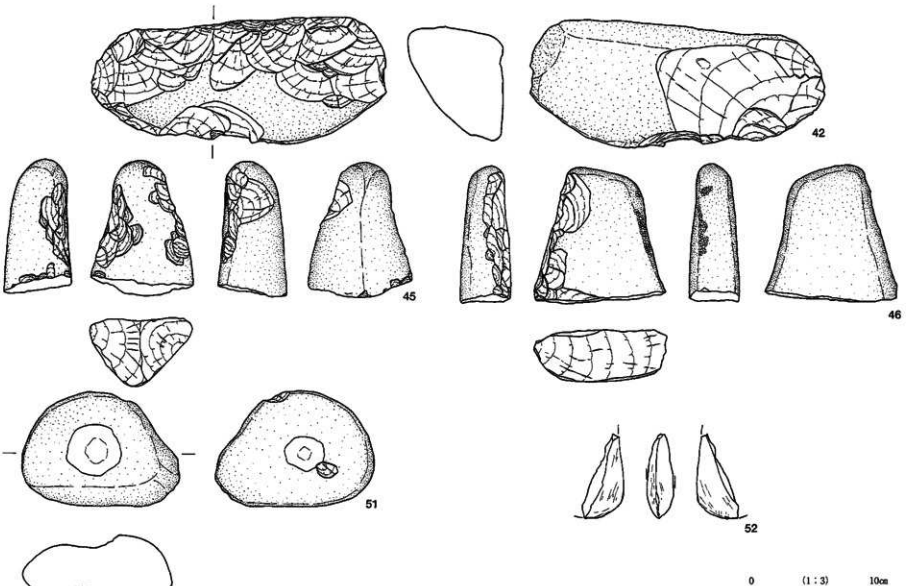
グリッド	縄文時代		古墳～平安時代	中・近世、他
	土　器	石　器		
F－16	深－16、条－14、中期－1	石鏃－4（チ2・頁1・黒安1）、ス－1（ヒ1）、RF－3（石英1・チ1・黒頁1）、打斧－5（黒頁5）、礫－15（凝1・輝安13・頁1）、石核－1（黒頁1）、剥－98（チ9・ヒ1・黒頁84・石安1・安1・輝緑2）	土師－9、須恵－16、埴輪－12	陶器－1
F－17	深－7、条－6、縄－1	石鏃－1（チ1）、三角－1（黒頁1）、RF－4（黒頁4）、礫－8（角安4・輝安3・凝灰1）、石核－3（黒頁2・チ1）、剥－49（ヒ1・黒頁42・チ3・泥灰1・凝灰1・輝安1）、不明－2（硬砂2）	土師－5、埴輪－1	
F－18	深－1	RF－5（黒頁5）、礫器－1（黒頁1）礫－3（石英1・輝安2）、削－1（黒頁1）剥－138（チ7・頁31・黒頁92・石器片岩1・ヒ1・硬砂2・輝安2・緑片1・花崗1）		
G－5		打斧－1（黒頁1）		
G－7		石核－1（頁1）		
G－11			土師－1、須恵－1	
G－12		剥－1（黒頁1）		
G－14	深－14		土師－4、埴輪－1	
G－15	深－3、条－2	剥－3（チ1・頁2）	土師－4、須恵－3	
G－16	深－1	剥－1（チ1）		
G－17	深－10、条－9	ス－1（ヒ1）、打斧－1（輝安1）、RF－1（黒頁1）、石核－1（不明1）礫－5（角安3・輝安2）剥－36（黒頁29・輝安4・チ1・ホ1・輝緑1）	土師－3、埴輪－1	不明－1
G－18	深－28、条－2、中期－1	石鏃－1（頁1）、三角－2（黒頁2）、石皿－1（輝安1）、打斧－1（頁1）、ス－4（ヒ1・安1・黒頁1・輝安1）磨－8（角安1・石安1・安1・輝安5）敲－1（頁1）、RF－1（黒頁1）、礫－23（角安11・輝安10・黒頁1・チ1）凹－2（閃緑1・輝安1）、剥－86（黒頁61・砂2・ホ2・ヒ1・石器片1・輝緑1・閃緑1・輝安4・チ12・角安1）	土師－1	蛸管－1
H－12		石核－1（ヒ1）		
H－15	深－1			
H－17			須恵－1	
H－18	深－16、条－3	ス－1（輝安1）、剥－21（チ3・黒頁15・ヒ1・結片1・輝安1）	土師－4	
I－8		石鏃－1（黒曜1）		
I－9			土師－1、須恵－1	
I－11			須恵－1	
I－14	深－1		土師－1	
I－15		三角－1（黒頁1）		
I－16		RF－1（チ1）	須恵－1	
I－18	深－3、中期－1	石鏃－1（チ1）、ス－1（輝安1）、剥－4（黒頁4）	土師－1、埴輪－1	
J－4	深－1			
J－18	深－2、条－2			
L－16	深－2、条－2	剥－1（黒頁1）	土師－1	
炭　探		石鏃－1（黒頁1）		煙管－1



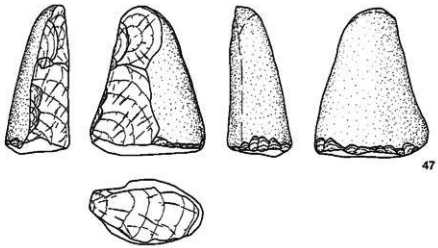
第66図　遺構外出土遺物①

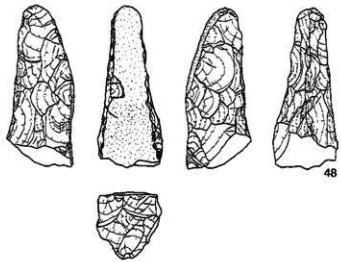


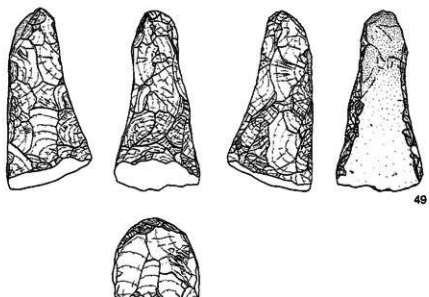
第67図　遺構外出土遺物②

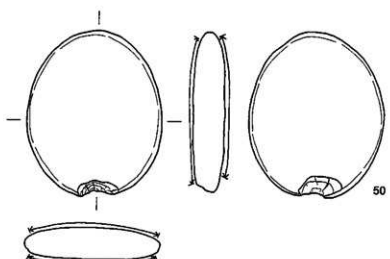


第68図　遺構外出土遺物③



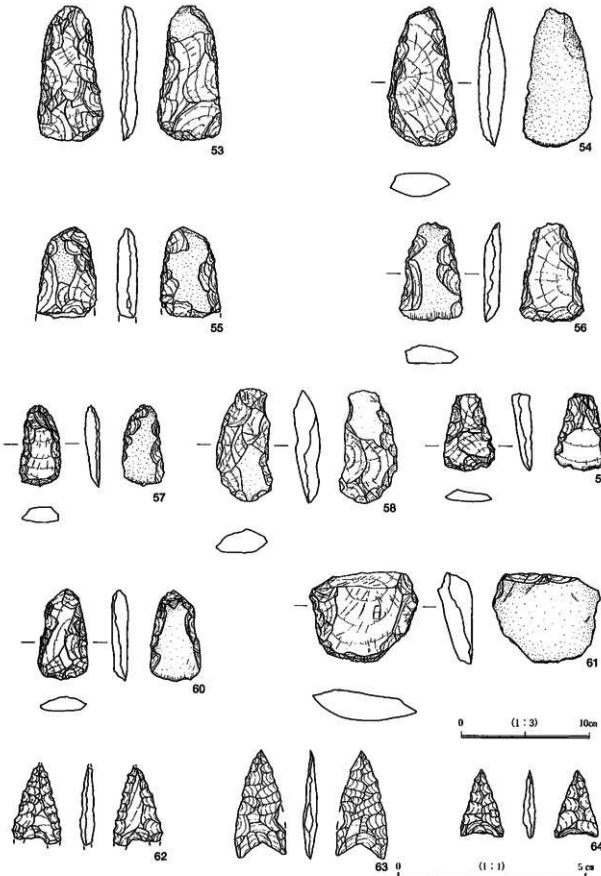




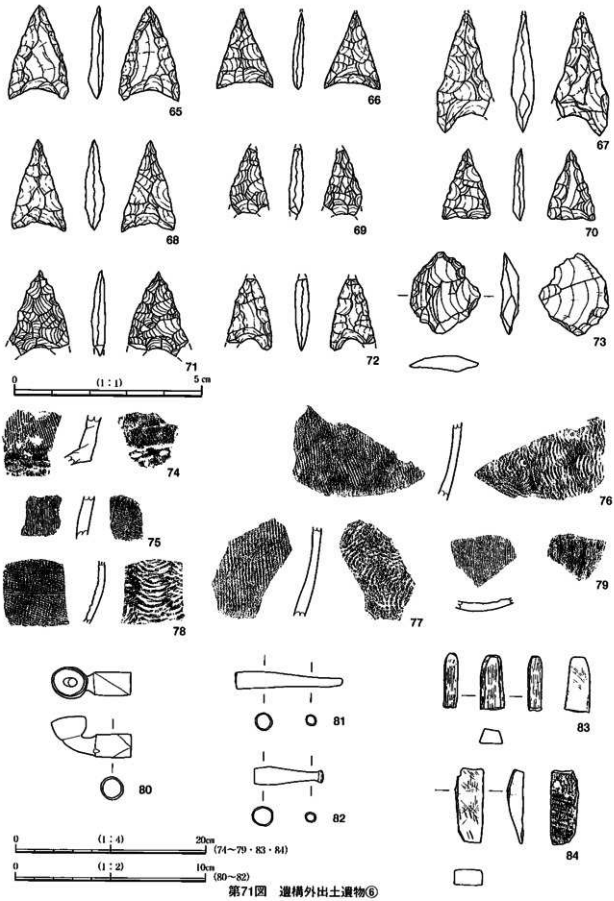


第69図　遺構外出土遺物④

0　(1:3)　10cm



第70図　遺構外出土遺物⑤



第71図　遺構外出土遺物⑥

第5章　自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節　土層とテフラ

1．はじめに

群馬県域に分布するいわゆるローム層中には、赤城山、浅間火山、榛名火山など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の姶良カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、ローム層中から層位や年代の不明な石器が検出された吾妻遺跡でも、石器の年代に関する資料を求めるために、地質調査を行って土層の層序について記載するとともに、火山ガラス比分析と屈折率測定を合わせて行って示標テフラの層位を求めることになった。調査分析の対象となった地点は、基本土層断面である。

2．土層の層序

基本土層断面では、下位より青色がかった灰色粘土層（層厚10cm以上、12層）、黄白色軽石層（層厚17cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径６mm、11層）、褐色土（層厚26cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚２cm）、褐色スコリア混じり褐色土（層厚17cm、スコリアの最大径４mm）、灰色がかった褐色土（層厚21cm、以上10層）、灰色石質岩片混じり暗灰褐色土（層厚16cm、石質岩片の最大径４mm、９層）、灰色石質岩片を多く含む色調の暗い暗灰褐色土（層厚14cm、石質岩片の最大径６mm）、灰褐色土（層厚14cm）、褐色がかった灰色土（層厚４cm、以上８層）、黄色細粒軽石混じりで若干色調の暗い褐色土（層厚22cm、軽石の最大径２mm、７層）、黄橙色軽石層（層厚２cm、軽石の最大径３mm）、褐色土（層厚２cm）、黄橙色軽石混じり暗灰色粗粒火山灰層（層厚６cm、軽石の最大径３mm）、褐色砂質土（層厚８cm、以上６層）が認められる（第72図）。

６層の上位には、さらに下位より若干色調の暗い褐色土（層厚19cm）、黄色細粒軽石および白色粗粒火山灰混じり褐色土（層厚８cm、軽石の最大径２mm）、白色粗粒火山灰混じり褐色土（層厚８cm、以上５層）、黄色軽石混じり褐色土（層厚９cm、軽石の最大径６mm、４層）、暗褐色土（層厚17cm、３層）、褐色土（層厚37cm、２層）、暗灰褐色作土（層厚37cm、１層）が認められる。

発掘調査では、８層中部から７層にかけての層準から、旧石器時代の石器が検出されている。また３層からは、縄文時代早期から前期にかけての土器が検出されている。

基本土層断面で認められた土層のうち、層相から11層は約4.1～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石（Hr－HP、新井、1962、鈴木、1976、大島、1986）に、10層中部灰色粗粒火山灰層は約3.1～3.2万年前に赤城火山から噴出した赤城鹿沼テフラ（Ag－K、新井、1962、鈴木、1976）の上部に同定される。また８層下部の灰色石質岩片は、約2.5万年前に赤城火山小沼火口から噴出した赤城小沼ラピリ（Ag－KLP、守屋、1968、早田、1991）に由来すると考えられる。７層中の軽石および６層中の２層のテフラ層は、層相から約1.8～2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As－BP Group、新井、1962、早田、1994）に同定される。さらに５層中部の軽石は、約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第１軽石（As－Ok1、中沢ほか、1984、早田、1994）に、また４層中の軽石は約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As－YP、新井、1962、町田・新井、1992）に各々由来すると考えられる。

3．火山ガラス比分析

(1)分析試料と分析方法

上下のテフラとの関係から、約2.4～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、池田ほか、1995）の降灰層準のある可能性が考えられた8層および7層について、基本的に5㎝ごとに採取された試料のうち、5㎝おきの5点の試料について火山ガラスの形態別比率を明らかにする火山ガラス比分析を行って、ATの降灰層準を求めることにした。火山ガラス比分析の手順は、次の通りである。

1）試料15gを秤量。2）超音波洗浄装置により泥分を除去。3）80℃で恒温乾燥。4）分析篩により、1/4－1/8㎜の粒子を篩別。5）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別組成を求める。

(2)分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして第73図に、その内訳を表10に示す。試料の中では、試料番号7および6（いずれも7層）に比較的多くの透明のバブル型ガラスが認められた。その産状から、試料番号7にその降灰層準があると考えられる。

4．屈折率測定

(1)測定試料と測定方法

火山ガラス比分析の結果、透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準と考えられた試料番号7の火山ガラスについて、示標テフラとの同定を行うために屈折率測定を行った。測定は位相差法（新井、1972）による。

(2)測定結果

屈折率の測定結果を表11に示す。試料番号7に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.498－1.501である。この火山ガラスは形態や色調さらに屈折率などから、ATに由来すると考えられる。発掘調査で検出された石器は、8層中部から7層にかけて検出されている。したがって石器の層位は、Ag－KLPより上位でAs－BP Groupの最下部前後の層準にあるものと考えられる。

表10　基本土層断面の火山ガラス比分析結果

試料	bw	md	pm	その他	合　計
5	5	1	6	237	250
7	6	2	4	239	250
9	0	0	2	248	250
11	0	1	3	246	250
13	0	0	0	250	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型．

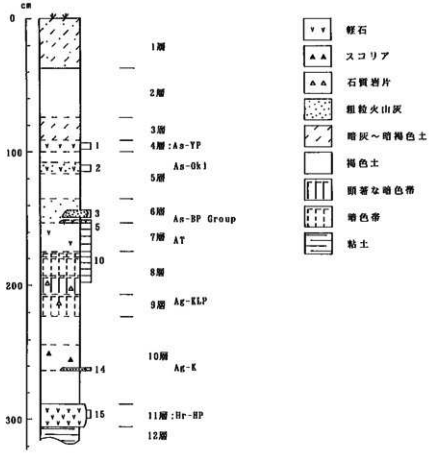
表11　基本土層断面の屈折率測定結果

試料	火山ガラス(n)
7	1.498－1.501

測定は位相差法（新井，1972）による．

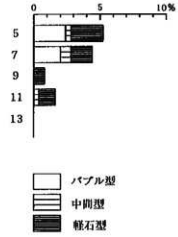
5．小結

吾妻遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より榛名八崎軽石（Hr－HP、約4.1～4.4万年前）、赤城鹿沼テフラ（Ag－K、約3.1～3.2万年前）、赤城小沼ラピリ（Ag－KLP、



第72図　基本土層断面の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号



第73図　火山ガラス比ダイヤグラム

約2.5万年前)、姶良Tn火山灰(AT、約2.4－2.5万年前)、浅間板鼻褐色軽石群(As－BP Group、約1.8－2.1万年前)の3層、浅間大窪沢第1軽石(As－Ok1、約1.7万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As－YP、約1.3－1.4万年前)が検出された。そしてこれらの示標テフラとの関係から、発掘調査で検出された石器の層位は、Ag－KLPより上位でAs－BPの最下部前後の層準にあると推定された。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1－79.

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254－269.

新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41－52.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器14C年代．第四紀研究，34，p.37　7－379.

町田　洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339－347.

町田　洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)姶良Tn火山灰(AT)の14C年代．第四紀研究，26，p.79－83.

守屋以智雄(1968)赤城火山の地形及び地質．前橋営林局，65p.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山，黒班～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69－70.

大島　治(1986)榛名火山．日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」，p.222－224.

早田　勉(1990)群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.37－129.

早田　勉(1994)群馬の示標テフラと自然環境．笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集」，p.20－24.

早田　勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，VII，p.256－267.

鈴木正男(1976)過去をさぐる科学．講談社，234p.

第2節　植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山、1987)。

2．試料

分析試料は、基本土層断面の2層から12層までの層準から採取された17点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)をもとに、次の手順で行った。1)試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。2)試料約1gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)。3)電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。4)超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散。5)沈底法による20μm以下の微粒子除去。6)封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。7)検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10－5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4．分析結果

(1)分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表12および第74図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族（チガヤ属など）、Bタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

機動細胞由来：ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

（2）植物珪酸体の検出状況

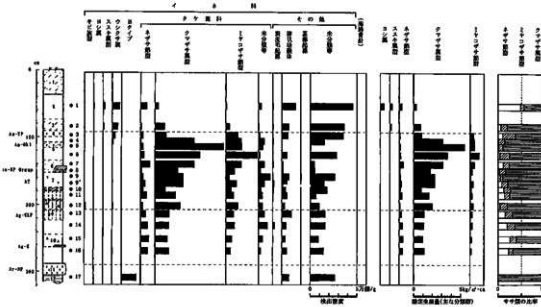
2層（試料1）から12層（試料17）までの層準について分析を行った。その結果、最下位の12層（Hr－HP直下、試料17）ではイネ科Bタイプが比較的多く検出された。イネ科Bタイプの給源植物は不明であるが、泥炭層など湿地の堆積物から一般的に検出されている。

10層（Ag－K混、試料14～16）および9層（Ag－KLP、試料13）では、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などのタケ亜科が比較的多く検出された。8層（試料12）から7層（AT混、試料9）にかけては、クマザサ属型が増加傾向を示し、ネザサ節型は減少している。6層（As－BP Group、試料7）から5層（As－Ok1混、試料5）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節が大幅に増加しており、試料5ではクマザサ属型の密度が7万個/g以上にも達している。4層（As－YP混、試料3）から3層（試料2）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型などのタケ亜科が大幅に減少している。また、同層準ではウシクサ族が増加傾向を示し、ススキ属型が出現している。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、10層から5層にかけてはクマザサ属型が優勢であり、とくに5層と6層では圧倒的に卓越していることが分かる。

5．植物珪酸体分析から推定される植生・環境

榛名八崎軽石（Hr－HP、約4.1～4.4万年前）直下層の堆積当時は、イネ科Bタイプの給源植物などが生育する湿地的な環境であり、その他のイネ科植物はあまり見られなかったものと推定される。



第74図　吾妻遺跡、基本土層断面における植物珪酸体分析結果

表12　吾妻遺跡における植物珪酸体分析結果

<table>
<tr><td colspan="2">検出密度（単位：×100個/g）</td><td colspan="15"></td></tr>
<tr><td>分類群　＼　試料</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>9'</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td></tr>
<tr><td>イネ科</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>キビ族型</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>12</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>ヨシ属</td><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>ススキ属型</td><td>10</td><td>14</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>ウシクサ族</td><td>80</td><td>62</td><td>34</td><td>13</td><td></td><td></td><td></td><td>5</td><td></td><td>7</td><td>6</td><td>5</td><td>12</td><td>6</td><td></td><td></td><td>7</td><td></td></tr>
<tr><td>Bタイプ</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>155</td></tr>
<tr><td>タケ亜科</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>ネザサ節型</td><td>67</td><td>14</td><td>28</td><td>6</td><td>30</td><td>39</td><td>97</td><td>16</td><td>27</td><td>61</td><td>25</td><td>65</td><td>25</td><td>57</td><td>75</td><td>88</td><td>78</td><td></td></tr>
<tr><td>クマザサ属型</td><td>40</td><td>103</td><td>120</td><td>421</td><td>728</td><td>480</td><td>431</td><td>243</td><td>304</td><td>304</td><td>112</td><td>221</td><td>270</td><td>152</td><td>149</td><td>132</td><td>160</td><td>7</td></tr>
<tr><td>ミヤコザサ節型</td><td>13</td><td>41</td><td>131</td><td>168</td><td>173</td><td>336</td><td>188</td><td>93</td><td>41</td><td>116</td><td>60</td><td>81</td><td>120</td><td>82</td><td>92</td><td>66</td><td>58</td><td></td></tr>
<tr><td>未分類等</td><td>33</td><td>7</td><td>17</td><td>65</td><td>51</td><td>20</td><td>85</td><td>26</td><td>128</td><td>65</td><td>29</td><td>43</td><td>43</td><td>63</td><td>98</td><td>44</td><td>26</td><td></td></tr>
<tr><td>その他のイネ科</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>表皮毛起源</td><td>7</td><td>7</td><td></td><td>13</td><td>5</td><td>7</td><td>13</td><td></td><td>7</td><td>14</td><td>12</td><td>5</td><td></td><td></td><td>23</td><td>7</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>棒状珪酸体</td><td>147</td><td>76</td><td>63</td><td>6</td><td>5</td><td>53</td><td>19</td><td>16</td><td>74</td><td>58</td><td>41</td><td>64</td><td>31</td><td>102</td><td>46</td><td>37</td><td>52</td><td>74</td></tr>
<tr><td>基部起源</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td>6</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>未分類等</td><td>454</td><td>364</td><td>353</td><td>155</td><td>10</td><td>283</td><td>45</td><td>52</td><td>283</td><td>152</td><td>182</td><td>85</td><td>98</td><td>199</td><td>161</td><td>88</td><td>143</td><td>263</td></tr>
<tr><td>（機動性数）</td><td></td><td></td><td>5</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>試料珪酸体総数</td><td>887</td><td>686</td><td>746</td><td>848</td><td>1060</td><td>1217</td><td>828</td><td>450</td><td>851</td><td>768</td><td>478</td><td>539</td><td>625</td><td>622</td><td>644</td><td>461</td><td>507</td><td>499</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2">おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡·cm）</td><td colspan="15"></td></tr>
<tr><td>ヨシ属</td><td>0.42</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>ススキ属型</td><td>0.25</td><td>0.17</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>ネザサ節型</td><td>0.32</td><td>0.07</td><td>0.14</td><td>0.03</td><td>0.15</td><td>0.19</td><td>0.47</td><td>0.07</td><td>0.13</td><td>0.24</td><td>0.14</td><td>0.31</td><td>0.12</td><td>0.27</td><td>0.36</td><td>0.42</td><td>0.37</td><td></td></tr>
<tr><td>クマザサ属型</td><td>0.30</td><td>0.77</td><td>0.90</td><td>3.16</td><td>5.44</td><td>3.60</td><td>3.15</td><td>1.82</td><td>2.28</td><td>2.28</td><td>0.84</td><td>1.66</td><td>2.02</td><td>1.14</td><td>1.12</td><td>0.99</td><td>1.12</td><td>0.05</td></tr>
<tr><td>ミヤコザサ節型</td><td>0.04</td><td>0.12</td><td>0.39</td><td>0.50</td><td>0.52</td><td>1.01</td><td>0.50</td><td>0.28</td><td>0.12</td><td>0.35</td><td>0.18</td><td>0.24</td><td>0.39</td><td>0.25</td><td>0.28</td><td>0.20</td><td>0.16</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">ザサ類の比率（%）</td><td colspan="15"></td></tr>
<tr><td>ネザサ節型</td><td>48</td><td>7</td><td>10</td><td>1</td><td>2</td><td>4</td><td>11</td><td>3</td><td>5</td><td>8</td><td>12</td><td>14</td><td>5</td><td>16</td><td>20</td><td>25</td><td>23</td><td></td></tr>
<tr><td>ミヤコザサ節型</td><td>8</td><td>13</td><td>28</td><td>14</td><td>8</td><td>21</td><td>12</td><td>13</td><td>5</td><td>12</td><td>15</td><td>11</td><td>15</td><td>16</td><td>16</td><td>12</td><td>9</td><td></td></tr>
<tr><td>クマザサ属型</td><td>45</td><td>80</td><td>63</td><td>85</td><td>89</td><td>75</td><td>76</td><td>84</td><td>90</td><td>79</td><td>73</td><td>75</td><td>80</td><td>69</td><td>64</td><td>61</td><td>68</td><td>100</td></tr>
</table>

その後、赤城鹿沼テフラ（Ag－K、約3.1～3.2万年前）混層の時期には、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）を主体としてネザサ節なども見られるイネ科植生が成立したものと推定される。赤城小沼テフラ（Ag－KLP、約2.5万年前）混層より上位ではクマザサ属がしだいに増加し、浅間板鼻褐色軽石群（As－BP Group、約1.8－2.1万年前）直上層から浅間大窪沢第１軽石（As－Ok1、約1.7万年前）混層にかけてはクマザサ属が繁茂する状況であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、両者の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田、1996）。ここではクマザサ属が優勢であることから、おおむね寒冷な気候条件下で推移したと考えられ、As－BP Group（約1.8－2.1万年前）の上位からAs－Ok1（約1.7万年前）混層にかけてはとくに寒冷であったものと推定される。なお、赤城鹿沼テフラ（Ag－K、約3.1～3.2万年前）の上下層では、ネザサ率が20%以上と比較的高いことから、その後の時期より比較的温暖であった可能性が考えられる。この温暖期は、最終氷期の亜寒氷期（酸素同位体ステージ３）に対比されるものと考えられる。

クマザサ属は氷点下５℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻、1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

浅間板鼻黄色軽石（As－YP、約1.3－1.4万年前）混層より上位では、クマザサ属が大幅に減少し、ススキ属やチガヤ属などが見られるようになったものと推定される。この植生変化は、晩氷期から完新世初頭にかけての急激な温暖化に対応しているものと考えられる。また、ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

６．まとめ

赤城鹿沼テフラ（Ag－K、約3.1～3.2万年前）混層から浅間大窪沢第１軽石（As－Ok1、約1.7万年前）混層にかけては、クマザサ属などのササ類を主体とするイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくに浅間板鼻褐色軽石群（As－BP Group、約1.8－2.1万年前）より上位ではクマザサ属が繁茂する状況であったものと推定される。浅間板鼻黄色軽石（As－YP、約1.3－1.4万年前）混層より上位では、クマザサ属などのササ類が大幅に減少し、ススキ属やチガヤ属などが見られるようになったものと推定される。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27－37．

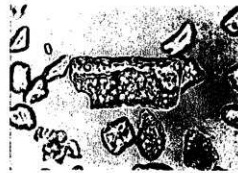
杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70－83．

杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定－中期更新世以降の氷期－間氷期サイクルの検討－．日本第四紀学会講演　要旨集，26，p.68－69．

高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社．

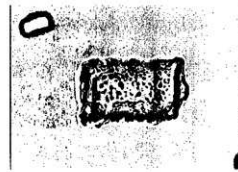
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15－29．

1．ススキ属型

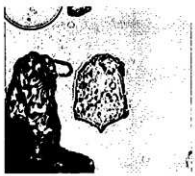


2．イネ科B

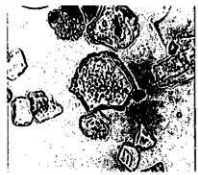
3．ネザサ節型



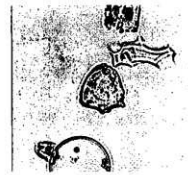
4．ネザサ節型



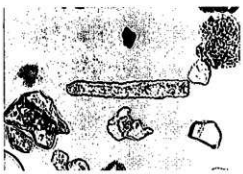
5．クマザサ属型



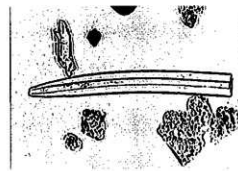
6．クマザサ属型



7．ミヤコザサ属型



8．棒状珪酸体



9．海綿骨針

植物珪酸体の顕微鏡写真

第6章　まとめ

本章では各時代ごとに本遺跡の東側に隣接する下触牛伏遺跡[1]との比較・検討を行い、遺跡本来の連続性や本遺跡の特性、あるいは今後の課題等を概観することにしたい。

旧石器時代

本遺跡で検出された旧石器の出土層位（第4章第1節・第2節、第5章）は7層・8層が中心で、ほぼ浅間板鼻軽石群（As－BP　Group、約1.8～2.1万年前）の最下部前後～赤城小沼ラピリ（Ag－KLP、約2.5万年前）の間と考えられる。

下触牛伏遺跡では、Ⅴa層（黄色ローム層）にピークのある第Ⅰ文化層、Ⅶ層（茶褐色ローム層・暗色帯）にピークのある第Ⅱ文化層がとらえられている。第Ⅰ文化層からは台地東縁を中心に礫群7か所・石器ブロック7か所が検出され、総数1,637点（内、石器866点）にのぼる遺物が出土している。第Ⅱ文化層では大別15か所・細別26か所の石器群が径50mほどの環状に巡る状態で検出され、総数2,037点の遺物が出土している。Ⅴa層は吾妻遺跡4層に近い層序と思われ、Ⅶ層は吾妻遺跡8層に相当すると考えられる。

本遺跡では下触牛伏遺跡ほどのまとまった遺物はみられなかったものの、試掘坑No.7においては弧状に分布する状態で旧石器が出土している。出土遺物のピークは7層と判断され、下触牛伏遺跡第Ⅱ文化層の上層に位置付けられる。しかしながら、下触牛伏遺跡の旧石器出土地点と本遺跡の試掘坑No.7は約200mの距離があり、環状ブロックとの連続性は考えられない。また、第Ⅰ文化層に相当する層位からの旧石器は検出されなかった。

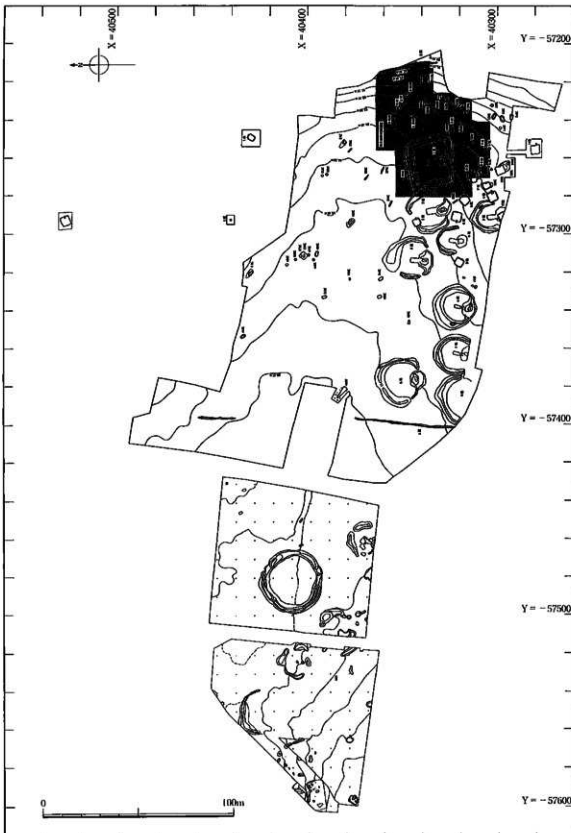
縄文時代

本遺跡では早期撚糸文期の竪穴住居跡1軒が検出され、また、土坑9基を縄文時代の遺構と判断した。

下触牛伏遺跡では、竪穴住居跡3軒・陥穴状の土坑25基・用途不明の土坑18基・集石3基が調査されている。竪穴住居跡の内、時期が判別しているのは前期諸磯ｃ式期の1軒のみである。土坑からの出土遺物は本遺跡と同様少ない状態にあるが、前期諸磯ｃ式期の遺物が多いようである。集石からは土器が出土していない。なお、遺構外からは草創期の爪形文土器、早期撚糸文系土器[2]・条痕文系土器、前期黒浜式土器・諸磯ｂ式土器・諸磯ｃ式土器・興津式土器、中・後期の加曽利Ｅ式土器・堀之内1式土器のほか、撚糸文系土器に伴うとみられる三角錐形石器・スタンプ形石器等の石器類も出土している。

草創期の爪形文土器を除けば、本遺跡の出土遺物も概ね類似した傾向にある。早期撚糸文期の遺物は、本遺跡では西端の2号住居跡から大量に出土しているが、下触牛伏遺跡では台地東縁から検出されており、対称的である。なお、調査区の各グリッドからも撚糸文系土器やそれに伴うと考えられる三角錐形石器・スタンプ形石器等が散見されることから、他にも当該期の遺構の存在が考えられるが、明確に検出するまでには至らなかった。

撚糸文期の住居跡は、群馬県内において小野上村・八木沢清水遺跡[3]・北橘村・城山遺跡[4]・笠懸町・清水北口遺跡[5]などで調査されているが、規模的には本遺跡例が最大とみられる。また、2号住居跡からのスタンプ形石器の出土数51点という数値は、他の調査例と比較しても突出して高い数値であり、平坦面に摩耗痕・使用痕が認められないことから、同住居跡において製作された可能性もある。ただ、他の石器の出度皆無も三角錐形石器22点・磨石52点等と多い状態にあり、別の要因を考えるべきかもしれない。



第75図　香妻遺跡と下触牛伏遺跡全体図

古墳時代

8基検出された古墳の内、確実に埴輪を伴うのは8号古墳1基のみで、6世紀後半代と想定される。他の7基は周溝内から出土しているわずかな遺物や周溝形態の類似性及び古墳群としての連続性などから下触牛伏遺跡で調査された10基の古墳（7世紀中葉以降と報告されている）に近似した時期と考えられる。埋葬主体部は、墳丘部にみられる礫から輝石安山岩を主要石材とする横穴式石室と思われるが、既に削平を受けており、いずれの古墳とも詳細は不明である。

8号古墳から出土した破形埴輪は、茸・矢柄も1本線の上向き矢印（「↑」）状線刻で矢を表現するものである。破形埴輪の矢表現は粘土紐表現と線刻表現とがあり、線刻表現には茎・矢柄を2本線で表現するものと、本遺跡例のように1本線で表現するものとがみられ、後者の本遺跡類似例としては、近年の集成資料によると[6]藤岡市・萩原塚古墳、吉井町・鉈塚古墳、富岡市・芝宮79号墳、前橋市・内堀M－1号墳などがある。

8号古墳は、いうまでもなく他の7基の古墳と下触牛伏遺跡の10基を包括する終末期古墳群とは別系譜である。本遺跡周辺の神沢川左岸では波志江今宮遺跡[7]や宮貝戸古墳群[8]などでも埴輪を有する古墳が調査されており、宮貝戸2号古墳の円筒埴輪には2次調整にB種横ハケ調整がみられ[9]5世紀後半代に想定されるものである。8号古墳の調査は部分的な調査にとどまったものの、同古墳以西に6世紀代の古墳・古墳群の存在を予感させるものである。

平安時代

本遺跡では調査区南西端において9世紀後半代とみられる住居跡1軒のみが検出されているにすぎず、下触牛伏遺跡では当該期の住居跡は検出されていない。本遺跡の南側もしくは西側に集落が展開する可能性もあるが、当該期における下触牛伏遺跡から本遺跡地にかけては墳墓域としての観念が根強く残っていたことの証左ともいえよう。

《引用文献・註》

1）㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986『下触牛伏遺跡』
2）上記報告書では撚糸文系土器を草創期後半としているが、本報告書での用語・土器型式名は基本的に『縄文時代研究事典』（戸沢充則編、1994、東京堂出版）に準拠しているため早期前半とした。
3）小野上村教育委員会　1997『矢木沢清水遺跡』
4）北橘村教育委員会　1989『城山遺跡』
5）笠懸町教育委員会　1995『清水北口遺跡』『笠懸町内遺跡Ⅱ』笠懸町埋蔵文化財調査報告第12集
6）志村　哲・荒木勇次　1995『群馬県出土の武器・武具埴輪』『群馬県内古墳出土の武器・武具』群馬県古墳時代研究会資料集第1集
7）㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995『波志江今宮遺跡』
8）伊勢崎市教育委員会　1983『宮貝戸古墳群・粟沼東古墳群』
9）石塚久則　1995「波志江地域の群集墳について」『波志江今宮遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

付章　下触牛伏遺跡の発掘調査

第１節　調査の方法と経過

県立しろがね学園の駐車場予定地を対象に試掘トレンチを５本設定して実施された確認調査の結果、古墳時代後期の住居跡１軒が検出された。調査対象地は昭和57年に発掘調査が行われた調査区の北側隣接地である。調査は遺構の検出された部分を拡張して行った。

調査は平成８年12月３日から同17日にかけて、吾妻遺跡の調査に並行して実施した。

第２節　遺構と遺物

調査で検出された遺構は古墳時代後期の住居跡１軒のみである。

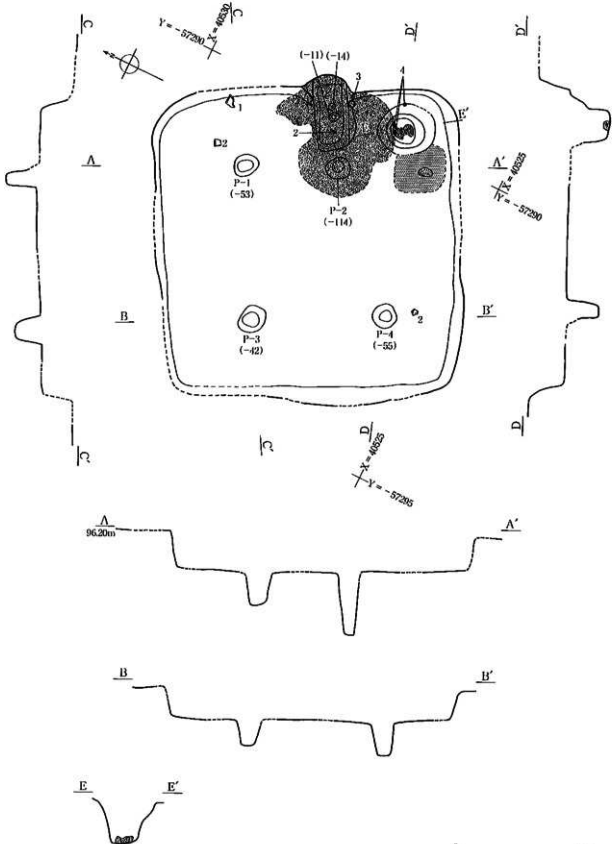
１号住居跡（遺構：第76図、PL43／遺物：第77図、PL44）

位置：座標値Ｘ＝40530、Ｙ＝－57290。検出状態：トレンチャーによる７本の細く深い掘削が床面下にまで及んでいるものの予想以上に遺存状態は良好であった。平面形態：方形。主軸方位：Ｎ－64°－Ｅ。規模：4.60m×4.60m。残存深度：58cm。床面積：20.2㎡。床面の状態：概ね平坦である。貯蔵穴周辺に硬化面を確認したが、その他の部分での硬化面は確認できなかった。貼り床も確認されなかった。また、カマド周辺に灰白色粘土の分布がみられた。壁面の状態：遺存状態良好な部分では80°前後の勾配で立ち上がっている。壁周溝：検出されなかった。柱穴・ピット：主柱穴４基（Ｐ－１～４）を検出している。均等配置ではなく、Ｐ－２はカマド手前に位置し、床面からの深さも110cmと他の３基の２倍近い。深さの相違や位置関係から判断して、Ｐ－２は他の用途のピットで、貯蔵穴手前のトレンチャーによって掘削された部分に本来の主柱穴が存在していた可能性が高い。カマド：北東壁中央付近に位置する。構築状態は明確に確認できなかったが、周辺に分布する灰白色粘土を主体として構築されていたと思われる。なお、この粘土は貯蔵穴の底面からも検出されている。カマド「掘り方」は1.20m×0.50mの長方形で、中央付近に深さ10cm前後の小ピット２基があり、小ピット内には焼土混じりの土が埋没していた。調査時にはこの小ピットを支脚装着痕と判断していたが、この「掘り方」は吾妻遺跡で調査した陥穴と判断した土坑と形態が類似しており、カマド部分に偶然重複していた土坑をカマドの掘り方と誤認した可能性も皆無とはいえない。貯蔵穴：カマド向かって右側の東角に位置する。平面形態は楕円形で、規模90cm×80cm、床面からの深さ60cm。先述したように底面から灰白色粘土が検出されている。この粘土は、カマド廃絶時に落ち込んだものか、あるいは貯蔵穴内に粘土を保管しておき随時カマド補修に用いたものか、両者の可能性が考えられる。今回検出された粘土は、他の混入物がなく、被熱痕もみられなかったことから、後者と想定しておきたい。遺構埋没状態：自然埋没と思われるが、十分な観察ができなかった。遺物出土状態：量的には少なかったが、比較的カマド・貯蔵穴及びその周辺からの出土が多かった。

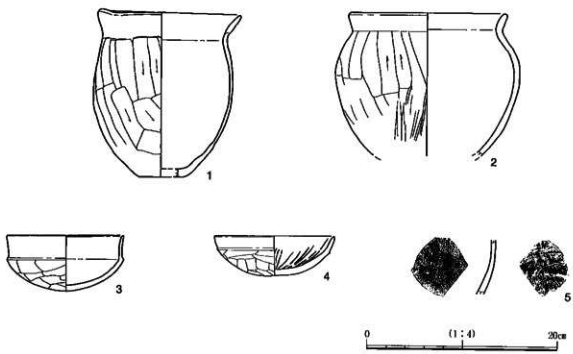
遺物：土師器甕３点以上・坏３点、須恵器甕破片を確認している。掲載遺物５点。

遺構外出土遺物（第78図、PL44）

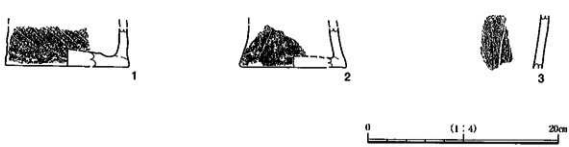
縄文土器片４点と頁岩製の剥片１点を確認している。ほとんどが表採遺物であるが、１号住居跡への紛れ込み遺物が１点ある。掲載遺物３点。



第76図　下触牛伏遺跡１号住居跡



第77図　下触牛伏遺跡1号住居跡出土遺物



第78図　下触牛伏遺跡遺構外出土遺物

観察表凡例

1．縄文土器（等）の胎土は下記のように分類した。

A類：結晶片岩を顕著に含むもの。
- －1：乳白色石英・角閃石をわずかに含む。
- －2：乳白色石英をわずかに含む。
- －3：角閃石をわずかに含む。
- －4：透明石英をわずかに含む。
- －5：チャート・乳白色石英を含む。
- －6：チャート・透明石英を含む。

B類：結晶片岩及び繊維の含有が認められない。
- －1：透明石英を顕著に含み、他の含有極めて少ない。
- －2：透明石英を含み、角閃石等を含む。
- －3：チャート・乳白色石英・角閃石等を含む。
- －4：乳白色石英・角閃石等を含む。
- －5：角閃石・黄白色粒を含む。
- －6：乳白色石英を含み、黄白色粒を含む。
- －7：粗い砂粒を顕著に含む。
- －8：チャート・乳白色石英を含む。
- －9：乳白色石英・透明石英を含む。

C類：繊維を含むもの。
- －1：チャート・透明石英を含む。
- －2：透明石英・海綿骨針を含む。
- －3：透明石英を含む。
- －4：乳白色石英を含む。
- －5：白色粒・黒色粒を含む。
- －6：角閃石・透明石英を含む。
- －7：チャート・乳白色石英を含む。

2．各石器は下記のように分類した。なお、分類基準は『矢木沢清水遺跡』（石坂　茂、1997、小野上村教育委員会を参考した。

▼石皿
1類：扁平な自然礫を使用し、使用面が平滑なもの。
2類：比較的角のある扁平な礫を使用し、使用面がざらつくもの。

▼スタンプ形石器
1類：側縁部・広面ともに加工を施さないもの。
2類：片側縁部に加工を施すもの。
3類：両側縁部に加工を施すもの。
4類：広面に加工を施すもの。

▼三角錐形石器
1類：礫面を残さずに全面加工を施すもの。
2類：1側面に礫面を残すもの。
3類：2側面に礫面を残すもの。
4類：四角錐に近い形状のもの。

▼磨石、等
1類：平面が楕円形状のもの。
2類：平面が円形のもの。
3類：不整形のもの。
A類：敲打痕が認められないもの。
B類：片側面に敲打痕があるもの。
C類：両側面に敲打痕があるもの。
D類：上下端部に敲打痕があるもの。
E類：側面のほぼ全体に敲打痕があるもの。

▼凹石
1類：平面が楕円形状のもの。
2類：平面が円形のもの。
3類：不整形のもの。
A類：両面に凹みが1ずつあるもの。
B類：両面に凹みが2以上あるもの。
C類：片面にのみ凹みが1あるもの。
D類：片面にのみ凹みが2以上あるもの。
E類：片面に1、他片面に2以上の凹みがあるもの。

▼削器・使用痕のある剥片(UF)・調整のある剥片(RF)
1類：平面が円形または縦位楕円形状のもの。
2類：平面が半円形または横位楕円形状のもの。
3類：平面が台形または横位長方形状のもの。
4類：平面が三角形状のもの。
5類：平面が逆三角形状のもの。
6類：平面が縦位長方形状のもの。
A類：単刃系凸刃。
B類：単刃系直刃。
C類：単刃系凹刃。
D類：複刃系交刃。
E類：複刃系複刃。

▼打製石斧
1類：短冊形（基部幅と刃部幅が1：1.7未満）。
2類：撥　形（基部幅と刃部幅が1：1.7以上）。
3類：その他の平面形状のもの。
A類：刃部が円弧状のもの。
B類：直刃。
C類：刃部が左側もしくは右側に傾斜する偏刃。

▼磨製石斧
1類：乳棒状のもの。
2類：定角状のもの。

▼石鏃
1類：平基無茎鏃。
2類：基部にゆるい抉りを持つ凹基無茎鏃。
3類：基部に深い抉りを持つ凹基無茎鏃。

3：石器石材に用いた略語は下記の通りである。

輝安岩……	輝石安山岩	黒頁岩……	黒色頁岩
雲片岩……	雲母片岩	角安岩……	角閃石安山岩
石安岩……	石英安山岩	輝緑凝……	輝緑凝灰岩

遺物観察表

2号住居跡出土土器①（第25～33図、PL.20～24）

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
1	口縁部	（撚糸文R）	にぶい黄褐色	A－1	442
2	口縁部	撚糸文R	にぶい黄褐色	A－1	390
3	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	A－1	902
4	口縁部	撚糸文R	灰黄褐色	B－1	1469
5	口縁部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	－
6	口縁部	撚糸文R	にぶい黄色	B－3	2570
7	口縁部	撚糸文R	浅黄色	B－1	458
8	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	A－1	2856
9	口縁部	撚糸文（太）R	にぶい橙色	B－3	－
10	口縁部	撚糸文R	にぶい黄色	B－2	2020
11	口縁部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	－
12	口縁部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－1	2588
13	口縁部	撚糸文R	黄橙色	B－2	176
14	口縁部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－2	2481
15	口縁部	撚糸文R	明赤褐色	A－2	2165
16	口縁部	撚糸文R	浅黄色	B－2	－
17	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	B－2	864
18	口縁部	撚糸文R	赤褐色	A－1	328
19	口縁部	撚糸文引きずり	赤褐色	A－1	1169
20	口縁部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	1637
21	口縁部	撚糸文R	赤褐色	A－1	2289
22	口縁部	撚糸文R＋沈線2条	にぶい黄橙色	B－2	2650
23	口縁部	撚糸文R	赤褐色	A－1	391
24	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	A－1	439
25	口縁部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－1	－
26	口縁部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－1	1819
27	口縁部	撚糸文R	赤褐色	B－4	302
28	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	B－2	540
29	口縁部	撚糸文R／器内滑い	にぶい黄橙色	B－5	1103
30	口縁部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－2	1332
31	口縁部	撚糸文R	にぶい橙色	B－4	－
32	口縁部	撚糸文R	灰黄色	B－4	754
33	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	B－2	2866
34	口縁部	撚糸文R	にぶい黄褐色	A－2	196
35	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	B－3	2129
36	口縁部	撚糸文引きずり	にぶい黄橙色	B－5	2247
37	口縁部	撚糸文L	橙色	B－2	617
38	口縁部	撚糸文（原体明）	にぶい橙色	B－4	1064
39	口縁部	無文	灰黄褐色	A－2	2634
40	口縁部	無文	にぶい黄橙色	A－1	2241
41	口縁部	無文	にぶい赤褐色	B－2	859
42	口縁部	無文	にぶい赤褐色	A－2	426
43	口縁部	無文	明赤褐色	A－2	879
44	口縁部	無文	にぶい赤褐色	A－1	370
45	口縁部	無文／焼成後穿孔	にぶい黄橙色	B－4	173
46	口縁部	無文	にぶい橙色	B－5	1680
47	口縁部	無文	明黄褐色	A－2	162
48	口縁部	無文	にぶい褐色	A－2	177
49	口縁部	無文	にぶい黄橙色	A－1	－
50	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－4	315
51	口縁部	口縁部下に凹線	にぶい黄橙色	B－2	1248
52	口縁部	無文	にぶい黄色	B－5	179
53	口縁部	無文	にぶい橙色	B－4	1571
54	口縁部	無文	にぶい橙色	A－2	－
55	口縁部	無文	にぶい赤褐色	A－3	571

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
56	口縁部	無文	にぶい褐色	A－1	939
57	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－4	863
58	口縁部	無文	にぶい黄橙色	A－1	1738
59	口縁部	無文	にぶい橙色	B－4	2968
60	口縁部	無文	にぶい赤褐色	A－2	406
61	口縁部	無文	にぶい褐色	A－1	2712
62	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－2	1772
63	口縁部	無文	灰褐色	A－1	2741
64	口縁部	無文	にぶい黄褐色	B－2	164
65	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－4	1432
66	口縁部	無文	にぶい褐色	A－1	739
67	口縁部	無文	にぶい褐色	B－4	－
68	口縁部	無文	にぶい褐色	B－6	385
69	口縁部	無文	にぶい赤褐色	B－2	467
70	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－4	2312
71	口縁部	無文	にぶい橙色	B－3	2425
72	口縁部	無文	灰黄褐色	A－2	1143
73	口縁部	無文	にぶい赤褐色	A－2	－
74	口縁部	無文	にぶい赤褐色	A－2	－
75	口縁部	無文	にぶい褐色	A－2	－
76	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－6	1820
77	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－2	－
78	口縁部	無文	明褐色	B－5	2867
79	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－4	－
80	口縁部	無文	にぶい黄橙色	B－5	－
81	胴部	無文	明赤褐色	B－5	593
82	胴部	無文	褐灰色	B－7	949
83	胴部	撚糸文R	赤褐色	A－1	2211
84	胴部	撚糸文L	にぶい黄橙色	B－4	－
85	胴部	撚糸文R	赤褐色	B－3	794
86	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－6	506
87	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	A－3	918
88	胴部	撚糸文R	橙色	B－4	773
89	胴部	撚糸文R	橙色	B－4	1992
90	胴部	撚糸文R	明赤褐色	A－2	2429
91	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	B－4	409
92	胴部	撚糸文R	橙色	B－2	435
93	胴部	撚糸施文後ナデ	にぶい赤褐色	A－3	1319
94	胴部	撚糸文R＋横位線	にぶい橙色	B－5	987
95	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	B－2	2888
96	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	－
97	胴部	撚糸文R	橙色	B－7	830
98	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	B－3	310
99	胴部	撚糸文R	橙色	B－5	1232
100	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	1273
101	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－6	2988
102	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	1757
103	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	562
104	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	－
105	胴部	撚糸文R	明赤褐色	B－5	－
106	胴部	撚糸文R	灰褐色	A－2	1589
107	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	2516
108	胴部	撚糸文（太）R	橙色	B－2	992
109	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	1021
110	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	2883

2号住居跡出土土器②

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
111	胴部	撚糸文R	橙色	B－6	2579
112	胴部	撚糸文R	赤褐色	A－2	－
113	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	－
114	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	1752
115	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	A－2	－
116	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	168
117	胴部	撚糸文R	橙色	B－3	2553
118	胴部	撚糸文R	赤褐色	A－2	2604
119	胴部	撚糸文R	明褐色	B－4	－
120	胴部	撚糸文R	明赤褐色	B－3	－
121	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－7	459
122	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	907
123	胴部	撚糸文引きずり	浅黄色	B－7	2387
124	胴部	撚糸文R	橙色	B－5	2838
125	胴部	撚糸文R／器厚厚い	にぶい褐色	B－3	2228
126	胴部	撚糸文R	明赤褐色	A－2	345
127	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	A－3	167
128	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	A－2	2893
129	胴部	撚糸文R	明赤褐色	B－5	1882
130	胴部	(摺糸文R)	にぶい橙	B－3	－
131	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	1215
132	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	2077
133	胴部	撚糸文R	橙色	B－5	2036
134	胴部	撚糸文R	橙色	B－4	2183
135	胴部	撚糸文R	明赤褐色	B－2	1122
136	胴部	撚糸文R	橙色	B－3	－
137	胴部	撚糸文R	橙色	B－6	2685
138	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	1059
139	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	B－2	1048
140	胴部	撚糸文引きずり	にぶい橙	B－3	2707
141	胴部	撚糸文R	にぶい黄褐色	A－2	－
142	胴部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－2	1596
143	胴部	撚糸文R	橙色	B－4	121
144	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	1213
145	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－4	1699
146	胴部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－4	2104
147	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	535
148	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	2229
149	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	1138
150	胴部	撚糸文（太）R	にぶい黄褐色	B－4	2568
151	胴部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－4	－
152	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	B－4	2341
153	胴部	撚糸文R	赤褐色	A－2	－
154	胴部	撚糸文R	にぶい橙	A－2	667
155	胴部	撚糸文R	明赤褐色	B－3	2404
156	胴部	撚糸文R	明黄褐色	B－4	2521
157	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	B－4	965
158	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	－
159	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	2413
160	胴部	撚糸文引きずり	にぶい黄橙色	B－3	2503
161	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	－
162	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	－
163	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	2554
164	胴部	撚糸文（太）R	にぶい黄橙色	B－3	183
165	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	1795
166	胴部	撚糸文R	にぶい黄色	B－4	1286
167	胴部	撚糸文R	灰黄色	B－1	1829

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
168	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	1633
169	胴部	撚糸文R	浅黄色	B－2	171
170	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙	B－2	2742
171	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	B－3	48
172	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	900
173	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	－
174	胴部	撚糸文R・引きずり	灰黄褐色	B－5	430
175	胴部	撚糸文（太）R	にぶい黄橙色	B－5	1988
176	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	B－5	631
177	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	2820
178	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	－
179	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	1673
180	胴部	撚糸文R	灰黄褐色	B－1	－
181	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－5	－
182	胴部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－1	1164
183	胴部	撚糸文R	褐灰色	B－4	－
184	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	1085
185	底部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－4	－
186	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	783
187	胴部	撚糸文（太）R	黄灰色	B－5	－
188	底部	撚糸文R	にぶい黄橙	A－1	933
189	底部	撚糸文R	にぶい黄橙	A－1	1271
190	胴部	撚糸文L	にぶい黄橙	B－3	2479
191	胴部	撚糸文L	にぶい黄橙	B－5	－
192	胴部	撚糸文引きずり	灰黄褐色	B－4	865
193	胴部	撚糸文R 束複	にぶい赤褐色	B－2	－
194	底部	無文	にぶい黄橙色	A－1	1612
195	底部	無文	にぶい黄橙色	B－4	889
196	底部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	1295
197	底部	撚糸文R	明赤褐色	B－4	－
198	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	A－2	－
199	胴部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－3	－
200	胴部	撚糸文R	橙色	B－3	－
201	胴部	撚糸文（太）R	橙色	B－4	－
202	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	B－6	－
203	口縁部	無文	灰黄褐色	B－3	－
204	口縁部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	－
205	口縁部	無文／補修孔あり	にぶい褐色	A－3	－
206	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	A－1	－
207	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	B－3	－
208	胴部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－2	－
209	胴部	撚糸文R	にぶい褐色	B－4	－
(第46図、PL.30)					
291	胴部	格子目状に平行沈線	にぶい橙色	B－4	1003
292	胴部	無節縄文	にぶい赤褐色	C－1	2834
293	胴部	内外面に条痕文	明赤褐色	C－3	G18
294	胴部	外面は斜沈線状	橙色	C－3	1491
295	胴部	外面は短沈線状	明赤褐色	C－1	－
296	胴部	内外面に条痕文	橙色	C－2	2054
297	胴部	内外面に条痕文	明黄褐色	C－3	2972
298	口縁部	平行沈線・爪形文	にぶい橙色	A－5	－
299	口縁部	平行沈線・爪形文	にぶい橙色	B－2	G18
300	胴部	L R縄文＋爪形文	にぶい橙色	B－2	G18
301	胴部	L R縄文＋爪形文	にぶい橙色	B－2	2000
302	口縁部	口縁部下に凹線	淡黄色	B－4	－
303	胴部	組成器片	灰色	B－8	－
304	胴部	組成器片	灰色	B－8	－

2号住居跡出土石器（第34～45図、PL.25～30）

番号	器種	分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
210	石鏃	1 無	残20.5	17.5	4.3	残2405.1	閃緑岩	831
211	石鏃	2 無	24.9	28.4	6.4	5780	輝安岩	743
212	石鏃	2 無	18.4	16.9	6.6	1919.5	輝安岩	630
213	スタンプ	4 無	11.2	8.7	3.8	450.7	黒曜岩	521
214	スタンプ	3 無	12.2	8.2	4.2	590.0	ヒン岩	518
215	スタンプ	2 無	12.4	7.3	5.6	768.1	ヒン岩	298
216	スタンプ	3 無	12.2	7.9	5.4	495.3	輝安岩	297
217	スタンプ	3 無	11.0	8.6	4.8	506.9	ヒン岩	454
218	スタンプ	3 無	11.6	7.6	5.3	490.2	ヒン岩	951
219	スタンプ	1 無	9.9	7.1	4.1	394.5	閃緑岩	576
220	スタンプ	1 無	12.2	7.1	3.8	387.6	ヒン岩	－
221	スタンプ	2 無	9.9	8.0	4.5	595.0	閃緑岩	1836
222	スタンプ	1 無	12.7	6.8	5.6	858.7	閃緑岩	2996
223	スタンプ	3 無	12.7	7.7	4.8	739.9	ヒン岩	284
224	スタンプ	3 無	11.9	7.2	6.2	530.6	ヒン岩	－
225	スタンプ	3 無	12.9	9.4	5.5	921.0	閃緑岩	99
226	スタンプ	4 無	12.4	8.9	5.5	698.2	黒曜岩	262
227	スタンプ	2 無	13.3	6.8	5.7	625.8	ヒン岩	1087
228	スタンプ	2 無	19.8	4.9	5.6	339.5	ヒン岩	1097
229	スタンプ	1 無	11.1	7.2	4.7	416.0	輝緑岩	2005
230	スタンプ	3 無	12.8	7.8	5.2	850.9	ヒン岩	－
231	スタンプ	4 無	7.0	5.7	3.3	195.5	ヒン岩	1888
232	スタンプ	3 無	5.4	5.7	4.1	166.6	ヒン岩	2845
233	三角錐	2 無	12.7	7.0	5.4	396.8	黒曜岩	－
234	三角錐	2 無	11.4	5.5	5.0	307.8	黒曜岩	2773
235	三角錐	4 無	16.3	7.3	5.3	672.2	黒曜岩	－
236	三角錐	3 無	11.4	4.1	3.6	252.8	黒曜岩	1364
237	三角錐	2 無	8.9	7.9	5.7	550.2	黒曜岩	368
238	三角錐	1 無	6.0	5.9	6.0	252.3	黒曜岩	2720
239	三角錐	2 無	7.6	5.3	5.8	274.3	黒曜岩	134
240	三角錐	3 無	5.8	6.0	4.9	184.1	黒曜岩	254
241	磨石	1 D	12.0	8.5	5.8	847.4	雲母岩	755
242	凹石	1 C	11.0	9.0	4.8	731.5	輝安岩	1066
243	磨石	1 A	10.4	7.9	3.4	397.1	角安岩	1678
244	凹石	1 D	10.1	7.6	4.6	491.3	石英岩	1731
245	磨石	1 C	9.2	7.5	4.9	469.9	ヒン岩	1506
246	磨石	1 E	10.7	9.9	6.3	938.2	輝安岩	1243
247	磨石	2 B	10.2	9.9	5.2	753.2	輝安岩	805
248	凹石	2 D	9.9	9.1	4.3	579.6	輝安岩	－
249	磨石	2 B	7.8	7.4	3.5	281.5	ヒン岩	281
250	敲石	2 C	8.3	13.3	4.1	466.7	黒曜岩	－

番号	器種	分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
251	剥器	6 D	5.1	9.3	2.3	126.7	黒曜岩	－
252	剥器	1 A	7.4	7.4	3.3	240.3	黒曜岩	－
253	剥器	2 A	5.4	7.6	2.9	113.2	黒曜岩	206
254	剥器	2 A	5.5	8.3	2.6	140.3	黒曜岩	93
255	剥器	2 A	5.0	6.1	2.1	59.0	黒曜岩	1813
256	R F	3 A	6.4	6.9	2.5	94.1	黒曜岩	2626
257	R F	4 H	6.4	9.0	1.2	68.4	黒曜岩	－
258	剥器	2 A	3.8	7.7	1.2	36.7	黒曜岩	1654
259	R F	2 A	6.9	8.7	2.2	121.8	黒曜岩	2934
260	剥器	2 B	4.9	8.4	1.0	40.4	黒曜岩	420
261	剥器	3 B	8.1	8.8	2.0	112.2	黒曜岩	377
262	R F	2 B	4.7	6.8	1.0	30.1	黒曜岩	－
263	R F	2 A	3.5	6.9	1.6	30.3	黒曜岩	2784
264	R F	3 A	3.8	7.3	1.1	27.1	黒曜岩	2054
265	剥器	2 A	2.8	4.5	1.2	15.7	黒曜岩	1015
266	R F	2 B	5.0	3.0	1.0	10.3	黒曜岩	231
267	U F	2 B	3.1	5.6	1.3	18.7	黒曜岩	936
268	剥器	3 B	4.7	5.9	2.3	62.4	黒曜岩	1996
269	R F	3 A	2.3	5.7	0.8	12.3	黒曜岩	434
270	R F	2 A	8.8	3.9	1.2	36.8	黒曜岩	－
271	R F	2 A	7.6	3.5	1.5	32.8	黒曜岩	1528
272	R F	6 A	残5.3	4.3	2.0	残56.6	頁岩	2153
273	石核	－	9.3	5.3	4.4	208.6	黒曜岩	－
274	打製石斧	1 A	7.7	4.0	1.4	52.4	黒曜岩	－
275	R F	2 B	8.9	4.8	1.6	72.9	黒曜岩	－
276	打製石斧	1 B	10.0	4.7	1.6	90.7	黒曜岩	－
277	打製石斧	1 －	－	5.4	2.7	残164.4	黒曜岩	－
278	局部磨斧	2 無	7.2	2.8	1.4	38.6	頁岩	279
279	局部磨斧	2 無	－	3.2	0.7	残10.0	粗粘凝	－
280	礫石		9.8	10.4	3.0	157.3	輝安岩	2545
281	礫石		－	4.9	1.5	残33.9	砂岩	1022
282	凝灰岩剥片		7.4	2.7	0.8	18.0	雲母岩	157
283	礫石		6.7	2.1	1.8	34.1	輝安岩	1384
284	R F	4 A	2.3	3.4	0.7	4.1	チャート	120
285	U F	6 A	4.1	2.5	0.7	8.0	チャート	476
286	石錐	3 B	1.5	1.0	0.2	0.3	チャート	2461
287	石錐	2 B	1.6	1.2	0.3	0.5	チャート	462
288	石錐	2 B	残1.3	1.2	0.3	残0.3	チャート	979
289	石錐	3 B	1.7	－	0.3	残0.4	チャート	2290
290	石錐	3 B	1.8	－	0.2	残0.3	チャート	2033

E－16グリッド遺物集中地点出土土器（第47図、PL.35）

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
1	胴部	撚糸文R	浅黄色	B－5	11
2	胴部	撚糸文	橙色	B－5	7
3	口縁部 付近	横位隆帯・垂下隆帯に 縄文（撚糸文）	にぶい黄橙色	C－4	－
4	胴部	内外面に条痕文	にぶい赤褐色	C－5	2
5	胴部	内外面に条痕文	灰黄褐色	C－5	15
6	胴部	内外面に条痕文	橙色	C－5	－
7	胴部	条痕文、内面は不明瞭	明赤褐色	C－5	12
8	胴部	内外面に条痕文	にぶい橙色	C－4	－
9	底部	条痕文、内面は不明瞭	にぶい黄橙色	C－4	9

E－16グリッド遺物集中地点出土石器①（第47・48図、PL.35・36）

番号	器種	分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
10	剥器	6 B	15.8	2.1	7.4	323.6	黒曜岩	－
11	剥器	2 B	7.2	15.2	3.5	394.1	黒曜岩	S－23
12	打製石斧	1 B	12.4	6.4	3.3	308.7	黒曜岩	S－22
13	剥器	3 E	6.8	9.7	2.3	166.5	黒曜岩	S－6
14	磨石	1 A	10.8	9.1	4.2	540.0	輝安岩	S－1
15	磨石	1 A	9.6	8.7	2.8	368.3	輝安岩	S－7
16	打製石斧	2 A	9.1	4.7	1.2	73.5	黒曜岩	S－42
17	打製石斧	2 A	8.2	4.8	1.7	74.9	黒曜岩	－
18	打製石斧	3 A	7.1	4.8	1.7	68.1	黒曜岩	S－40
19	剥器	3 A	4.9	4.9	1.1	31.9	黒曜岩	S－41
20	剥器	2 A	7.3	4.0	1.2	51.9	凝灰岩	S－20
21	剥器	3 B	5.7	5.8	1.5	66.5	硬砂岩	S－11

E－16グリッド遺物集中地点出土石器②

番号	器種		分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
22	R	F	2 B	7.0	7.0	0.8	37.0	黒頁岩	S－8
23	R	F	2 B	3.6	8.0	1.0	28.6	黒頁岩	－
24	U	F	1 A	5.4	5.9	1.2	36.1	黒頁岩	S－3
25	石	鏃	2 類	残2.6	1.6	0.5	残1.8	黒頁岩	S－2
26	石	鏃	2 類	残1.0	1.2	0.3	残0.3	チャート	－

12号土坑出土土器（第52図、PL36）

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
1	口縁部	隆帯＋沈線・縄文	にぶい黄橙	B－5	－
2	胴部	縄文＋蛇行沈線	にぶい黄橙	B－2	－
3	胴部	沈線・刺突文	にぶい黄橙	B－2	－
4	胴部	沈線・刺突文（短沈線）	浅黄色	B－5	－
5	胴部	L R縄文＋懸垂文	にぶい赤褐色	B－1	－
6	胴部	粒状の刺突文	暗灰黄色	B－9	3
7	胴部	無文の撚糸文系土器	にぶい赤褐色	A－1	－
8	胴部	撚糸文R	にぶい橙色	B－9	－

12号土坑出土石器（第52図、PL36）

番号	器種		分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
9	R	F	3 B	3.6	5.7	1.0	17.9	黒頁岩	－

14号土坑出土土器（第52図、PL36）

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
1	口縁部	撚糸文R	暗灰黄色	B－8	－
2	胴部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－5	－
3	口縁部	口縁部下に沈線巡る	にぶい赤褐色	B－5	－

1号古墳出土遺物（第54図、PL36）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	須恵器 平瓶	－・－ (14.2)／破片	肩部は鋭角に屈曲する。肩部推定径21.7cm。	灰色	長石・黒色粒	石室J5・石室1
2	土師器 坏	－・－ －1/3	身浅く、口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁部ナデ、底部ヘラ削り。	にぶい橙色	粗砂粒・黒色粒・白色粒	石室前J5

2号古墳出土遺物（第53図、PL36）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	須恵器 甕	－(23.7) －口頸部片	口頸部は外反して開き、上端部は受け口状。沈線と凹線を巡らせ、凹線を挟んで鋸歯波状文を施す。	灰色	石英・白色粒	石室F8
2	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、平行叩き。内面、同心円文。	灰色	石英・角閃石・白色粒	17・20
3	須恵器 長頸壺	－・－ －肩部片	肩部は鋭く屈曲する。肩部に鋸歯状工具による刺突文を斜位に巡らせる。肩部推定径18.0cm。	灰色	白色粒・黒色粒	H18G
4	須恵器 瓶	－・(4.4) －口頸部片	口縁部下にわずかな後。内面頸部に指頭圧痕。	灰色	白色粒・黒色粒	13
5	土師器 坏	4.6・12.4 －ほぼ完形	口縁部は丸底の底部との境に後を持ち、外反気味に立ち上がる。外面一部に煤付着。	橙色	石英・角閃石・白色粒	23
6	刀子	残長：6.0、幅：1.8、厚さ：0.4。鉄製品。刀関。茎に橙状金具（はばき）装着。一部に木芯が残る。				－

3号土古墳土遺物（第56図、PL37）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	須恵器 甕	－・(15.2) －口頸部片	口縁部は外反して開き、端部は外傾に折り返される。	灰白～黄灰色	石英・白色粒・黒色粒	24
2	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、丁寧なナデ。内面、無文の当て具痕。	灰白色	白色粒・黒色粒	5・11
3	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、平行叩き。内面、同心円文。	灰色	石英・チャート・白色粒・黒色粒	1・2
4	須恵器 甕	－・－ －破片	ロクロ整形。天井部と口縁部との境に1条の沈線が巡る。	灰色	石英・長石	15
5	須恵器 長頸壺	－・－ (13.3)高台部片	ロクロ整形。外側に踏ん張る高台、端部は上方に突出する。	灰色	白色粒・黒色粒	24
6	土師器 坏	－・(12.4) －破片	体部、丸みを持って口縁部に至る。外面、口縁部ナデ、底部ヘラ削り。内面、ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	19

5号古墳出土遺物（第57図、PL37）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、擬格子目状叩き。内面、同心円文。	灰色	石英・長石	10
2	須恵器 坏	－・－ －破片	ロクロ整形。口縁部下にわずかな稜を持つ。あるいは蓋か。	暗青灰色	石英・白色粒	14

6号古墳出土遺物（第58図、PL37）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	土師器 坏	－（11.0） －口縁部片	体部、丸みを持って口縁部に至る。外面、口縁部ナデ、底部ヘラ削り。内面、ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	石室前1
2	土師器 高坏	－・－ －脚部片	脚部は裾部に向かって外反して開く。外面、ヘラ磨き。	にぶい黄褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	石室前4
3	須恵器 甕	－・－ －頸部下片	外面、平行叩き後、横方向のナデ。内面、破片下半部に同心円文、上半をナデ。	灰黄色	石英・チャート・白色粒	石室前5
4	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、平行叩き。内面、同心円文。	灰色	石英・白色粒	－

7号古墳出土遺物（第59図、PL37）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	埴輪片	－・－ －小破片	摩滅著しいが、外面にわずかな縦ハケが残る。	橙色	石英・角閃石・白色粒	石室6
2	埴輪片	－・－ －小破片	円筒埴輪片と思われる。摩滅著しい。透し孔あるが不明瞭。凸帯は低い台形。内面はハケ目後にナデか。	橙色	石英・角閃石・白色粒	石室1
3	埴輪片	－・－ －小破片	円筒埴輪片と思われる。外面、縦ハケ。内面はハケ目。	橙色	石英・角閃石・白色粒	石室3
4	須恵器 甕	－・－ －口縁部片	口縁部下に陰起線を1条巡らせ、その下に波状文。	灰色	石英・角閃石・白色粒	石室8
5	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、平行叩き後、ナデ。内面、同心円文をナデ消し、細い条線が多数認められる。	灰色	石英・チャート・黒色粒	4

8号古墳出土遺物①（第61・62図、PL37・38）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	形象埴輪 （靴）	－・－ －破片	靴形埴輪の背板部分か。表裏に縦ハケ後、表面に斜め2本の線刻。線刻間に赤色塗彩が認められる。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
2	形象埴輪 靴	－・－ －矢筒・ 背板部分	矢筒は円筒形で、その左右に背板を付ける。円筒部は縦ハケ、背板部は横位ハケ後に「円」状に区画線刻し、区画内に斜位の線刻を連続して施す。内面はナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
3	形象埴輪 靴	残長6.2 鼻部分	表裏面ともナデ。上向き矢印状の線刻により鼻を表現する。／1・2・3は同一個体か。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
4	形象埴輪 人物	残長5.1 鼻部分	全体的にしっかりとした造りで、丁寧なナデ。鼻孔表現はない。	橙色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
5	形象埴輪 （人物）	（腕部分）	中実造り。指頭圧痕あり。やや粗雑な整形。あるいは馬形埴輪の尻尾部か。	にぶい赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
6	形象埴輪 人物	破片	下衣の裳を表現したものか、あるいは上衣の裾部か。平面形は楕円形と思われるが全周しないようである。（後）正面には透し孔が円形に開く。内面側部には調離痕が認められる。全体をナデ整形。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
7	形象埴輪 不明	破片	端部は丸みを持つ。内面に調離痕。全体をナデ整形。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
8	円筒埴輪	－・（20.5） －第2・3段	凸帯は断面三角形、逆半円形透し孔。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面斜め基調のハケ（8本/2cm）。第2段：7.7cm、第3段：9.3cm。／第3段外面に線刻「×」。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
9	円筒埴輪	第2・3段間片	凸帯は断面三角形、透し孔形状不明。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面斜め基調のハケ（8本/2cm）。／第3段外面に線刻「×」か。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－

8号古墳出土遺物②

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
10	円筒埴輪	第1・2段間片	凸帯は断面三角形、透し孔は推定進半円形。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面斜め基調のハケ（8本/2cm）。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
11	円筒埴輪	－・－ －破片	凸帯は断面三角形。外面縦ハケ（12本/2cm）。内面縦方向指ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
12	円筒埴輪	－・－ －破片	朝顔形円筒埴輪と推定される。凸帯は断面台形状。外面縦ハケ（12本/2cm）。内面縦方向指ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
13	円筒埴輪	－・－ －（第2段片）	凸帯は断面三角形、透し孔の形状不明。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面ハケ目後に破片大半をナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
14	円筒埴輪	－・－ －破片	凸帯は断面三角形。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面斜め基調のハケ（8本/2cm）。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
15	円筒埴輪	－・－ －破片	朝顔形円筒埴輪の肩部片と思われる。凸帯は断面台形状。外面縦ハケ（12本/2cm）。内面ハケ目（12本/2cm）後にナデ。	にぶい赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
16	円筒埴輪	－・－ －破片	凸帯は断面三角形。外面縦ハケ（6本/2cm）。内面ハケ目後に縦方向のナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
17	円筒埴輪	－・－ (11.0)第1段片	底部に線状の圧痕。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面縦方向の指ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
18	円筒埴輪	－・－ (10.6)第1段片	底部に棒状の圧痕。外面縦ハケ（8本/2cm）。内面縦方向の指ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
19	円筒埴輪	－・－ －第1段片	底部に棒状の圧痕。外面縦ハケ（9本/2cm）。内面縦方向の指ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－
20	土師器 坏	2.1・(7.4) －破片	小形の坏と思われる。口縁部は底部との境に稜を持ち、外反気味に開く。口縁部木口状工具ナデ、底部ヘラ削り。	橙色	石英・角閃石・チャート・白色粒	－

8号土坑出土遺物（第63図、PL36）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	土師器 坏	－・(11.4) －破片	口縁部、底部との境に稜を持ち、内湾気味に開く。内外面口縁部は横ナデ、内面底部ヘラ磨き。内面煤付着。	褐灰色	石英・角閃石	8

1号住居跡出土遺物（第65図、PL39）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	土師器 甕	－・21.2 －上半1/2	コの字状口縁。外面、口縁部ナデ、胴部ヘラ削り。内面、口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・チャート・角閃石	カ5・カ11・カ19、他
2	土師器 甕	－・(21.0) －上半部片	コの字状口縁。外面、口縁部ナデ、胴部ヘラ削り。内面、口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。整形やや粗雑。	明赤褐色	雲母・石英・チャート・角閃石	－
3	土師器 甕	－・－ 4.0底部	外面、胴部・底部ヘラ削り。内面、ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・チャート・角閃石	8・カ9
4	土師器 台付甕	－・－ 10.2脚台部片	脚台部外反して開き、端部丸みを持つ。内外面とも横ナデ。外面脚台部上端に煤付着。	橙色	雲母・石英・チャート・角閃石	カ
5	土師器 坏	3.2・(12.6) 8.0 2/3	口縁部やや外反する。外面、底部ヘラ削り、体部粗雑な指ナデ・指頭圧痕、口縁部ヘラナデ。内面、ヘラナデ。内面底部に墨書あるが判読不能。	明赤褐色	石英・チャート・角閃石・白色粒	－
6	土師器 坏	3.1・(12.5) (8.5) 1/3	体部丸みを持って立ち上がる。外面、底部ヘラ削り、体部粗雑なナデ・指頭圧痕、口縁部ヘラナデ。内面、ヘラナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・白色粒	カ41・カ46
7	須恵器 椀	7.5 19.9 8.6 1/2	ロクロ右回転。体部丸みを持ち、口縁部は外反する。底部回転糸切り後、高台貼り付け。	暗灰色	片岩・石英・チャート	19・24・27
8	坏	4.2・(12.9) (6.7) 1/2	ロクロ使用・酸化焔焼成。外面、回転ヘラナデ。内面、ヘラ磨き、黒色処理。底部、回転糸切り無調整。	にぶい褐色	石英・角閃石・赤褐色粒	9・カ44
9	須恵器 坏	2.6・(14.3) (6.4) 1/4	身浅く、体部丸みを持って立ち上がり、口縁端部は外反。整形やや粗雑。底部回転糸切り後、周縁部回転ヘラ削り。	オリーブ灰色	片岩・チャート・白色粒	床下
10	灰釉陶器 皿	(3.1)・(15.8) (6.2) 1/3	体部やや丸みを持って開き、口縁端部は短く外方に折れる。底部回転糸切り後、内湾する高台貼り付け。内面、底部を除きハケ塗り施釉。	灰色 オリーブ灰色	白色粒・黒色粒	1
11	須恵器 甕	－・－ －胴部片	外面、平行叩き。内面、同心円文。	灰色	石英・チャート・黒色粒	カ13
12	敲石	長さ：13.3、幅：5.6、厚さ：4.7。重さ：475.6g。下端に敲打痕あり。石材：安山岩。				S－4

遺構外出土縄文土器（第66・67図、PL39・40）

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
1	口縁部	撚糸文R	にぶい褐色	A－4	SZ8
2	口縁部	撚糸文引きずり	にぶい橙色	B－4	SZ5
3	口縁部	撚糸文引きずり	にぶい黄褐色	A－3	F15
4	口縁部	撚糸文R	橙色	B－2	SZ5
5	口縁部	（撚糸文R）	にぶい褐色	A－6	C11
6	口縁部	撚糸文R	にぶい黄褐色	A－2	B12
7	口縁部	不明	にぶい黄褐色	B－1	E15
8	口縁部	撚糸文L	褐色	B－8	E18
9	口縁部	撚糸文R	明赤褐色	B－3	SZ8
10	口縁部	無文	にぶい黄褐色	B－2	SZ8
11	口縁部	撚糸文R/口縁下凹線	にぶい赤褐色	B－3	E15
12	口縁部	不明/口縁下凹線	にぶい赤褐色	A－5	E12
13	口縁部	不明/口縁下沿れる	黄褐色	B－9	SZ8
14	胴　部	無文/浅鉢片	にぶい赤褐色	B－9	C10
15	胴　部	撚糸文R	明赤褐色	B－3	S11
16	胴　部	撚糸文L	にぶい橙色	B－5	F11
17	胴　部	撚糸文L	にぶい赤褐色	B－2	I18
18	胴　部	撚糸文R	にぶい赤褐色	A－6	E12
19	胴　部	撚糸文R	橙色	B－5	I18
20	胴　部	撚糸文R	にぶい黄褐色	B－9	G16
21	胴　部	撚糸文R	にぶい黄橙色	B－2	F18

番号	部位	施文	色調	胎土	注記
22	胴　部	撚糸文R	明赤褐色	B－2	F18
23	胴　部	（撚糸文R）	赤褐色	A－1	SZ8
24	底　部	（撚糸文R）	にぶい橙色	A－5	C14
25	底　部	不明	にぶい黄橙色	B－2	B13
26	口縁部	平行沈線・斜格子沈線	にぶい黄橙色	C－1	SZ8
27	口縁部	斜突文・平行沈線	にぶい橙色	C－6	SZ8
28	口縁部	（無文）	灰黄色	C－7	F16
29	口縁部	内外に櫛歯状条痕文	赤褐色	C－7	F16
30	胴　部	（只殻腹縁文）・条痕文	にぶい黄色	C－6	S11
31	胴　部	内外面に条痕文	にぶい橙色	C－7	B14
32	胴　部	外面条痕文・内面ナデ	明赤褐色	C－1	SZ8
33	胴　部	内外面に条痕文	明赤褐色	C－5	G17
34	胴　部	内外面に条痕文	明赤褐色	C－7	SZ6
35	胴　部	（無文）・内面に条痕文	にぶい黄橙色	C－5	E11
36	胴　部	内外面に条痕文	にぶい橙色	C－7	B14
37	胴　部	内外条痕文・外面刺突	にぶい赤褐色	C－1	E16
38	胴　部	内外面に条痕文	にぶい黄橙色	C－1	F16
39	胴　部	外面条痕文・内面不明	にぶい黄橙色	C－1	E10
40	胴　部	波状貝殻文	橙色	B－8	B13
41	口縁部	横位沈線・口形凹み２	にぶい黄橙色	B－3	F16

遺構外出土石器（第67～71図、PL40～42）

番号	器種	分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
42	石　鏃		10.2	23.1	9.7	2135.0	ヒン岩	H12
43	礫　器	3 B	8.6	16.5	5.0	760.1	黒曜岩	E12
44	打製石斧	3 B	10.4	5.9	3.3	215.5	黒曜岩	G5
45	スタンプ	3 類	10.7	8.1	5.4	485.3	輝安岩	I18
46	スタンプ	2 類	10.9	10.3	4.0	622.3	輝安岩	H18
47	スタンプ	2 類	11.8	8.9	5.1	529.2	安山岩	C14
48	三角錐	2 類	12.7	5.0	5.2	317.0	黒曜岩	G18
49	三角錐	2 類	14.2	6.8	6.7	665.6	黒曜岩	L15
50	磨　石	1 A	13.0	10.5	2.5	451.1	安山岩	E11
51	門　石	3 A	9.2	12.5	4.9	504.9	角安岩	SZ1
52	磨製石斧	－	残6.7	残3.2	残1.6	残35.9	頁　岩	SZ7
53	打製石斧	2 B	10.6	5.1	1.3	70.9	黒曜岩	E11
54	打製石斧	2 A	11.0	5.4	1.5	119.6	黒曜岩	E17
55	打製石斧	－	残7.1	4.8	1.8	残73.2	頁　岩	G18
56	打製石斧	2 B	7.7	5.0	1.3	60.2	黒曜岩	E16
57	打製石斧	2 A	6.3	3.3	1.1	27.7	黒曜岩	E16

番号	器種	分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材	注記
58	打製石斧	3 A	8.9	4.4	2.1	74.6	黒曜岩	F16
59	打製石斧	2 A	6.1	4.0	1.5	29.3	黒曜岩	SZ7
60	打製石斧	2 A	7.2	3.9	1.3	41.4	黒曜岩	F16
61	削　器	2 A	7.2	8.4	2.7	157.8	黒曜岩	SZ7
62	石　鏃	3 類	残2.2	1.3	0.3	残0.9	頁　岩	F7
63	石　鏃	3 類	2.9	1.4	0.3	残1.1	チャート	E15
64	石　鏃	2 類	1.8	1.2	0.3	0.4	頁　岩	G18
65	石　鏃	3 類	2.6	1.7	0.3	1.2	黒曜岩	D7
66	石　鏃	2 類	2.0	1.6	0.3	0.7	チャート	D14
67	石　鏃	3 類	残3.1	残1.5	0.6	残2.0	黒曜岩	F16
68	石　鏃	2 類	2.5	1.5	0.5	1.0	黒曜岩	－
69	石　鏃	3 類	残1.7	残1.0	0.3	残0.6	チャート	E4
70	石　鏃	1 類	1.9	1.3	0.3	0.6	チャート	F16
71	石　鏃	3 類	残2.2	残1.3	0.4	残0.7	黒曜石	I8
72	石　鏃	3 類	残1.9	残1.1	0.4	残0.7	頁　岩	SZ2
73	R	F	－	2.1	1.8	0.4	1.5	チャート	I16

遺構外出土　古墳時代～中・近世の遺物（第71図、PL42）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
74	円筒埴輪	破片	朝顔形円筒埴輪。外面縦ハケ（８～９本/２cm）。内面ナデ、輪積み痕が顕著に残る。	橙色	石英・角閃石・チャート・白色粒	F16
75	円筒埴輪	破片	外面縦ハケ（12～13本/２cm）。内面横方向のハケ（12～13本/２cm）。	橙色	石英・角閃石・チャート・白色粒	F16
76	須恵器 甕	－　・　－ －　破片	外面、平行叩き。内面、同心円文。	灰色	石英・角閃石・チャート	F16
77	須恵器 甕	－　・　－ －　破片	外面、平行叩き（擬格子状）。内面、同心円文。	灰色	石英・赤褐色粒	H7
78	須恵器 甕	－　・　－ －　破片	外面、平行叩き（擬格子状）。内面、同心円文。	灰オリーブ色	白色粒・黒色粒	H11
79	須恵器 （提瓶）	－　・　－ －　破片	ロクロ整形。外面にカキ目。	灰黄色	石英・チャート	B12

遺構外出土　古墳時代～中・近世の遺物（第71図、PL42）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
80	擂管	長さ：4.2。重さ：9.9g。真鍮製。雁首。油強帯はない。斜めの浅い線刻あり。				－
81	擂管	長さ：5.7。重さ：3.0g。真鍮製。吸口。				G18
82	擂管	長さ：3.6。重さ：2.7g。真鍮製。吸口。				A9
83	砥石	長さ：5.8、幅：2.6、厚さ：1.5。重さ：30.2g。仕上げ砥。側面と1広面及び上小口に側目あり。石材：流紋岩。				SI2
84	砥石	長さ：7.8、幅：2.9、厚さ：1.8。重さ：45.7g。仕上げ砥。裏面に線刻文字あり。石材：流紋岩。				SI2

下触牛伏遺跡

1号住居跡出土土器（第77図、PL44）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	土師器 甕	17.4・15.1 5.0　3/4	頸部は弱く括れ、口縁部は外傾して開く。外面、口縁部本口ナデ、胴部ヘラ削り。内面、ナデ。外面一部に煤付着。	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粒	2
2	土師器 甕	－・16.4 －　2/3	胴部、膨らむ。頸部は弱く括れ、口縁部は外反気味に開く。外面、口縁部ナデ、胴部ヘラ削り後にヘラ磨きを施すが不鮮明。内面、ナデ。	明赤褐色	石英・角閃石・白色粒	3・4・6・7・カ4
3	土師器 坏	5.8・12.4 －　5/6	丸底。口縁部、体部との境に稜を持ち、外傾気味に立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げる。外面、口縁部ナデ、体部・底部ヘラ削り。内面、ナデ。	橙色	石英・角閃石・白色粒	カ1
4	土師器 坏	－・12.5 －　3/4	丸底。口縁部、体部との境に稜を持ち、外傾して開く。外面、口縁部ナデ、体部・底部ヘラ削り。内面、放射状ヘラ磨き。	にぶい赤褐色	石英・チャート・赤褐色粒	8・貯1・貯2
5	須恵器 （甕）	－・－ －　破片	あるいは瓶の破片か。外面、ナデ。内面、同心円文。	灰色	石英・チャート・黒色粒	－

遺構外出土遺物（第78図、PL44）

番号	器種	器高・口径 底径／残存	器形・成形・整形等の特徴	色調	胎土	注記
1	縄文土器	－・－ (13.2)　底部片	胴部は底部から内傾気味に立ち上がる。RL縄文施文。	にぶい黄褐色	石英・黒色粒・白色粒	表採
2	縄文土器	－・－ (11.2)　底部片	胴部は底部から内傾気味に立ち上がる。破片内は無文。	にぶい橙色	石英・角閃石・白色粒	SI－1
3	縄文土器	－・－ －　胴部片	沈線懸垂文と斜位の赤線施文。	灰黄褐色	石英・角閃石・白色粒	表採

抄　　録

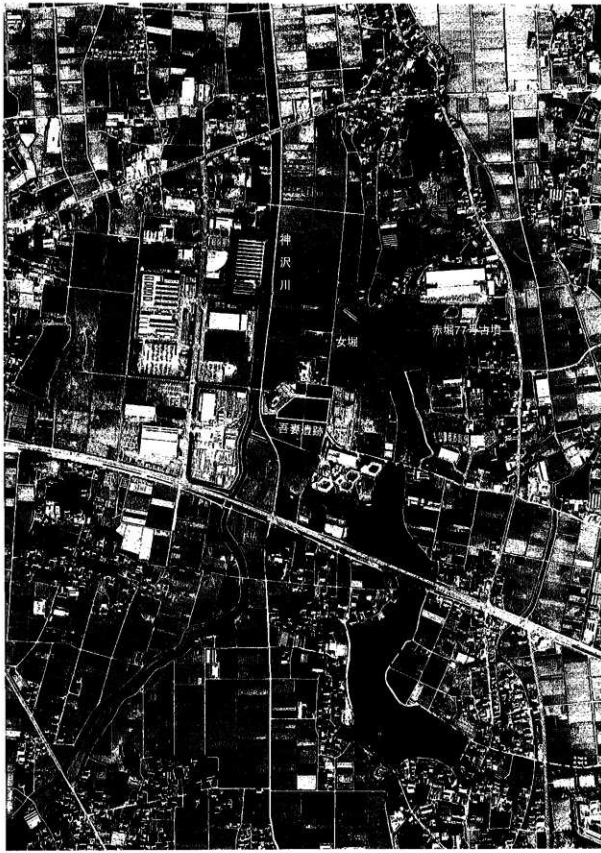
フリガナ	アヅマイセキ
書名	吾妻遺跡
編著者名	長井正欽、高島英之、矢島博文、古環境研究所
編集機関	由武考古学研究所　／〒286－0045　千葉県成田市並木町221番地　☎0476（24）0536
発行機関	県立しろがね学園遺跡調査会　／〒371－0026　群馬県前橋市大手町１－１－１ 群馬県教育委員会文化財保護課内　☎027（223）1111
発行年月日	西暦1998年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吾妻遺跡	群馬県前橋市 東大室町	10201　6	8E－35	36°21′46″	139°11′32″	19961021 19970330	12,152㎡	県立しろがね学園移転建設工事
		市町村	遺跡番号					
下触牛伏遺跡	群馬県赤堀町 下触字牛伏	10461　2		36°21′49″	139°11′41″	19961203 19961217	100㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吾妻遺跡	包蔵地	旧石器時代	ユニット　1	ナイフ形石器、等	
	集落跡 墳墓	縄文時代	住居跡　1軒 遺物集中地点　1 土坑　9基	土器・石器（スタンプ形石器・三角錐形石器、等）	早期撚糸文系土器や石器類が多量出土。
		古墳時代	古墳　8基 土坑　1基	土師器・須恵器・形象埴輪・円筒埴輪	8号古墳から鰭形埴輪が出土。
		平安時代	住居跡　1軒	土師器・須恵器・灰釉陶器	
		時期不明	土坑　4基		
下触牛伏遺跡	集落跡	古墳時代	住居跡　1軒	土師器	

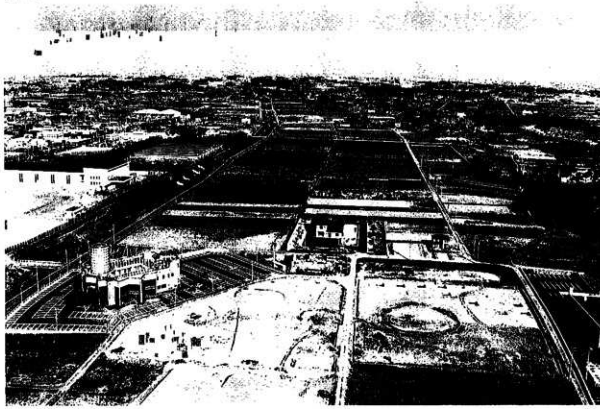
写真図版

PL1



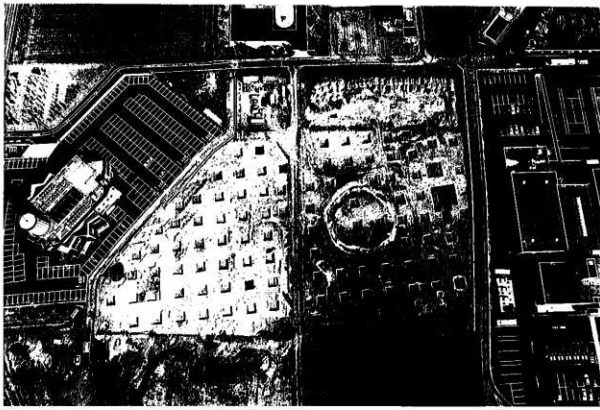
周辺の地形（国土地理院作製、平成６年11月撮影、上が北、S≒１：12,500）

PL2



遺跡全景（北方に赤城山を望む）

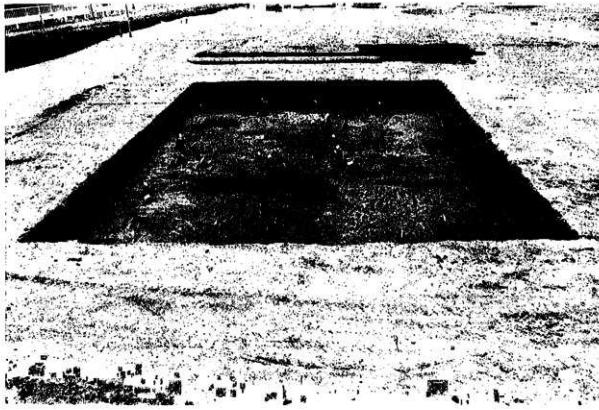
遺跡全景（上が北）



旧石器試掘坑全景（上が北）

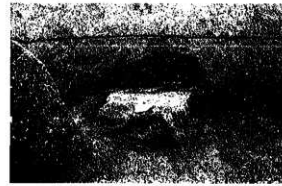
旧石器試掘坑全景（西→）

PL4



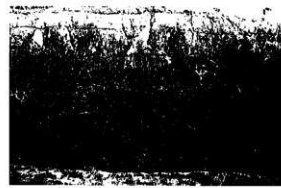
試掘坑No.7（北→）

試掘坑No.7遺物出土状態近景（No.5、北→）

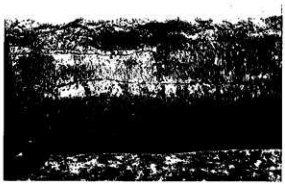


試掘坑No.7遺物出土状態近景（No.9、西→）

試掘坑No.10土層（南→）

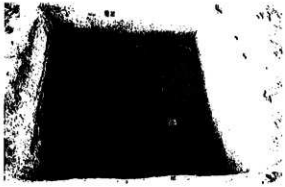


試掘坑No.19土層（南→）

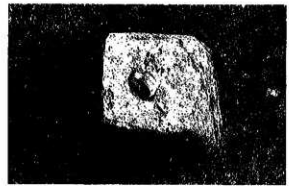


試掘坑No.50土層（南→）

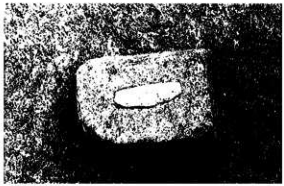
試掘坑No.50遺物出土状態近景（No.1、東→）



試掘坑No.57（南→）



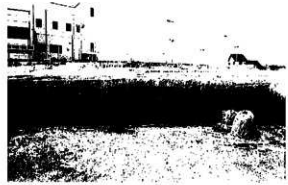
試掘坑No.57遺物出土状態近景（No.1、北→）



試掘坑No.60遺物出土状態近景（No.1、北→）

試掘坑No.60（東→）

試掘坑No.67（東→）



試掘坑No.67土層（南→）

PL6

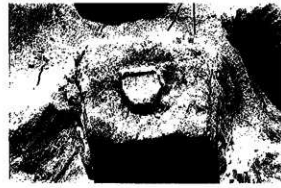
2号住居跡（上が北）

2号住居跡（南→）

2号住居跡遺物出土状態①（東→）

2号住居跡遺物出土状態②（南→）

2号住居跡遺物出土状態③（西→）

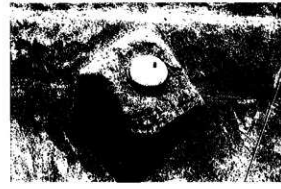


2号住居跡遺物出土状態④

2号住居跡遺物出土状態⑤（東→）

2号住居跡遺物出土状態⑥（南→）

2号住居跡遺物出土状態⑦

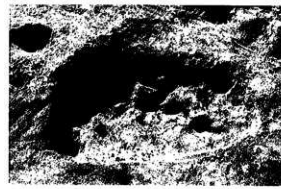


2号住居跡遺物出土状態⑧

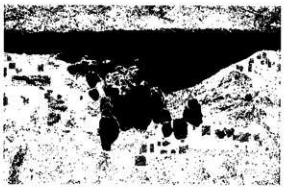
PL8

E－16グリッド遺物出土状態（東→）

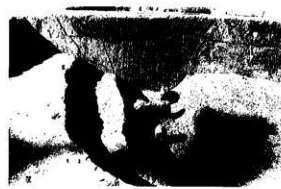
1号土坑（北→）



5号土坑（北→）

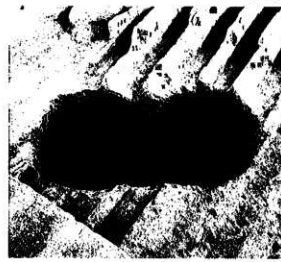


10号土坑（北→）

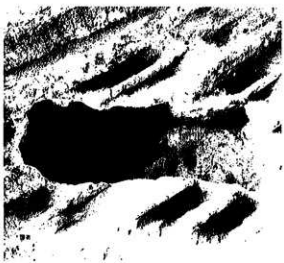


16号土坑（南西→）

2号土坑（東→）

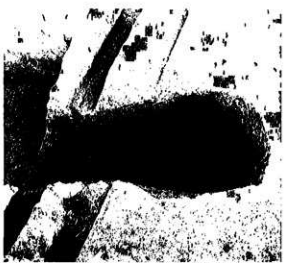


3号土坑（南西→）

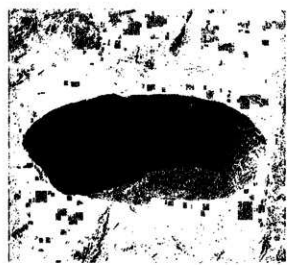


4号土坑（北東→）

12号土坑（北→）

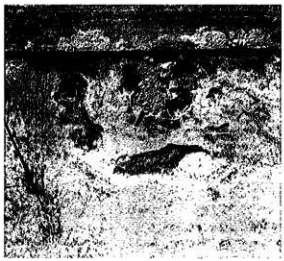


13号土坑（東→）



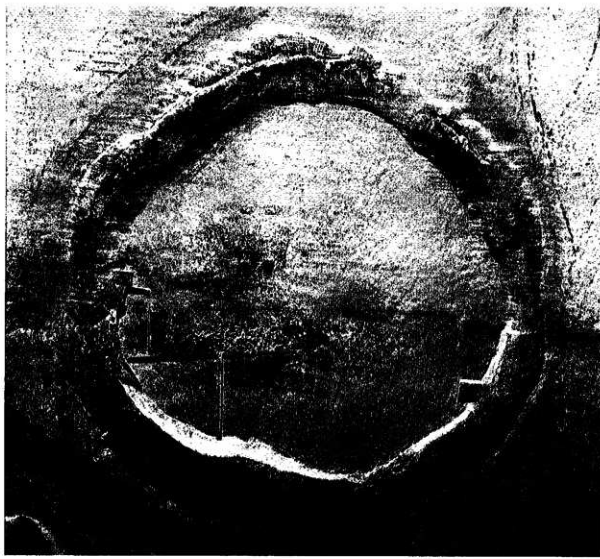
14号土坑（北→）

PL10



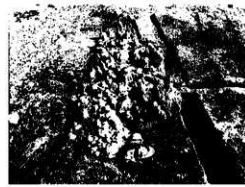
1号古墳（上が南）

1号古墳主体部（上が南）

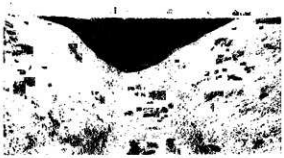


2号古墳（上が北）

2号古墳（東→）

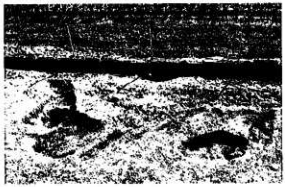


2号古墳主体部（西→）



2号古墳周溝南側土層（西→）

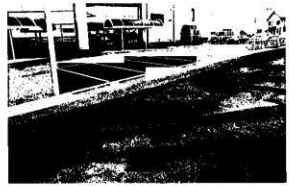
2号古墳周溝東側土層（南→）



4号古墳（北→）

5号古墳（上が北）

5号古墳周溝西側土層（南→）

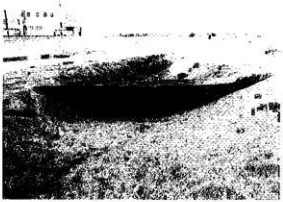


8号古墳（南→）

PL12

3号古墳（上が北）

3号古墳主体部（南→）



3号古墳周溝東側土層（南→）

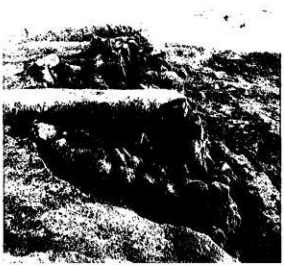
6号古墳（北→）

6号古墳（上が北）

6号古墳主体部（北→）

7号古墳（上が北西）

7号古墳主体部（南→）



7号古墳主体部（南西→）

7号古墳主体部掘り方（南→）

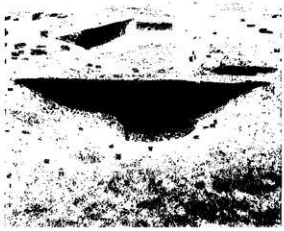
7号古墳周溝土層（東→）

7号古墳周溝土層（南→）

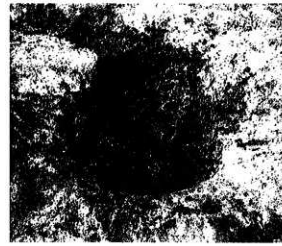
PL14

8号土坑（東→）

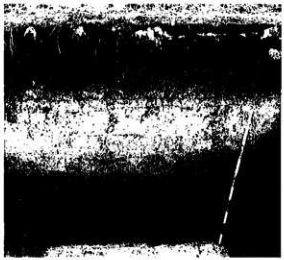
11号土坑（北→）



6号土坑土層（南→）



6号土坑（南→）



東地区基本土層（南→）

西地区基本土層（東→）

1号住居跡（西→）

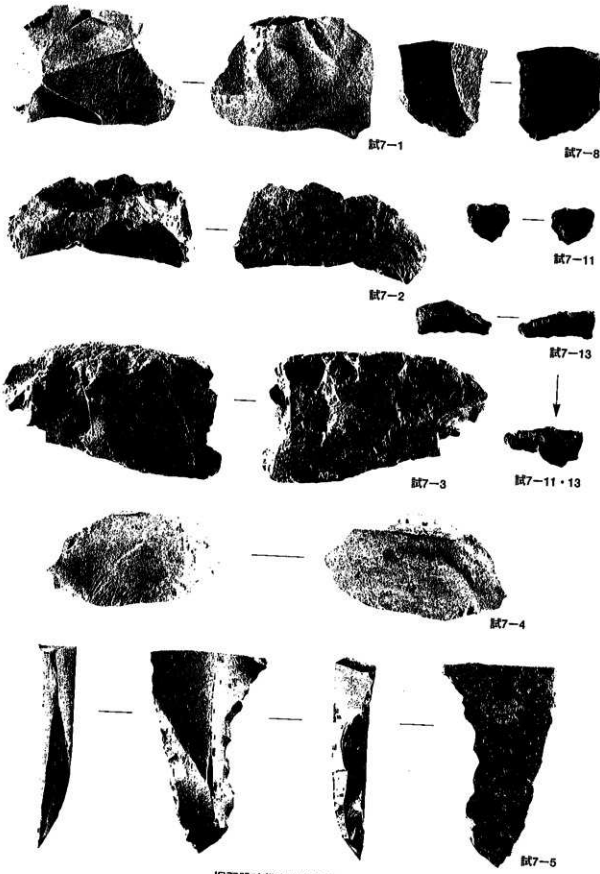
1号住居跡遺物出土状態（西→）

1号住居跡遺物出土状態近景（北→）

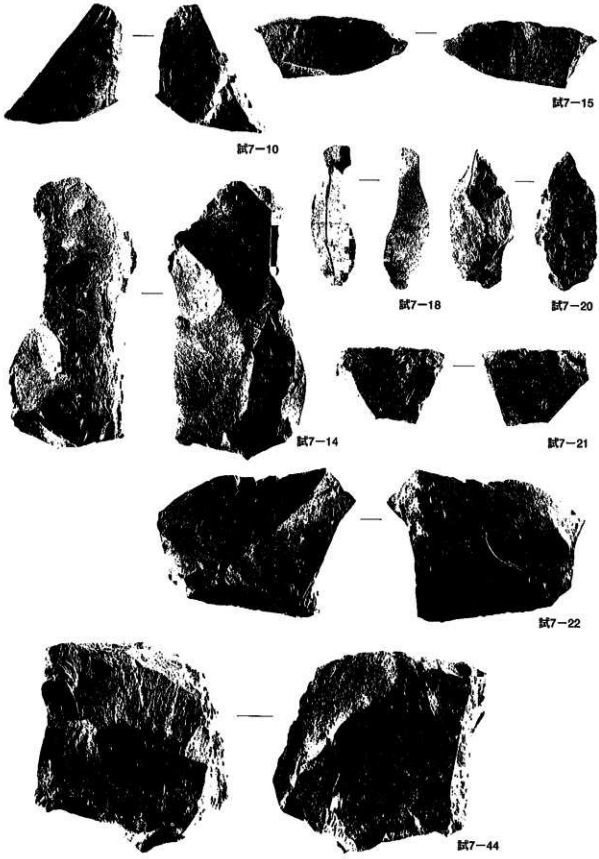
1号住居跡カマド（西→）

1号住居跡・12号土坑（西→）

PL16

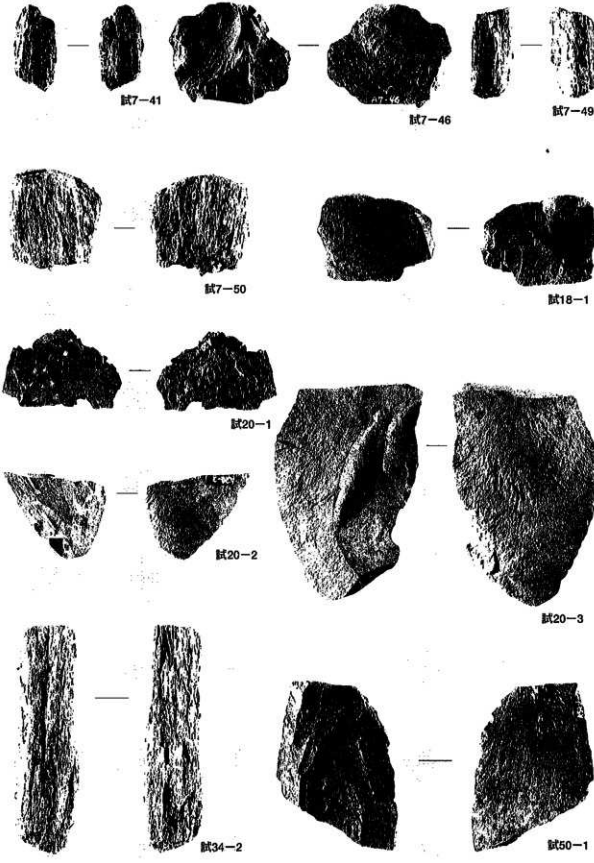


旧石器時代出土遺物①

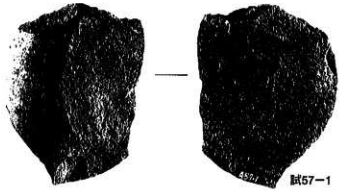


旧石器時代出土遺物②

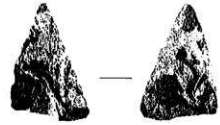
PL18



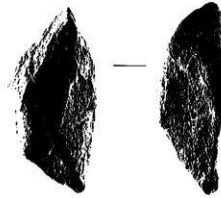
旧石器時代出土遺物③



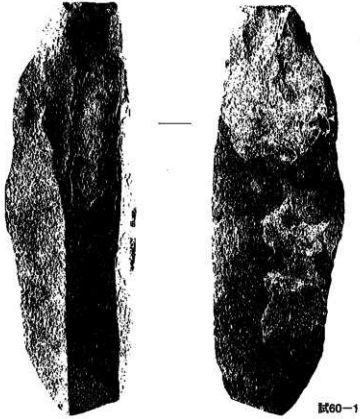
試57−1



試67−1



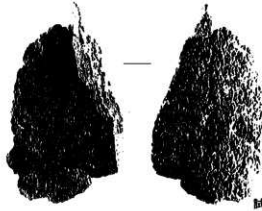
試67−2



試60−1

試67−3

試67−2・3

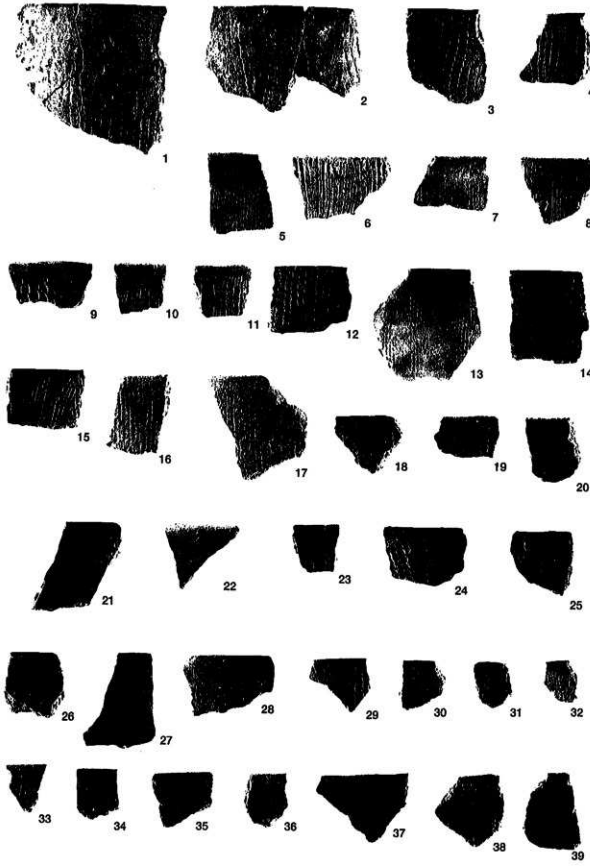


試83−1

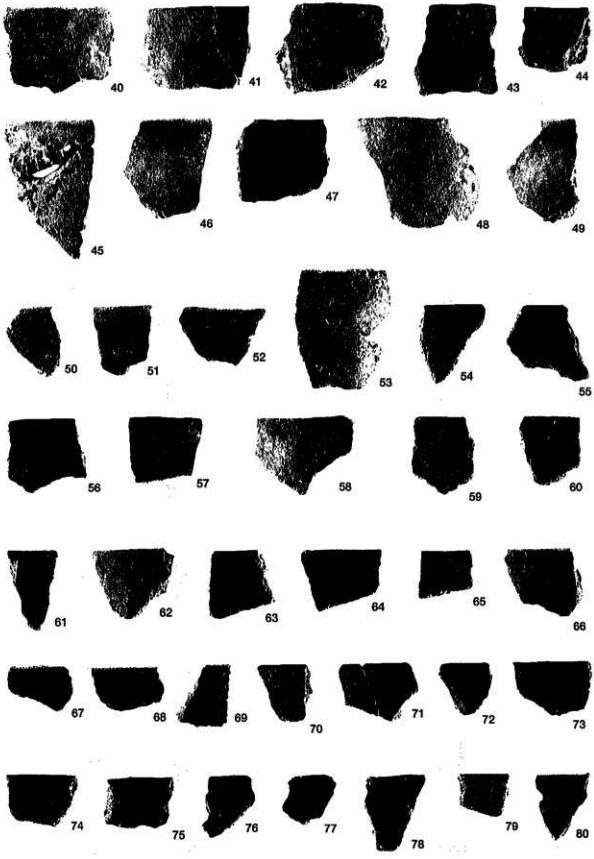
試85−1

旧石器時代出土遺物④

PL20

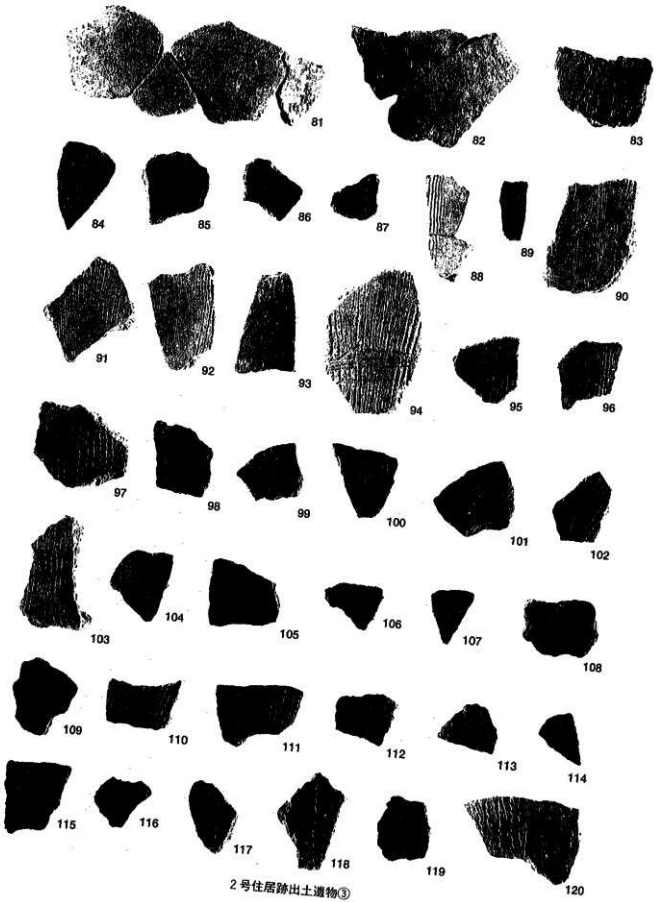


2号住居跡出土遺物①

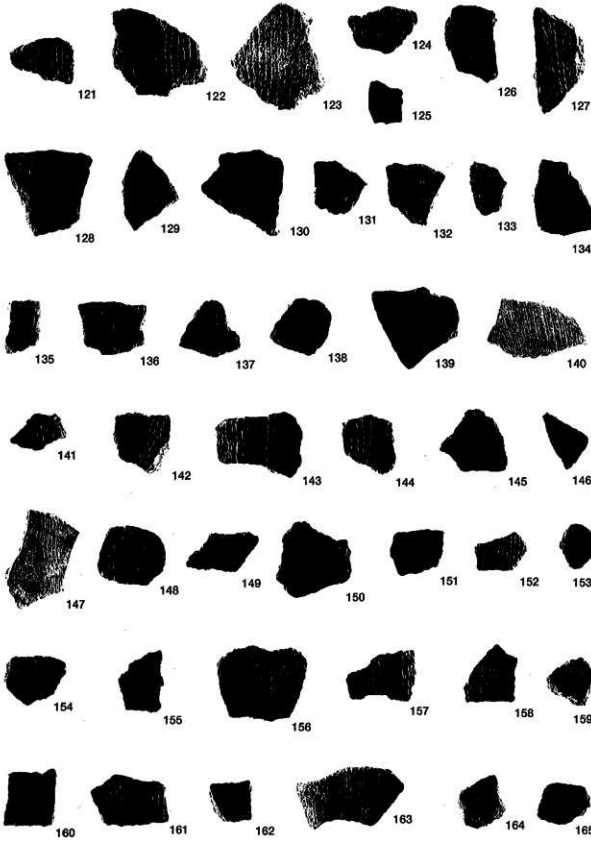

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80

2号住居跡出土遺物②

PL22

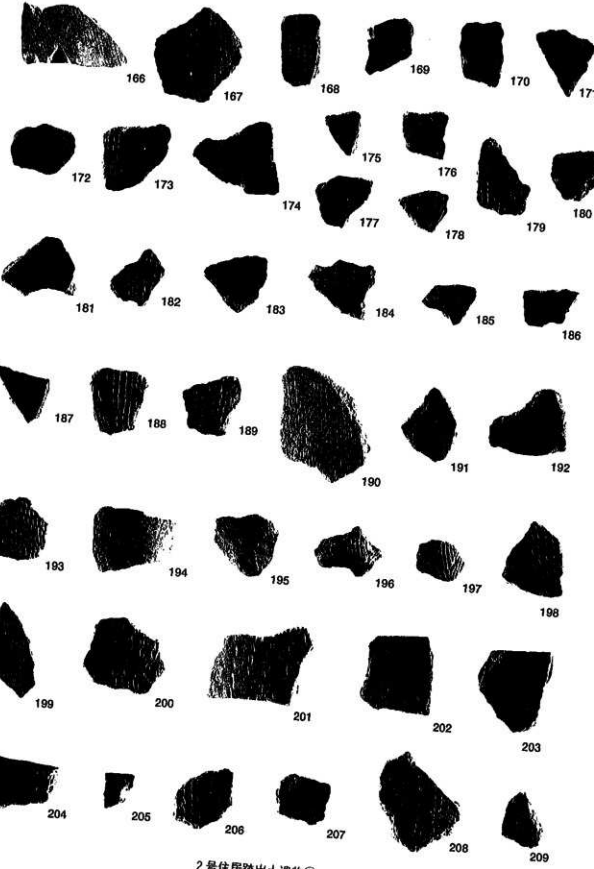


2号住居跡出土遺物③

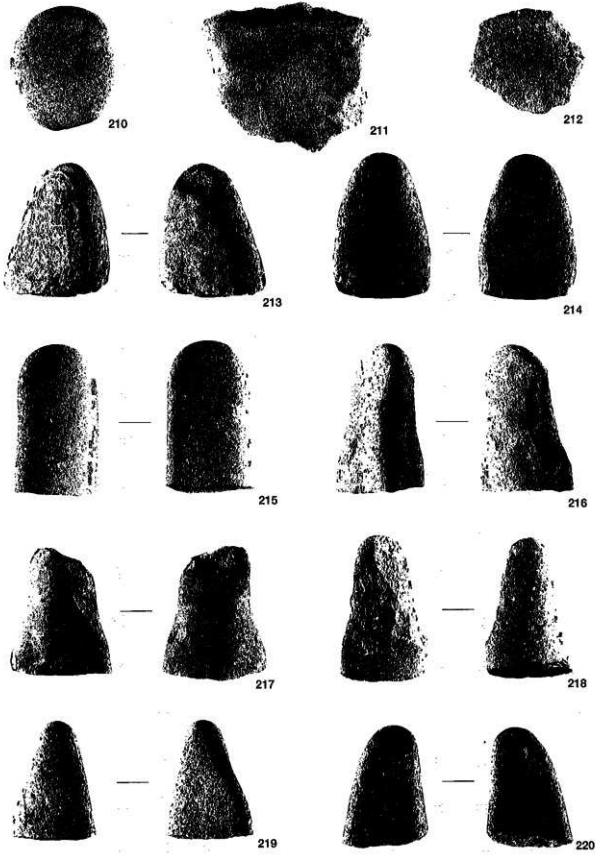

121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165

2号住居跡出土遺物④

PL24

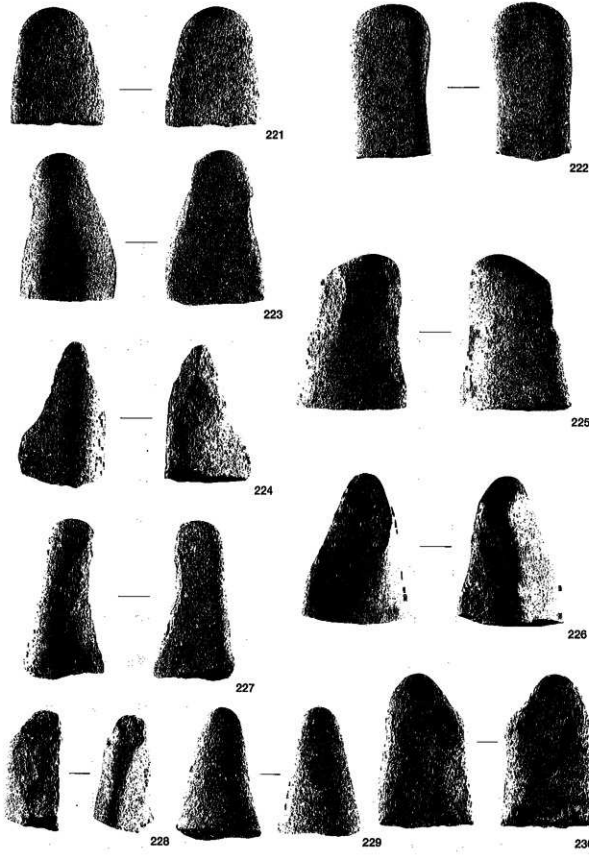


2号住居跡出土遺物⑤

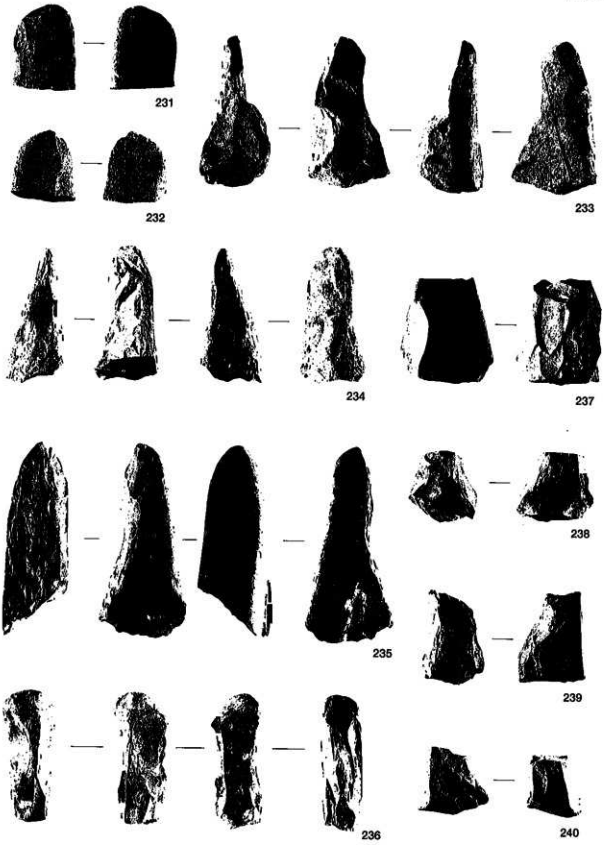


2号住居跡出土遺物⑥

PL26

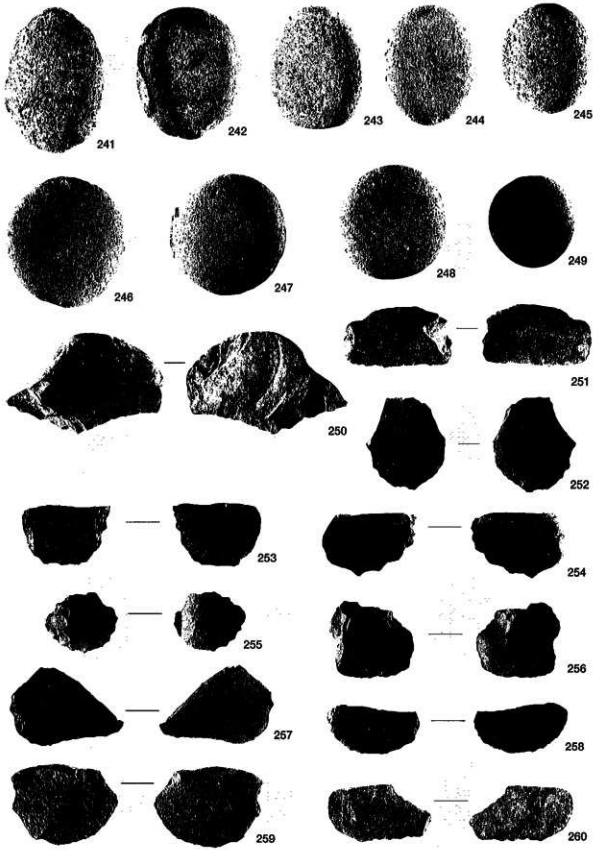


2号住居跡出土遺物⑦

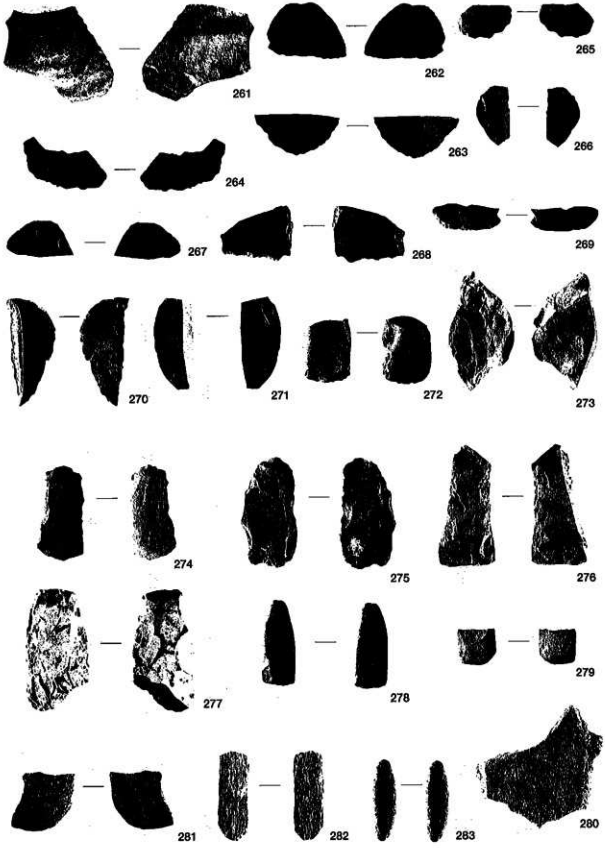


2号住居跡出土遺物⑧

PL28

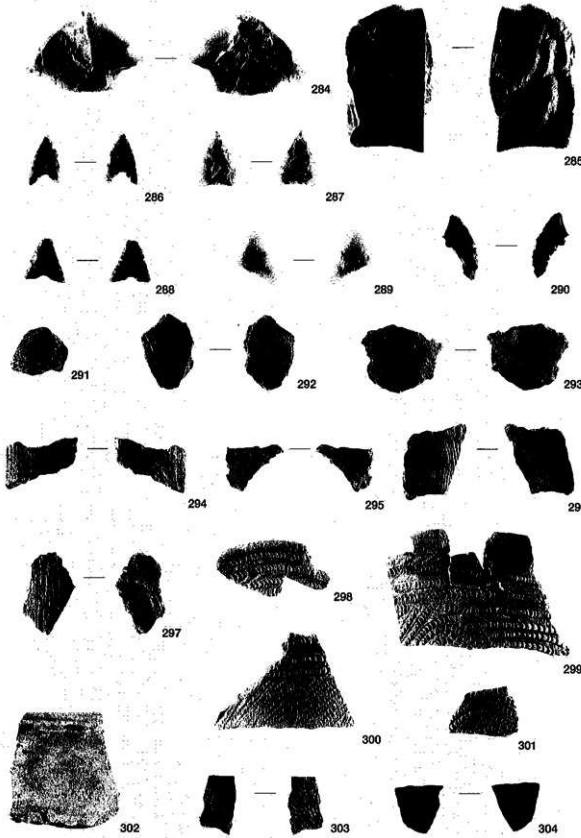


2号住居跡出土遺物⑨

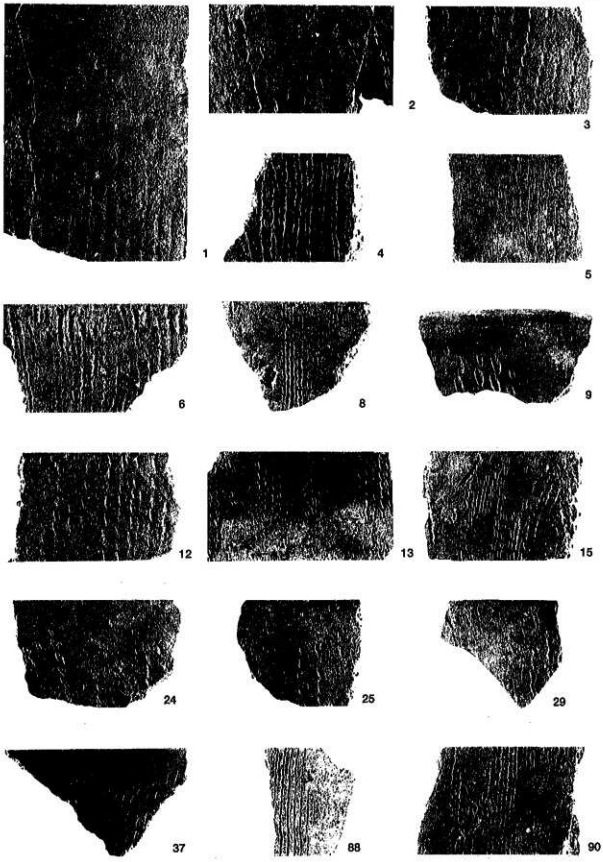

261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283

2号住居跡出土遺物⑩

PL30



2号住居跡出土遺物⑪



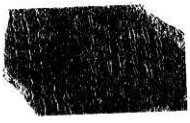
2号住居跡出土燃糸文系土器原寸大写真①

PL32

91

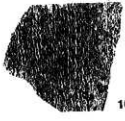
92

94


97

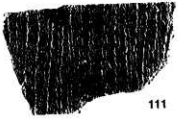
100

101

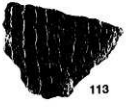

104

108

110


111

112


113

114

117

118

119

120

121

2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真②

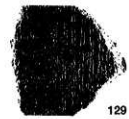
122

123

124

125

127


129

130

131

136

139

140

142

143

144

147

150

151

156

2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真③

PL34

157

158

159

161

163

164

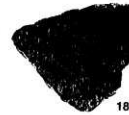
166

168

173

177

182


183

184

188

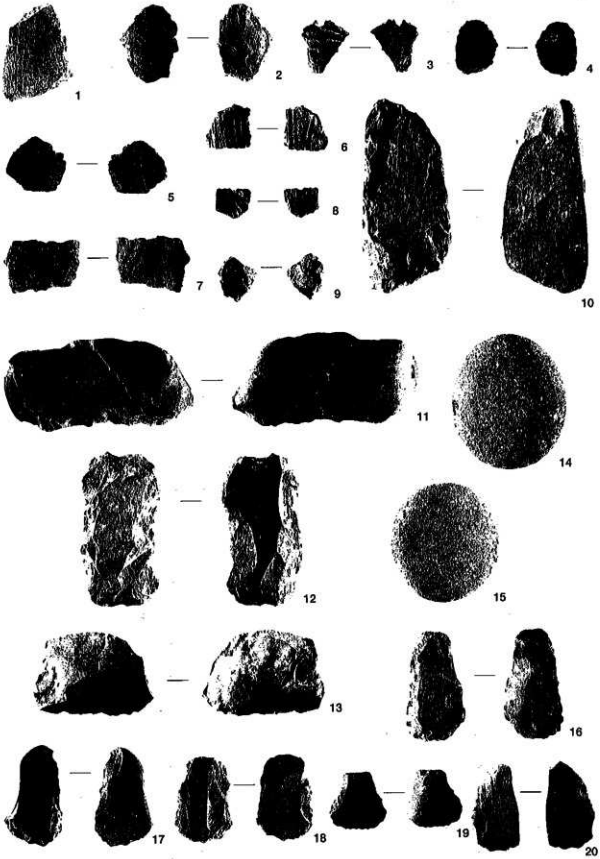
189

191

192

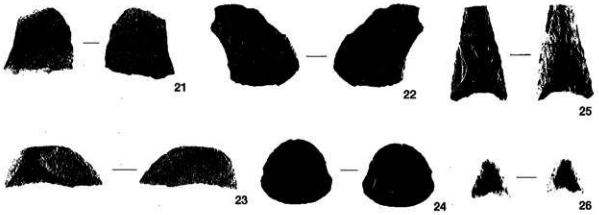
197

2号住居跡出土撚糸文系土器原寸大写真④

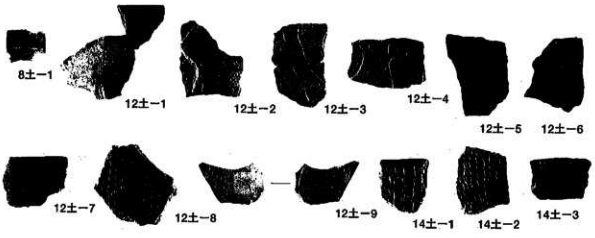


E－16グリッド出土遺物①

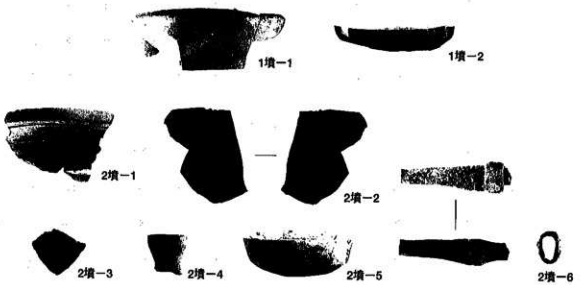
PL36



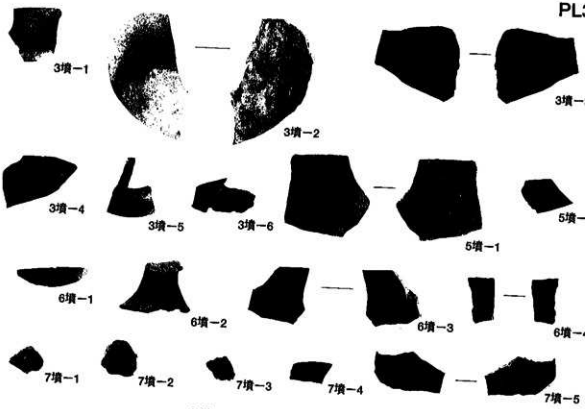
E－16グリッド出土遺物②



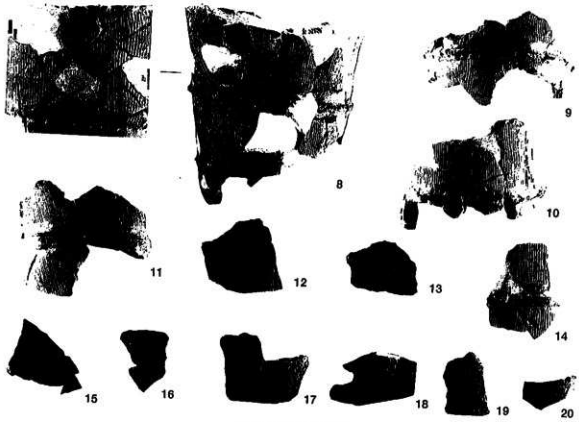
土坑出土遺物



1号・2号古墳出土遺物

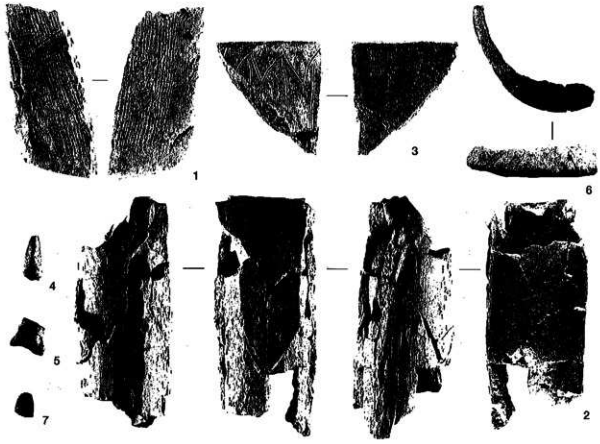


3号・5号・6号・7号古墳出遺物

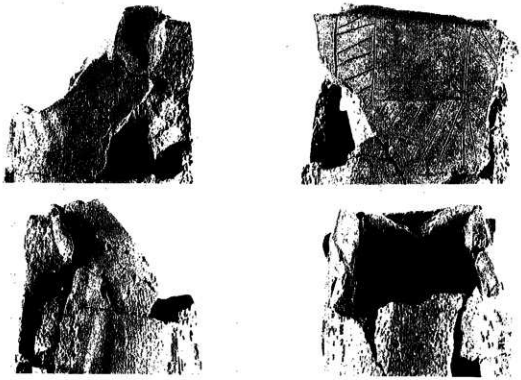


8号古墳出土遺物①

PL38

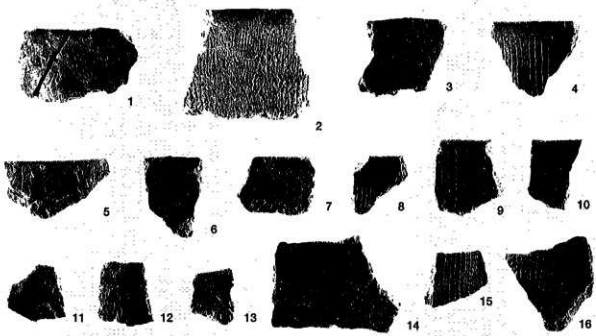


8号古墳出土遺物②



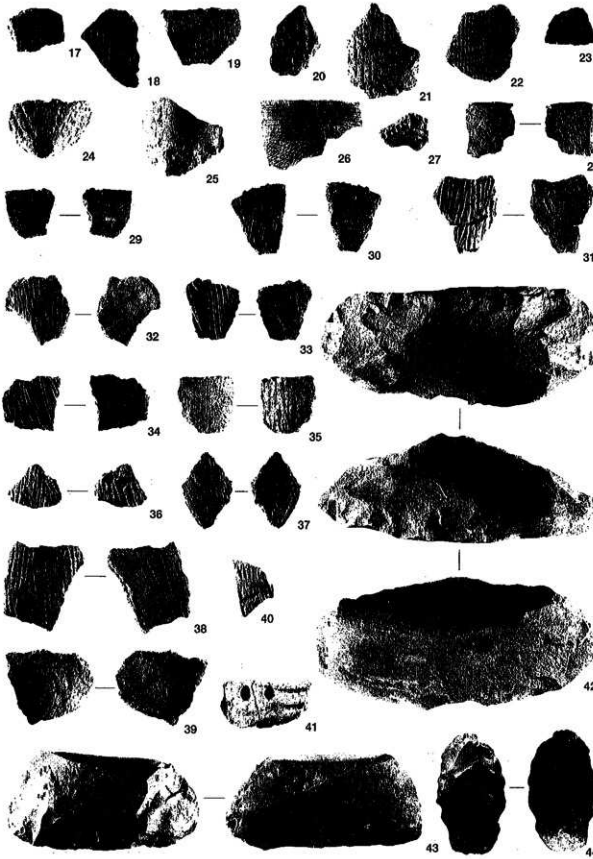
8号古墳出土遺物2 縄部写真

1号住居跡出土遺物

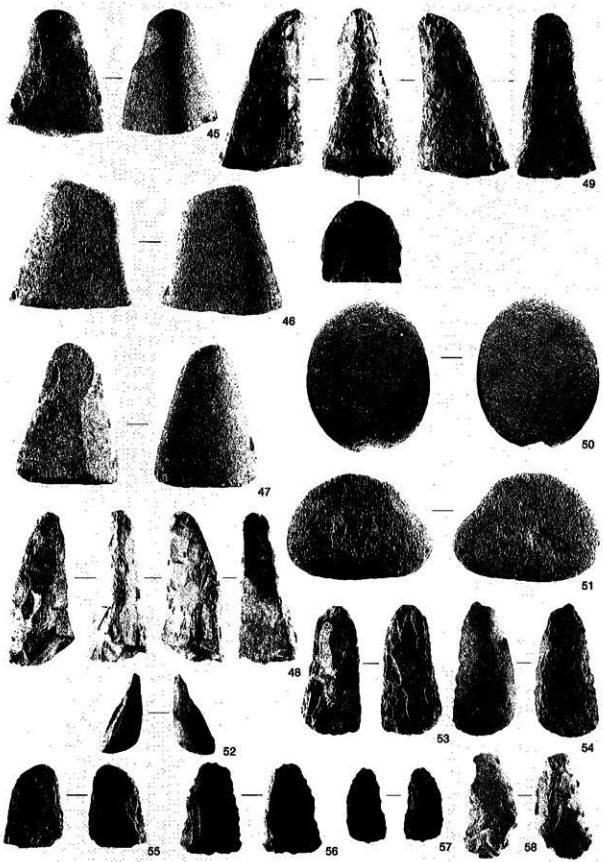


遺構外出土遺物①

PL40

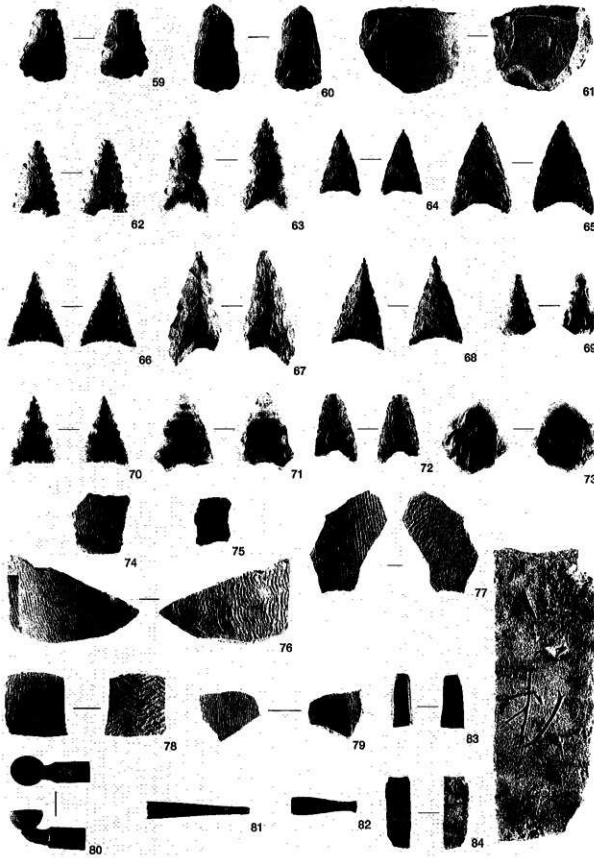


遺構外出土遺物②



遺構外出土遺物③

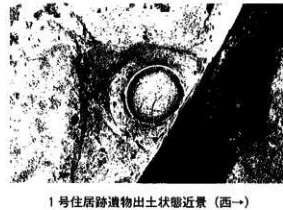
PL42



遺構外出土遺物④

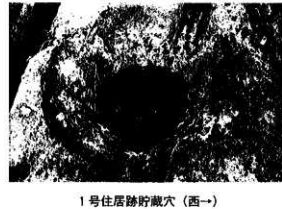
1号住居跡（西→）

1号住居跡カマド遺物出土状態（西→）



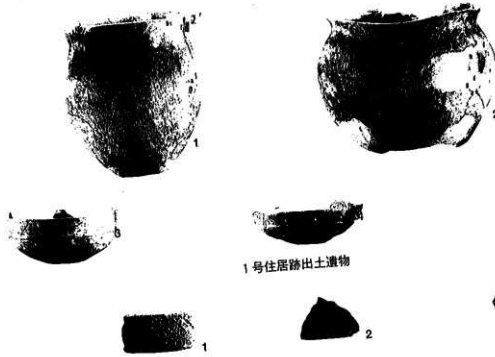
1号住居跡遺物出土状態近景（西→）

1号住居跡カマド（西→）



1号住居跡貯蔵穴（西→）

PL44



1号住居跡出土遺物

遺構外出土遺物

参考写真　女堀跡（西→）

吾妻遺跡

印刷　平成10年3月25日
発行　平成10年3月31日
編集　山武考古学研究所
発行　県立しろがね学園遺跡調査会
印刷　㈱文化総合企画
TEL　0476－93－0593